

恢復したかも知れぬ。

▲四〇一。「奴僕」の制度は印度では今日も普通に行はれて居る。救世軍は到る處に於て人々を借金と其の凡ての悪とより自由にするやう助けんと努力して居る。イストラエル國民の間で奴僕の様はヨベルの年までよりは永く續くことが出来なかつた(レビ記廿五〇卅九一五十四)。

△二。パレスチナでは油は、今日の人のバターを用ふる如くに、料理に用ゐたり、又はパンに付けて食へたりした。

聖書の教訓

一、悪青年等刑罰を受く(二〇廿三—廿五)

(イ) 懶禮拜者の間に住む。此等の青年は偶像禮拜者なる父母によりて育てられ、無智で、亂暴で、何でも自分の解らぬ者なら皆嘲つた。今や彼等は彼等の受け得る唯一の種類の教育を加へらるゝことになつた。

(ロ) エリシヤを嘲笑ふ。神への不敬と神の民への不尊とは大抵相伴ふものである。何れも高慢と無智との結果であつて、此は神様をして祝福を與ふることを得ざらしめる。何時でも神様の御事業、聖名、家、神の僕、御言葉(聖書)及び神様に關する事は謹んで敬の心を以て語り、又扱へ。

を祈つて居る時にそれを集めることが屢々貴君の頭に思浮んで来る。

(ハ) 油は盡きず。油を取つて仕舞つて置いた時には何の變化もなかつたが寡婦が注ぐと増した。多くの人は小瓶を棚の上に仕舞つて置く。「餘り小さくて役に立たぬ」としてそれで空器を集めることも、注ぎ出すこともしない。私共の努力——怠慢ではない——を祝福することが、神様の私共を助け給ふやり方である。

(ニ) 救はれて仕合。今の世の各個人に對するエリシヤの命令は「勤勞して借財を拂へ」である。何となれば(一) 拂

(ハ) 警戒を聽容れず。エリシヤの譴責の顔附も効がなかつた。故に言葉が必要となつた(エレミヤ記四十八〇十)。性質は柔和な愛のある人であつたが、主の御爲に必要な時には厳しい態度を取ることが出来た。

(三) 熊によりて罰を受く。罰は神様から下つたので、預言者からではない。エリシヤは多分熊の事は何も知らなかつたのであらうが、神様は其の使者の味方となり給ふことはこれによりて證明せられた。此の恐ろしい經驗も此の青年等に一生忘れられぬ教訓を與へる爲には必要であつた。その如く憐憫を以てして効のない時は、神様は刑罰を與へ給ふ。

二、父を失ひし青年等助を受く(四〇一—七)

(イ) 奴僕にせられんとす。罪なき者が他の人の借金の爲に如何に苦むかを見よ! 死別の悲哀は屢々借金と貧乏とによりて一層悪化せらる。此處には儉約と先を考へることを學べとの凡ての人への教訓がある。

(ロ) 器物を借り集む。エリシヤは先づ彼女に何が有るか尋ね、それを本手に仕事をさせた。その如く今日の我々も一番小さな「小瓶」をでも決して等閑にしてはならぬ。導き

ふべきものを拂はざるは盗みである(出埃及記廿〇十五)。(二) 今日も多くの人々は、たゞ其の拂ふべきものを拂はざるが故に重荷を負ひ、失敗に陥ることすらある。(三) 彼の人はお金が入らないのだ」と云ふことが口實にはならぬ。貴君は自分の良心より借金の重荷を取去らねばならぬ。(四) 未済の借金の重荷に押へ附けられて居つては、自重心もなくなり、全き救を證言することも出来ない(エレミヤ記廿二〇十三)。(五) 自分の拵へたものにもせよ、自分の責任になつてゐるものにもせよ、借金を拂つて仕舞ふことは貴君の本當に救はれたることを示す一つの證據である。

少年科 (六年生以下三年生迄)

今日は神様の豫言者エリシヤが二通りの異つた青年に出會つたところを見るのである。エリシヤは何れをも皆助け度いて思つたのであるが、彼等の行爲の如何によつてさうは出来なかつた、それで止むを得ず異つた扱をする事になつた。高壇から列王紀略上四〇一—七を朗讀。

或日エリシヤはベテルへの道を旅して居つた。此の町には、それより凡そ百年程前に一人の悪王が金の犢を立て、人民にそれを拜めと云つた。其の時以來ベテルの大抵の住民は此の偶像に仕へ、子供等をも同じやうにする事を教へて育てた。エリシヤは町の近くへ來た時に、一群の青年共に出會つた。話にならぬ無智な無禮な者共で、エリシヤを嘲つたり笑つたりし始めた。「禿頭よ昇れ、禿頭よ昇れ」と云つた、多分「天に昇れ」との意味で、エリヤが天に昇つた話を聞いて居つたのであらう。

エリシヤは之に心を痛め、後を振かへつて彼等を見詰めた、けれども尙ほ止めないから、若し改めないとは恐しいことになる、神様の聖名によつて、嚴かに彼等に警戒を與へた。神様は此の青年共の所作を御覺になり、二匹の大きな熊が森の中から出て來て其の中の四十二人のものを裂くのを黙つて許してお在になつた。若者共はこれで悟つた。自分等が神様の僕に不禮な事をしたから、神様が其の罰をしてお在になるのであると。エリシヤは悲しく

思ひつゝ、カルメル山への道に進んだ。

話變つて或日の事、一人の氣の毒な寡婦が大變な心配事を有つてエリシヤのところへ來た。夫は善い人だつたが死に、後に借金が残つたが妻はそれを拂へない、だから其の二人の息子が連れられて行つて、借金拂の爲に奴隸に賣られようとして居つた。エリシヤは其のあはれな物語に耳を傾けて居つた後で、其の母親に尋ねた「われなんちの爲に何をなすべきや。汝の家に如何なる物あるか、われに告げよ」と。「僅かの油のほかには、何も残つて居りませんので御座ります」と彼女が答へた。

そこでエリシヤは彼女に、行つて近所隣から有り丈けの空の茶碗、鉢、壺などを借り集め、戸を閉ぢて茶碗や鉢が皆一杯になる迄、壺の油を注ぎ出すやうにと告げた。

母は家に歸り、其の言葉通りに容器を借集め、家の戸を締めて自分と二人の息子との外、誰も入つて來ぬやうにした。二人の息子は次ぎ／＼に容器を持來り、母はそれに油を注ぎ出した。お仕舞に母は「早く、何か他の容器を持つてお出で」と云つた。息子等は「借りて來

た物は皆一杯になつて居ますよ」と答へた。僅かしかなかつた油が、其の時まで、如何程注いでも／＼盡きなかつた。

今一度母はエリシヤの所に行き、其の不思議な出来事を話した。すると彼は「往きて油をうりて其の借金を拂ひ、其の餘分の金をもて汝と汝の子等樂しき生計をなすべし」と云つた。

主なる教訓

神様の僕が私共に恵を下さると否とは私共の行爲の如何に因る。

勸告

悪青年等はエリシヤを恐れたが、二人の息子は彼を愛した、何となればエリシヤのお蔭で、奴隷に賣られずに濟み、母と共に家で暮せるやうになつたからである。神様の僕等は何時でも貴君を助けて幸福ならしめ度いと思つてお在になる。併し若し貴君が悪しく且つ不従順であるならば、彼等はそれを喜ぶことが出来ず、貴君の爲に止むを得ず罰をさへしななければならぬ事になる。

(例) ショー君は盗人で、よく林檎や胡桃(クルミ)やお菓子などを店や露店から盗んで居つた。二度も巡査に捕へられて警察へ連れられた。二度目の時には思切り鞭で打たれた。ショー君は巡査を自分の敵と思つて居た。併し後にショー君は救を受け物を盗んだりする代りに救世軍に来るやうになつた。或日の事澤山の古い友達が町中彼の後に付き従ふて笑つたり、嘲つたり、名前を呼んだり、塵や石を投げたりした。丁度そこへ巡査が来て、悪少年共を逐拂つて下さつた。そしてショー君に斯う言つた「今は僕をお友達だと思つていよ、僕は君が善い事をしようと思つて居ることを知つて居るか」と。

第三十課 奴隷娘 (七月二十四日)

——(列王紀略下五〇一—一九)——

諺誦聖句——「おそるな、語れ、黙すな。我なんぢと偕にあり、誰も汝を攻めて害ふ者なからん」(使徒行傳十八〇九、十)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

△一。ナアマンの病氣は白癩癩で、癩病の中でも最もた

ちの悪いものであつた。不治の病でありながら、仕事が出来ない程にも悪くない。異教國では癩病に關する法律はイストラエル國ほど嚴重でなかつた。

△二。これは境界侵入戦の一種である。戦國ではなく、絶間なく國境に侵入して奪掠を行ふのである。アフリカではさう云ふ風な奴隸「遠征」が今尚ほ行はれて居る。

△五。これは多分金拾貳萬圓位に當るのであらう、それはその主君がナアマンに高い値を付けて居た證據である。

△十二。ダマスコの河は水が澄んで居る、併しヨルダン河は大低濁つて居る。

△十六。エリシヤはさう云ふ治療は金で買へるものでないことをナアマンに示さうと思つた(イザヤ書五十五章)。ナアマンの知つて居た貪慾な異教の祭司等とは實に趣が異つて居る。

△十七。イスラエルの神様も他の偶像的神々のやうに、其の領分以外の土地では本式に禮拜することの出来ぬものとナアマンは思つて居つた。

聖書の教訓

一、奴隸娘の證言(一一四)

(イ)癩病に憫む大將。ナアマンが其の病氣になるにも拘らず成し遂げたる事は實に驚くべきものであつた。これは彼の勇氣と決斷力とを示して居る。「併し癩病であつた」と

云ふ其の「併し」が彼を神様に結附ける鎖の環となつた。それがなかつたならば一個の異教徒の儘で一生を終つたであらう。私共に來る困難も、ナアマンのと同じく、神様の愛より出たお計らひである。

(ロ)小きき娘の言葉。此の捕虜になつた娘の模範は、家を離れて行つたり、初めて知らぬ所へ行つたりする青年諸君に大いに益になる。(一)家を離れた時にも宗教を忘れなかつた。(二)如何なる事があつても其の宗教と信仰とを變へなかつた。雇主は唯貴君の勞力を買ふのであつて、諸君の真心を買ふのではない。(三)自分でナアマンを直すことが出来ないからとて黙して居らずに、神様の力に觸れて居る然るべき人物を紹介した。(四)彼女は(イ)憐憫、(ロ)主人への忠義心、(ハ)善を以て惡に報いる等の徳を示した。

二、異教の國王の尋問(五一七)

(イ)イスラエル王への手紙。其の手紙と要求とが間違つた人の所に行つたのは神様の御計畫の一部であつた。神様は如何なる人間の力も彼を癒し能はぬことをナアマンに示さうと思召した。私共が間違と思ふ事を神様は御榮光の爲に利用し給ふことが出来る。

傳九〇六)と。

四、ナアマンの全快(三三一九)

(イ)ヨルダンにて潔まる。洗ふ丈けが問題でなく、服従と信仰とが大切であつた。その如く多くの人は「何故悔改の座に行かればなりませんか」と云ふ。併し若し、ナアマンの場合に於ける如く、これが貴君に對する神様の道ならば、貴君は其處に行かればならぬ、さもなければ潔められず居られればならぬ。

(ロ)神を禮拜す。ナアマンは感謝に満ち、自分を癒して下さつた唯一人のお方の外には他の如何なる神にも仕へないといふ決心した。彼は眞直な人であつたから、自分が其の王と共に止むを得ず異教徒の神殿に行かればならぬ事情をエリシヤに知つて戴かれなければならなかつたのである。彼は肉體を癒され、精神には平和を得て家に歸つた。

(ロ)イスラエル王の驚愕。スリアの王は争を求めて居つたのではない、併しイスラエルの王は猜疑の目を以て之を見誤つた判斷を下した。罪なき行爲をさへも惡解する此の精神を慎め。

三、エリシヤの治療の約束(八一三)

(イ)ナアマンへの簡単な教示。多くの人はナアマンの如くに「エリシヤ」に代を拂ひさへすれば自分の代りに宗教をやつて貰へるかと思つて居る。各人が自分で浸るのが神様の方針である。他の人が救はれるのを見ただけでは役に立たぬ。自分の心と生活とに神様の力を經驗しなければならぬ。

(ロ)ナアマンの愚かな怒。人々は、神様が自分の豫期した通り、思つた通りにして下さらぬと、怒つたり失望したりする。「我思へり」が今日も人々を妨げて居る。正しい精神は云ふ「主よ我に何をなさしめんと爲給ふや」(使徒行

少年科(六年生以下三年生迄)

今日は家からお友達からも遠く離れて居つた奴隸娘が、自分を捕へて行つた人々に神様

の祝福と救助とを齎した話を習ふのである。高壇から列王紀略下五〇一—四を朗讀

スリヤの國に陸軍大將でナアマンと云ふ勇ましい偉い人が居つた。彼のお蔭でスリヤ人は戦争にも勝つたのであるが、彼は癩病人であつた。一人のユダヤの娘が捕虜となつてイスラエルから連れて行かれ、此のナアマンの奥様に仕へることになつた。

或日、此の小さな奴隷娘が奥様に「若し家の御主人がサマリヤに居る神様の豫言者の所へお出でになることが出来ましたならば！ 其のお方は屹度御主人を直して下さることが出来ますと存じます」と云つた。誰かトナアマンに其のユダヤの娘の云つた事を話した。

間もなく其の娘の言葉がナアマン大將の主君なるスリヤ王の耳に届いた。王はイスラエルの王に宛て、手紙を認め、金や銀や立派な着物など結構な禮物と共に、それをナアマンに托して送つた。其の手紙には「この書汝にいたらば、視よ我わが臣ナアマンをなんぢに遣はせるなり。こは汝にその癩病の癒されんがためなり」と書いてあつた。

イエスラエルの王は此の手紙を讀んだ時に、驚きの餘りに着て居つた着物を引裂いて云つ

た。「自分に癩病人を送つて之を直せとは彼の王は自分を神様だと思つてゐるのだらうか。これは争ひ始めようとの下拵へに過ぎないのだ」と。これでは小さな娘のした事は害にこそなれ、何の益にもならなかつたやうに見えた。尙ほ後を見ませう。

神様の豫言者エリシヤが王の心配事を聞いたので、王の所へ人を遣して「何故御心をお苦めになりますか。ナアマンを私の許にお寄越しなさいませ、さうすれば彼はイスラエルの中に神様に仕へて居る者のあることを知るで御座りませう」と云つた。そこでナアマンは其の馬や車や家來等を引連れて豫言者の家に行き、戸の外で待つて居た。エリシヤは使を出して彼に傳へさせた「汝ゆきて身をヨルダンに七たび洗へ、然ば汝は癒ゆべし」と。

ナアマンは甚だしく怒り「我は彼かならず我がもとにいできたり立ち、その神エホバの名を呼びてその所の上に手を動かして癩病を癒すならんと思へり。我が國の河はイスラエルのすべての河水にまさるにあらずや。我わが國の河に身を洗うて清まることを得ざらんや」と云つた。斯く怒り乍ら去つて仕舞つた。

ところが家來共はナアマンを宥めて「豫言者が貴君に大層な事をせよと命じてもそれを爲さるで御座りませう。況て『身を洗ひて清くなれ』と云ふのに其の通りなさらんと云ふ道理が御座りませうか」と云つた。ナアマンはそれを聽容れ、七度ヨルダン河に身を浸すと、其の肉が子供の如くに奇麗になり、病は癒えた。

ナアマンはエリシヤの家に歸り彼の前に立つた。「私は今イスラエルの外には世界中に神様はないことを知りました。何うか一つ贈物を差上げさせて戴きたう御座ります」と云つた。併しエリシヤは斷つた。さうするとナアマンは、最早僞の神々を拜まぬ積りで、眞の神様の祭壇を築く爲に土を少々持ち歸らせて下さいと願うた。ナアマンは、自分が國へ歸ると主君と共に異教の神殿に詣ることが自分の義務——自分の願望ではないが——であるとエリシヤに話した。預言者は彼に「なんぢ安んじて去れ」と云つた、そしてナアマンは喜悅と感謝とに満ちて家に歸つた。

主なる教訓

神様は子供の證言をも用ひ給ふことが出来る。

勸告

疑もなく彼の小娘は、捕虜にせられて行く前に、エリシヤを見たり、人から彼の事を聞いたたり、誰かエリシヤに癒して戴いた人に會つたりしたことがあつたのであらう。その如く先づ自分でイエス様を實際に助け給ふお方として知り、次にはイエス様が自分にして下さつた事を他の人に知らせなさい。さうすれば貴君も、彼の小娘の如くに、人に祝福を與へるものとなるであらう。

(例)ローダさんは少年兵で、救世軍の大集會が来るので楽しみにして待つて居つた。二日前になつてから猶紅熱と云ふ病氣になり、看護婦に連れられて病院へ行つた。ローダさんは大層失望した。併し勇ましく家を去つた。途中看護婦さんに自分が大將の演説が聞かれないので失望したと話し、次に又教主の事、救世軍の事を話した。後になつて其の看護婦さんが云つた「私は神様が私に此の小さい娘を寄越して下さつたのだと信じます。長い間靈魂に苦みがあつて、何うして善いかな知らずに居ました。けれども彼の娘の言葉が私には大きな恵となり、お蔭でイエス様に心を向けるやうになりました」と。ローダさんは自分が恵を受け度いと思つて居つたのであるが、其の代りに神様のお助で誰か他の人に恵を受けさせることが出来た。

第三十一課 第三決心日 (七月卅一日)

ヤベツ (歴代志略上四〇九、十)

誦讀聖句——「悪者の怖るゝところは自己にきたり、義者のねがふところはあたへらる」

(箴言十〇廿四)

注意——第五課の初めにある注意書は今日の決心日にも當該まる。
司會者への助言——此の學課は困難な境遇の位置に置かれて居るが爲に失望して居るやうな子供を導いて、神様の御助を求めしめるやうに教ふべきである。其の困難に打勝つ方法は神様に頼る他はないのである。之によりて彼等に人間最高の而して唯一の成功が何であるかを諒解せしめ、又勵んで之を求めしめるやう助けねばならぬ。
お話の進むに連れて圖(一九六ページを見よ)の如き、繪を黒板に書き、紙で切抜いた人形に「ヤベツ」と書いてピンで留置き、必要に応じて動かすのである。

▲青年科及び少年科

聖書の方々にある無味乾燥だと思ひ易くなるやうな人の名を澤山書き列ねた一つの表の真中に、ヤベツと云ふ一人の男の子の事を書いた興味のある二つの節がある。お聴きなさい(聖

書を自分で讀むか誰かに讀ませるかする)。ヤベツの事は僅かこれ丈けしか知られて居ないけれども、それでも彼の物語は私共に助となる。

一、初めの困難(九節)。ヤベツはイスラエルの十二支派中第一等なるユダの支派に屬して居つた。それでも彼は始めには色々の容易ならぬ困難と戦はねばならなかつた。

(イ)兄弟は助とならず。彼等は何う云ふ風に善くなかつたかは私共に解らないが、餘り感心の出來ぬ人であつた。或は人を嘔したり、嘘を云つたり、善くない言葉を使つたりしては、ヤベツの事を笑つたりしたのかも知れぬ。ヤベツは兄弟等は何をしようと思つたか、自分は正しい高尚な行爲をしようと思つたか、決心したか。

(ロ)名前も自分に逆ふ。ヤベツが生れた時に、お母さんは何か大變な苦しい事にお會ひになつた——何か重い病氣に罹つたか、夫が死んだか、子供の中の誰か善くない事をしたか、或は非常に貧乏であつたのかも知れない。それで生れた赤坊の名を「苦痛」と付けた(「ヤベツ」とは其の意味)。當時の人は名は當人の性質を表すものと思つたから、近所の人々はヤベ

ヅを輕蔑して「お前なんか偉くならうと力んだつて駄目だ。第一お前の名が悪い、「苦痛」を
持つて生れたのだから一生苦むより外に仕方のないものと思へ」など云つたかも知れぬ。
斯う云ふ風に彼を失望させる種は少くなかつた。

勸告——貴君は基督信者の家庭に生れたかも知れぬ、少くとも自分は一心にイエス様を信
じて善い人にならうと思つて居ることかと思ふ。それでも、ヤベツの如く、色々の困難が
あつて自分の妨げとなつて居るかも知れぬ。誰か貴君を動けて下さるべき筈の人が却つて妨
げをして居るかも知れぬ。又家の中に悲しい事あり、善くない事が行はれて居るかも知れぬ。
或は貴君は自分の悪行爲の爲に既に悪名を取つて、人々から「我が儘の誰」、「嘘吐きの誰」
「慾張りの誰」など呼ばれて居るかも知れない。尙ほ又、自分の短氣、強情、高慢などの業
へる罪の力は餘りに強くて逆も勝てぬやうに見えるかも知れない。若しさうならば、貴君は
ヤベツの「子供の時のやうに、廣い「困る事」河の岸に立つて居るのである「大人の時の成
功」の彼岸に達するには此の河を渡らねばならぬ（河岸と河とを描き、字を書添へる。ヤベ

ヅと書いた人形を「子供の時の希望」の岸にピンで止める。

二、敬神の祈禱（十節）。困難の色々あるにも拘らず、ヤベツは智く神様のお助を求めた。金持
になるとか、學問のある人になること等でなしに、神様を喜ばせる事、善い人になる事を目
的とした。ヤベツの祈つた四つの事を御覽なさい。

(イ) 神様の御恵。假令此の世の物に不自由することがあつても、若し神様の笑面と、交通
と寵愛とを受けて居るならば、其處に本當の喜悅と樂みとがあるのである。貴君に於ても同
様である。

(ロ) 役に立つ生涯。「我が境を擴め」とは、更に多くの人々に助を與へ、感化を及ぼす機會
を私に與へ給へと云ふ意味である。これは貴君も亦祈り求むべき善い事である。

(ハ) 神様の御助。ヤベツは神様の力ある「御手」が彼の味方となつて敵と戦つて下さるやう
にと願つた。貴君も亦自分の「敵」に打勝てるやう神様のお助を求めなさい。

(ニ) 聖き生涯。ヤベツは「我をして災難に罹りてくるしむこと無からしめ給へ」と祈つた。

多くのわざはひは罪から起るものである。又悪を爲して神様の御心を痛め奉るほどの痛ましい災難と云ふはない。聖き生涯は幸福の源である。

勸告——今からヤベツの如くに、何よりも第一に罪より救はれ自由になり、役に立つ生涯を送る爲に神様が助け恵んで下さるやう祈ることを始めなさい。そして一生の間始終此の爲に祈り又努めることを続けなさい。「祈禱と決心」とは譬へれば橋のやうなものである(描き、字を書込む)。貴君に何れ程「困る事」が澤山あつても、此の橋を渡れば「大人の時の成功」の彼岸に達することが出来る(「ヤベツ」を殆ど向岸に着かうとする所まで動かす)。併し若し此の「橋」を渡ることを怠ると失敗する。ヤベツも若し神様に祈ることを怠つたならば失敗したであらう——そしたら私共はヤベツの話を聞くこともなかつたであらう。

三、永續する成功(十節)。何時までも永く私共に満足と幸福とを興へる成功は一番上等の成功である。ヤベツの得たのはさう云ふ成功である。

(イ)願ひ叶へらる。聖書には「神その求むる所を允したまふ」と申してある。その如く神様は何時でも、無私な眞實な祈禱をする人には答へ給ふ。ヤベツは神様の恵を味ひ、神様の御助を受け、聖い又役に立つ人になつた。

(ロ)感化は死なす。併し神様は彼の願ひにも優つた事をして下さつた、即ち聖書の中に彼の事が録されるやうにして下さつたことである。ヤベツが死んで三千年以上も経つた今日、その祈禱と模範とがたつた一つの日曜日丈でも幾千と云ふ男女の青年少年の助となつて居る。貴君も若し神様をお喜ばせ申す爲に生きるならば、神様は思ひも寄らぬ色々な方法によつて貴君を恵み、又他の人を祝福する器となし給ふであらう。

勸告——貴君も成長の後には、善良な役に立つ、神様に恵まれた人になると云ふ「大人の時の成功」を得たいであらう。これ以外に生き甲斐のある生涯はない。

主なる教訓

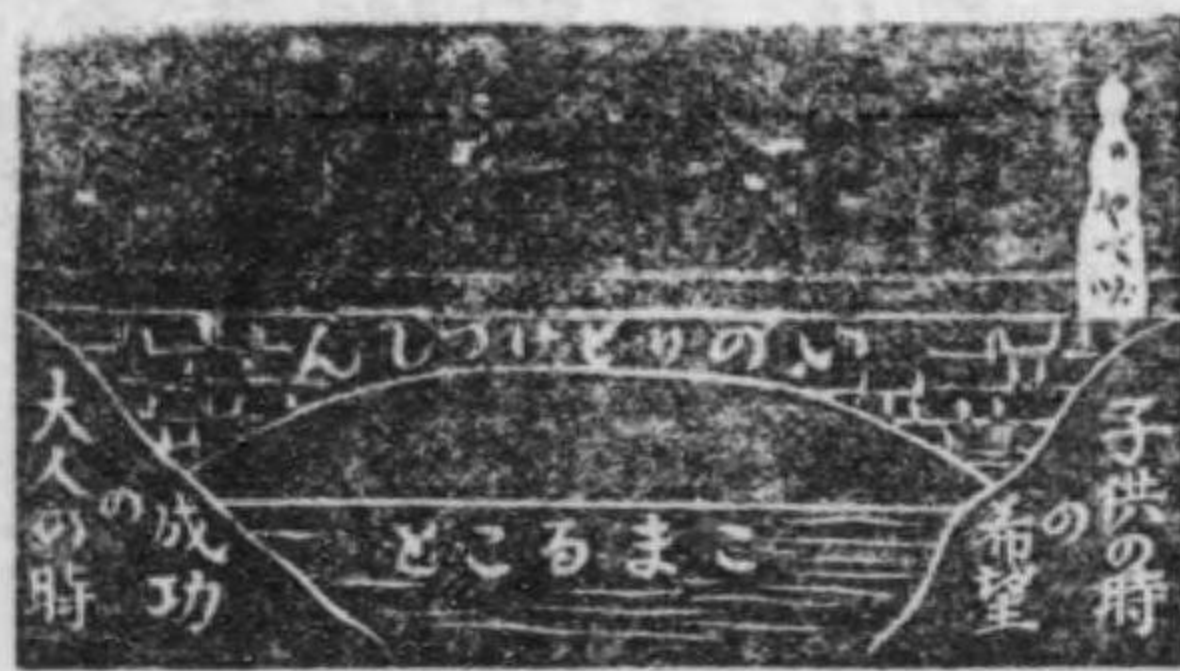
假令色々な困難があつても、今神様を貴君の助主として頼りなさい、然らば神様は貴君の生涯に永續する成功を興へ給ふ。

勸告

貴君はこれまで「私は善い人にはなれない、色々の妨げあり、打勝たねばならぬ榮へる罪が餘りに多過ぎる」と思つて居たかも知れぬ。ヤベツを手本になさい。「今」熱心に神様を求め、其の御助を祈りなさい。そして何時までも其の通りを續けなさい。然らばヤベツになし給うた如く、神様は貴君にも祈禱の答を與へ給ふでつらう。

(悔改の座)。

(例)救世軍の創立者は、子供の時に色々の困難な事があつた、貧乏で、十三歳の時に父は死に、そこで學校へ行けなくなり、幾月もの間毎日長時間の烈しい仕事をした。靈魂の事に就いては殆んど何の教をも受けず、友達もなく、身體も丈夫でなかつた。善い人にならうと思つたけれども初めの間は度々失敗した。それでも神様のお助を求めた。そして「大能の神をしてウキリアム、グリスにある凡てを所有せしめん」と決心した。其の決心をしたのは十五歳の時であつた。貴君も今其の通りをなさい。



第三十二課 ウジヤ王 (八月七日)

——(歴史志略下廿六〇一—廿三)——

諸誦聖句——「人の傲慢はおのれを卑くし、心に謙たる者は榮譽を得」(箴言廿九〇廿三)

青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

△八。ソロモン以來斯くも廣く知られ又尊ばれた王は無かつた。異教の國々さへも彼に貢を納めた(箴言十六〇)。此の凡ての成功が彼を高慢にした。
△十。此等は雨期に水を満たして置く水池であつた。成悽は家畜を保護する番人の爲であつた。
△十五。彼は又發明家であつた。其の戦争に用ふる機械は當時に於ける最新式の發明であつた。
△十六。此の同一行為が神様によりて明白に禁ぜられ、荒野に於て神様によりて罰せられた(民數紀略十六〇廿二、卅九、四十、十八〇七)。ウジヤは多分自分は「例外」と思つたのであらう。

聖書の教訓

一、ウジヤの青年時代(一一五)

(イ)高貴な地位。多くの青年は十六歳の時に政治を始め、自分の方針を選び、自分の生涯を支配する事を始める。ウジヤにダビデ王のあつた如く其の先祖に神を畏れた人物があつて其の模範が彼等を助くるならば結構である。(ロ)父母の模範。凡ての人は何かの點に於て其の上長の模範により學ぶことが出来る。多くの人はウジヤと共に其の善に倣はねばならぬ、他の人々は其の上長の爲したる過失を避けることを固く決心しなければならぬ。(ハ)善良な友達。此のゼカリヤの事は別に知られて居ないが、彼の感化が此の年若き王の生涯に及んで居ることを見るのである。斯の如き友は實に寶である。若し貴君が何時も斯の如き友と偕に居て相談することが出来なければ、

自らに尋ねよ「彼は此處に居たならば何と忠告するであらうか」と。若しウジヤがゼカリヤの死後に此の事を實行したならば、斯の如き災害より救はれて居つたであらうに！

二、ウジヤの偉大(六一五)

(イ)偉大なる軍人。過ぐる歐洲の大戦争に於ける最も立派な戦士の中の幾人かは眞實な熱心な神の僕であつた。ウジヤも亦幸福な日を送つた此の時分にはさうであつた。

(ロ)偉大な建築家。世界で最も立派な建築物の多くは、神を敬ふ人々によりて建てられた。神様の榮光の爲に設計せられ又建てられた。如何なる力量も神様の御用に用ひられることが出来る。ウジヤがゼカリヤの賛成を得て計畫を立て、エルサレム市の改善を行つた時に同様に感じたらう。

(ハ)偉大な農家。ウジヤは農業を専めるやうな愚か人ではなかつた。之を好み、給水の計畫をなし、荒野からも葡萄園からも山の坂地からも收穫を得た。彼は其の高尙に警んだ高尙な事業に對して神様からも人からも「善且つ忠」

との稱讃を得た。職業は神様の最も善き賜物の一つである。

三、ウジヤの失敗(六一三)

(イ)其の高慢。ウジヤは「己が地位」に於ては恵まれ、成功し、尊ばれた。併し彼は更に高き地位を欲した。そして高慢に目隠しをされた。成功は迂り易い道である。人から譽められた時は、最も用心すべき時である。

(ロ)其の忿怒。高慢と強情とは同行する。之を往服せぬと、怒の情が發し、瞬く間に一生の幸福が傷けられるかも知れぬ。神様は御憐憫を以て、ウジヤの罪が其の額にあらはれて彼の心の状態を實證することを許し給ふた。

(ハ)其の刑罰。罪の癩病に罹つて居る人々の前に、誰も態々行つて天國の戸を閉づる必要はない。彼等はウジヤと同じく自分から神殿の清きを避けて逃げるであらう。

癩病人ウジヤは恥と寂しさとの中に、さもなくば自分の靈魂を亡ぼす等の高慢と罪とを示す爲に神様が此の刑罰を下し給ふたことを感謝するに至つたものと思ひたい。今日の主なる教訓に就いて適當に勸告をする。

少年科(六年生以下三年生迄)

今日は才能あり、王の家に生れ、人から愛せられた一青年の物語を習ふ。彼が如何にして

其の生涯を傷け、凡ての時代の青年への警戒となつたかを見るのである。高壇から歴代志略下廿六〇一―五を朗讀。

ウジヤはダビデ王の四代目の孫であつた。十六歳の時に王の位に即いた。彼は此の世のあらゆる便宜を身に備へて其の生涯を始めた。

父のアマジヤは神様を愛して仕へ奉り、其の息子に善き模範を残した。其の母も多分神様を敬ふ婦人であつたのであらう。

善き両親に添へて、神様は此の青年に此の上もなも善き賜物を授け給うた——一人の善き友、善き友人——ゼカリヤは神様の事に明い人で、力の限りを盡してウジヤを助けた。

ウジヤ王は働くことが好きであつた。始終事を計畫し、發明し、改善して居つた。神様も助け給うて、彼は戦争には勝利を得、部下の軍人等には愛せられ、敵には恐れられるやうになつた。彼は大將軍として遠く且つ廣く其の名を知られた。

彼は己が都なるエルサレムの事を忘るることもしなかつた。種々計畫を立て、其の改善を

圖り、新しい立派な建物を建て、遂に凡ての民が彼の事業と其の方法とを嘆美するに至つた。彼は村落や農業の方面にも興味を有つて居つた、實際ウジャ王は其の國と土地の改善とに關する事柄は何によらず愛して居つたのである。彼は多くの羊や牛の群、牧場、果物畑等を有して居つたが、其の企てるところは悉く成功した。

組長への注意——此處で組の生徒を止めて、此の人の事を考へさせる。彼は一步步登つて偉大と智慧と權力との尖塔に達した。彼の智識上の才能を悉く善き事に用ひた。其の人民は彼を王とすることを喜んだ。遠くの國々の民は彼を稱讚し敬服して居つた。此處が悪魔の附込んで其の轉覆を企てる時である。

斯くまで神様がお助け下さつたことを感謝する代りに、ウジャの心は高振り、悪魔は彼を誘惑して滅亡に至らしめた。彼は神様に選ばれた王様であつたけれども、神様の選び給うた祭司ではなかつた。然るに彼は其の地位を貪つて、神殿に香を献げようとした。祭司の長はウジャに反對した、何となれば祭司でなければ彼の金の祭壇に香を供へてはならぬと神様が明かに示してお出でになつたからである。それ故、假令王様であつても祭司の長は彼に神殿を去ることを命じた。

併しウジャは非常に尊大になり、強情張りになつて居つたので、何うしても人の云ふ事は聽容れない。「乃公は乃公の好きなやうにするのだ。此の祭司は何の權利が有つて乃公を止めるのだ」と思つた。それ故彼は手に金の香爐を取つて前へ進んだ。ところが其の時、祭司が彼を眺めると、王の額には恐るべき癩病の白斑が表れたのが見えた。此の恐ろしい病が神様の御怒の記號となつてあらはれたのであつた。

ウジャは急いで神殿を出た。今は誰も彼に出て行くことを告げるに及ばなかつた、何となれば彼は既に他の人々と共に住むことも出来ぬ汚れた癩病人となつて、死に至るまで神殿に入ることをも、有らゆる公けの義務に従事することを一切禁じられることになつたからである。幸福なりし彼の生涯の事業は彼自らの行爲によつて悉く駄目になつて仕舞つた。

主なる教訓

神様は貴君の心にある事が貴君の顔に表れることを許し給ふ。

勸告

若い時にはウジヤは多分親切な、考へ深い、熱心な、智慧のありさうな顔附をして居つたであらう。後に彼が高慢になつた時には、人々は彼の眼附に、其の唇の動かし方にそれを見、其の聲の調子にそれを聞き分けることが出来たであらう。遂に強情と怒とで狂氣になつた時には、彼の恐るべき癩病が額にあらはれて、それが誰の眼にも見えるやうになつた。私共でもさうである。盗みをする子、嘘を吐く子供はさうくした顔附になる。不平に思つて居る娘はいやな顔附をする。愉快な利己のない人は愉快さうに見える。神様に信頼して居る人は平和な顔附をして居る。若し貴君の心が正しければ、顔附も正しくなる。

第三十三課

ヨシア王 (八月十四日)

—(歴史志略下冊四〇一—十九、廿九—卅二(時がなくなれば八—十三を省く)—

諸誦聖句——「汝の小さき日に汝の造主を覚えよ、即ち悪き日の來り、年のよりて我は早何も樂むところなしと言にいたらざる先に汝然せよ」(傳道之書十二〇一)

青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

△五、六。ヨシアの時代よりすつと以前にイスラエルは二つの王國に分裂した。ヨシアの治めて居つたのは其の中の小さい方の王國であつた——即ちユダと其の首府エルサレム。六節にある邑々はその領域以外の土地にあつた。
△九。これはそれより二百年以前にヨシア王が爲したる(列王紀略下十二〇四)と同様な國民一般よりの集金であつた。
△十四。此の「律法の書」と云ふのは巻物で、申命記の事であると思はれて居る。或る悪王が神様の御言葉を滅ぼして仕舞へと命令を出した時に、安全の爲に大きな寶の箱に入れて片隅の方に隠してあつたのかも知れん。
△十九。衣を裂くことは深き悲みの記號であつた——何となれば彼は其の民がひどく神様の律法を破り、其の中に豫告せられたる如き呪詛を受くるのが當然だと云ふことを見ながらである(申命記廿八章を見よ)。
△卅一。ヨシアは神殿の中庭に至る入口に立つたものと

思はれて居る。

聖書の教訓

一、聖地の廓清(一—七)

(イ)ヨシアの逸早く決心。ヨシアの將來の凡ての偉大の秘訣は此處にあつた、彼は年若き時に神様を求めた——十六歳の時。これが彼と彼の國家とに取つて如何に重大なる意味があるかを知らなかつた。
(ロ)國內の偶像撲滅。ヨシアは自分の爲に神様の御救を求めた後に、自分の國と都とに於て神様の御爲に働くことを決した。或る青年等は自分の家庭に於て救はれて居らぬ親族の爲になすべき神様より與へられたる特別な勸のある時にも、急いで集會に行き、小隊に於て地位を求めやうとする。
(ハ)國外の悪事打破。若しあなたはヨシアの如く、大切な仕事を有つて居るならば、それを他人に任せ切りにしてはならぬ。自分で世話をし、完成するまでよく見張り又働かればならぬ。

二、神殿の修繕(八一十三)

(イ)ヨシヤの大集金、ヨシヤが其の一旦始めたる善き事業を如何に繼續したるかを見よ。先づ國を潔め、然る後に神殿の改築に心を向けた。併しこれには金錢が必要であつた——丁度今日救世軍士官等が、人民の心の必要を顧ると同時に、又克己週間等の集金をして、神様の御事業の財政と發展との爲に盡さればならぬのと同様である。

(ロ)彼の忠實な働人。神殿の修繕には有らゆる種類の働人が必要であつた。併し彼等が意志を以て働いたと云ふ點に於ては皆一様であつた。聖書には「その人々忠實にはたらけり」と録してある。私共も銘々の仕事は如何に異るても、此の點に於て一様であることが出来る。

(ハ)彼の力量ある監督人。各部の秩序整然たることに注意せられよ。各部にはそれ／＼の監督人即ち職工長があり、そして其の名が記録せられて居るではないか。忠實に働く人は決して神様に忘れられることはない。

三、聖書の尊重(十四—十九、廿九—卅二)

(イ)塵芥中の發見。其の書は其處にあつた、併し讀ます

に隠して仕舞つて置いたのでは役に立たぬ。今日も多くの聖書はさうなつて居る。聖書をして其の働をなさしめんに、之を見出し、讀み、其の教に服従しなければならぬ。此の人々が大變な寶物を發見したのは、修繕を行ひ、大掃除をやつて居る時であつた。これが神様の廢ることなき法則の一つである。私共が有てる光を用ふる時に神様は更に多くの光を賜ふ。

(ロ)ヨシヤの痛嘆。彼は萬事がよく行つて居る如くに裝ふことなく、事實を事實として見、甚だ不快に感じて心を苦めた。神様は眞實を好み給ふ、自らの心に於て、又自分の關係する凡ての事に於て眞實なれ。

(ハ)服従の決心。ヨシヤは先づ自分が其の律法を讀み、然る後に民に之を讀んで讀かせた。次に民と共に其の「言を行ひ」實際の生活に之を實現せんと契約を結んだ。今日も斯の如き種類の聖書讀者を要す。

今日の主なる教訓に就きて適當に勸告をする。「兒童に取りては聖書と其の中なる眞理の研究ほど大切な研究はなし」(ウイイルソン)

「現代を際立たしむる進歩の基礎には必ず聖書あり」(アラアイン)

▲少年科(六年生以下三年生迄)

今日は、八歳で王様になつた一男兒が、十六歳で大決心をなし、後に其の民と共に驚くべき寶物を發見した話を習ふのである。高壇から歴代志略下卅四〇—一五を朗讀。

ヨシヤは王様になつた時には僅かに八歳であつた。先祖のダビテを自分のお手本に選び、十六歳の時に確實に心を神様に献げ、眞の神様に仕へ奉らうと決心した。

それから四年の後は國內を潔めることを始め、エルサレム、ユダヤを巡回して惡むべき偶像を倒し、之を打碎き異教の祭壇を取拂ひして國中を潔めた。

次にヨシヤはイスラエル國中の遠い市々にも行つて、其の働を續け、祭壇や偶像を撲滅した。然る後にエルサレムなる其の家に歸つた。

ヨシヤは憎むべき偶像取拂ひの運動が終ると、今度は國中に人を遣して、神様の神殿を普請する爲に人民から寄附金を乞はしめた。集金人等は歸り來り、普請が直ちに着手出来るや

うに、集めた金を祭司の長に渡した。

今や神殿には石屋、大工、色々様々の職人が澤山集まつた。これは神様御自身の御用である。と知るから、彼等は銘々其の仕事を忠實に又立派にやつた。

仕事に完全なる秩序を以て行はれるやうに、ヨシアは一番善い人々を選んで他の人々を導いたり、指圖したりする監督人となし、以て萬事が圓滑に運ぶやうに計畫した。

工事の進行中に、或日祭司の長のヒルキヤは、モーセの律法の書が隠して仕舞ひ込まれて居つたのを發見した。彼はヨシアの秘書官なるシャパンに其の事を話し、彼の手に其の書を渡した。シャパンは王様の許に行き、工事に就いて善き報告をなし、監督人にも働人にも賃金の拂はれて居ること告げた。次に彼は王様に彼の書を發見したことを申上げ、其の巻物に書いてある事を朗讀した。

ヨシアは其の中に神様の命じてお在になる事を傾聴して居る間に、自分の國の人民が神様の聖き律法を破り、之を守つて居らぬことを知つて、大いに悲み嘆いた。

然る後に王様は人を遣して主なる人々を悉く呼集めると、一般の人民も大勢彼等と共に來つて、神殿の庭に満ちた。王様が神様の御言葉を彼等に讀み聞かせる間、彼等は靜かに立つて傾聴した。皆の前で、王様は自分が神様の律法を守り、彼等が只今聞いて居つた其の言葉に服従することを約束した。次に彼は、凡て自分と同じく喜んで従ふ心のある者に起立することを求めると、直ちに大群衆が起上り、神様の御言葉を聞くのみならず、之に従ひ、神様の仰せの通り實行することを一同は王様と共に約束した。

主なる教訓

ヨシアの如くに、神様に仕へる事を決心した人は、聖書の教へるところを知り又行ひ度いと思ふ。

勸告

神様の書はヨシアに教へる事があつたやうに、今日の私共にも教へる事があるのである。或る人々は聖書があつても之を讀まず行はない。併し人が善良、幸福にならうと思へば、ヨ

シアの如くに神様の御言葉をよく聞き、其の教へることを行ふやうにしなければならぬ。

(例) 教主降誕後三百年程経た頃に羅馬皇帝(ダイオクレシアン)は聖書を一冊も残らず徴發して之を焼いて仕舞へと云ふ命令を出した。多くの基督教徒は聖書を放すことを拒んで彼に残酷な拷問にあはせられたり殺されたりした。併し皇帝は嚴重に此の事を行ひ、遂には聖書と云ふ聖書は悉く亡ぼされて仕舞つと思つた。けれども彼の判断は間違つて居つたのである。此の時に一人の青年は自分の聖書を奪取られた上残酷な拷問を受けて、尙ほ其の外に聖書を有つて居らぬかを云はせられた。さうすると其の青年は遂に答へて「然り有つて居ります。其の尊い御言葉はあなたの方の手の届かぬ所に隠してあるのです——即ち私の心の中に」と云つた。私共も其の青年の如くに聖書を尊び、覺え、又實行し度いものである。

第三十四課 ヨハネ・マルコ (八月二十一日)

(使徒行傳十二〇廿四、廿五。十三〇四—十三。十五〇卅六—四十一。コロサイ書四〇十。テモテ後書四〇十一。ペテロ前書五〇十三)——

誦讀聖句——「後のものを忘れ、前のものに向ひて勵み、標進を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したまふ召にかかはる褒美を得んとて之を追求む」(ピリピ書三〇三、十四)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

▲使徒行傳七二〇廿五。「ヨハネ」は彼のヘアルの名で、「マルコ」又は「マルコ」は彼の羅馬の名である。母の名はマリヤ、其の家はエルサレムにあつて、基督教者の集會所として用ひられて居つた(十二)。彼はバルナバの甥であつた(コロサイ書四〇十)。

▲十三〇十三。ピシデアのアンテオケに行く旅行(十四節)は甚だ危険で、險阻な山々を越えればならなかつた。パウロの後に語りし(コリント後書十一〇廿六、廿七)色々の困難の中の幾分は此處で出遇つたのであると思はれて居る。或は此の困難の前にあることを思つてマルコは氣落ちしたのかも知れぬ。

▲十五〇卅六。これはパウロの第二傳道旅行の初めである。——マルコが彼を棄ててから四年程後のことである。△卅七—四十。パウロとバルナバとは何れも必要であつた。パウロは神様の事業は軽々しく扱はるべきものでないことを示し、バルナバは「再び試みよ」と希望と勇氣を吹込んだ。

▲コロサイ書四〇十。パウロは此の手紙を羅馬の監獄の

中から贈つたのである——バルナバと別れてから十年か十二年程後に。又ピレモン書廿三、廿四には始め方が悪かつたが、後に善くなつたマルコと、間もなくパウロを棄てたデマス(テモテ後書四〇廿)、及び終始一貫して忠實であつたルカの名が見える。

▲ペテロ前書五〇十三。此處の「バビロン」は羅馬の事だと思はれて居る。多分マルコは其處でペテロから馬可傳福音書の材料となるべき多くの事實を學んだのであらう。

聖書の教訓

一、ヨハネ・マルコの始業(使徒行傳十二〇廿四、廿五。十三〇四—十二)

(イ) 上官より選ばれる。彼はさう云ふ二人の善い方と行くのであるし、事は樂だらうと想像した。自分の母の家に訪れて来た人々から困難を噂に聞いた丈けであつた。今は自分で實地に經驗するのである。

(ロ) 外國傳道に赴く。バルナバとパウロとは神様から「召命」を受けた(十三〇二)のであるが、ヨハネマルコの方は多分行つて見度いと「嗜好」の心から行つたのであらう。色々の困難や試練に出遇つて居る時に、自分が其の職務に

對して神様の確實なる「召命」を受けて居ることは大いなる力である。

(ハ)驚くべき特權。ヨハネ・マルコは母が信者であり、エルサレムでは聖徒の集會に出席し、パウロとバルナバとの旅行にお供をし、クプロ島で驚くべき事を見聞された。併し此等様々の事柄も、それ丈では彼に正しき精神を保たしむるには不充分であつた。此處に救世軍人の子供等への警戒がある。

二、ヨハネ・マルコの失敗(十三。十五〇卅六―四十二)

(イ)上官等を後にす。今日もさう云ふ人が多くある如く、ヨハネ・マルコは思ひ掛けぬ困難が來たので投げ出した。だからイエス様は「其の費をかぞへ」と私共に仰しやつてお出でになる(ルカ傳十四〇廿五―卅三)。思ひ掛けぬ困難に出遇つた時には決して性急な行動をしてはならぬ。祈つて、待つて、勇氣を有つて居ると、事が好都合になるか、又は自分の方で左程それを厭に思はなくなるかする。

(ロ)パウロの信用を失ふ。マルコは頼りにならぬからパウロの信用を失つた。彼は一旦自分の着手した事を成遂げ

ることをせず、丁度上官等が自分を一番必要とする時に彼等を棄てて去つた。多くの年若き救世軍人等は頼りにならぬからして、大切な任務を任せられることが出来ないで居る。

(ハ)争論と分離との原因となる。意見の相異は、善良なる人々の間に於てさへも免れ得ないことが屢々ある。パウロは神様の御事業を第一に考へ、バルナバの方は「此の青年に今一度の機會を與へよ」と思つた。此の二つの意見を生出した二つの異つた性格は何れも神様に感謝すべき立派なものである。朋友と意見の合はぬ場合には、喧嘩をしたり怨恨を抱いたりしないで「二人が異つた意見を有つことに同意する」のが宜しい。

三、ヨハネ・マルコの成功(コロサイ書四〇十、テモテ後書四〇十一、ペテロ前書五〇十三)

(イ)パウロへの慰藉。マルコは初年の過失によつて學ぶところがあつた、何となれば後年彼がパウロの愛と信用とを恢復して居ることを見るからである。此處には失敗の経験ある凡ての人に對して、神様の御助けによりて再び試みよとの奨励がある。

(ロ)ペテロからの御挨拶。マルコはペテロの努力によつ

而して凡ての時代の人々に祝福を與ふることになるとは夢にだに思はなかつたであらう！勇み立て！若しマルコの如く、貴君は眞實に救主を愛して居るならば、主は必ずす用ひ給ふであらう。

▲少年科(六年生以下三年生迄)

今日は、今の時代にもよくある如く、自分を實際よりも餘程強い、又基督に似た者と考へて居つた一青年のお話である。高壇から使徒行傳十三〇四―十三を朗讀。

使徒等が町から町へと旅行して爲す働を神様は祝福してお出でになつた。其の中の二人なるパウロとバルナバとは此の時エルサレムに居つた。彼等が再び出掛けるに當つて、ヨハネ・マルコと云ふ一青年を助手として連れて行かうと云ふ話になつた。これは使徒等が屢々集つた(十二節)家の主人なるマリヤと云ふ婦人の息子である。

間もなくパウロとバルナバとに神様のお言葉が下つた——二人は大膽に、廣き異教の世界

に乗出すことになつた。そこで彼等はマルコを連れて出立した。彼等は多くの市々を巡つて神様の言葉を説教した。

マルコはパウロとバルナバとに連れられて方々旅行する間に色々と驚くべき事を見た。使徒等は招かれて、クプロ島の總督に説教することになつた。其處に居る間にマルコはエルマストと云ふ、一人のト者が神様の僕等に反対して神様の御言葉を嘲るのを聞いた。ところが、パウロが彼を吐ると彼は其の座で盲目になつて仕舞つた。此の刑罰の結果、羅馬の總督が救を受けた。

今やパウロとバルナバとは更に歩を進めて、一層困難と危険との大きい異教の地に入込まうとして居つた。併しマルコは最早辛抱し切れなくなつた。そこで二人の使徒に別を告げ、背を向返してエルサレムなる母の家へと歸つて行つた。

長き旅行も終り、パウロとバルナバとは今一度本國に歸つた。其の後彼等は共に第二回の旅行に出立することに定めた。バルナバの方は再びヨハネ・マルコと一緒に連れて行き度い

と思つた。此の青年に今一度機會を與へる積り——併しパウロは「否、彼は前の時に我々に失望を與へた。彼は信用が出来ない」と云つた。

マルコの方でも行き度いと願つたのかも知れない。併しパウロは飽くまで承知しない。それで二人の上官の意見が合はなかつた。到々二人は別れることに決定し、最早一緒に旅行せぬことになつた。そこでバルナバはマルコを連れて自分の方面に進み、パウロの方はシラスと云ふ善い人を選んで別の方面に向つて出發した。

幾年も経つた。マルコは其の叔父の信用に價することを實地に證明した。パウロも亦彼を赦して信用した事は、パウロが羅馬で囚人となつて居る時に、手紙の中にマルコからの挨拶を傳へ、心より彼を歓迎せよと告げて居ることによりて知れるのである。

再び、これも監獄からであるが、其の殉教の少し前に書かれた最後の手紙の中にも、パウロはマルコを要して居つた。汝マルコを連れて共に來れ、彼は職の爲に我に益あればなり」と彼は認めた。

マルコはまだ極く若い時に、母の家に於て屢々ペテロを見て居つたに相違ない。そしてペテロは其の手紙の中に「わが子マルコも安否を問ふ」と云つて居る。
福音書の第二巻は「マルコ」傳となつて居る。彼は救主の傳記を書き著させて戴くと云ふ榮譽を擔うたのである。これは彼がペテロから聞いた事を材料にしたものであると思はれて居る。

主なる教訓

過去は思はしく行かなかつたとしても、貴君は神様の御助によつて勝利を得ることが出来るのである。

勸告

誰でも失敗をし——神様にも自分にも他の人々にも失望を與へ——た時には、何時でも直きに悪魔は云つて来る「もう骨折つても駄目だ、止めて仕舞へ」と。けれども彼の云ふ事を聞いてはならぬ。マルコの如くに、神様の御力によつて今一度試みよ。さうするならば、今は

貴君の失敗に失望して居る人々も、何時かは貴君の成功を喜び祝うて神様を讚美する日が来るであらう。

(例)リチャード君は子供の時には、どちらかと云へば情け者で、困難な事は避けて居つた。教はれて後にも尙ほそれが續いた。或日一人の人が云つた「誰もお前に事を任せる事が出来ない。自分はお前さんに特別な仕事を頼みたいのであるが、前にうまくやらなかつたから、うっかり頼むことを仕兼ねるのだ」と。リチャード君は自分の悪かつたことに氣付き之に打勝たうと決心し、神様のお助を求めた。今では最も精勤な又成功ある士官の一人となつて多くの人々に祝福を與へ居る。

第三十五課 パウロと二青年 (八月廿八日)

——使徒行傳廿〇六—十二。廿三〇十一—廿三——

二 誦讀聖句——「なんぢら互に重を負へ、而してキリストの律法を全うせよ」(ガラテヤ書六〇)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

▲廿〇七。一週間の初日、即ちキリストが墓より甦り給

うた日を、弟子等は聖日として守つた。多分異教の國々には定休日が無かつたから、それで晩に特別な日曜集會と愛

餐とを催したであらう。

△八。「高樓」とは高い所にある室と云ふ意味即ち三階にあつた室の事である。ユテコは其處から外へ突出した窓に座つて居たのであらう。

△廿三〇十五。「千夫の長」とはクラウデア・ルシアスの事(二十六)エルサレムに於ける羅馬兵隊の長。これより少し前に彼はエルサレムの暴徒の手よりパウロを救ひ、今は彼を預かつて居つた。

△十六。私共はパウロに兄弟のあつた事は一向に聞かない、併し此の節によると彼の姉妹と其の家族とが彼に同情を有つて居つたことが分る。パウロの甥は明らかに幾分か其の叔父の立派な性格を承けて居つたものと見える。

△廿三。カイザリアは重要な港で、パレスチナに於ける羅馬政府の首府で羅馬の總督ペリクスの駐在所あつた。エルサレムよりも七十哩の所にあり、兩市の間には立派な軍用道路が通つて居つた。

聖書の教訓

一、パウロと其の年若き聴手(廿〇六—十二)

(イ)パウロの終夜集會。パウロが其の機會を最もよく用

ひたる様を見よ。翌日は其の地を去つて再びトロアスを通ることがないかも知れないと云ふことを知つて居たから、改心者等に語り度い事が多いので、話して居る間に時間が進んで行つた。

(ロ)ユテコの致命的墜落。集會で眠る理由としてありさうに思はれる事が二つある(一)一日中の勞働の爲に餘りに疲勞した事、(二)不注意で、興味を有たぬ事。ユテコは多分第一の理由で眠つたのであらう、そして終夜眼を醒まして居ることは馴れて居なかつたのであらう。

(ハ)ユテコの恢復。パウロは自ら、直ちに、ユテコの世話をした、併し自分の爲すべき分を爲したる後には他の人々に任せた。指導者たる者は大切な事には何時でも助をする用意があるけれども、自分の近くに居る他の人々でも助け得る時には徒らに自分の時間に入することをしてない。

(ニ)パウロの告別。パウロは前大將の「汝の計畫を固守せよ」との忠告の一例である。彼は困難を處理し、事を整理し、然る後には早速其の本業に歸つた！

二、パウロの其の年若き甥(廿三〇十一—廿三)

(イ)秘かなる謀略。パウロの甥は叔父を保護する爲に自

分では何事もなし得なかつた。併し事の詳細を叔父に告げることが出来た、そして實際に告げた、然る後に舌を抑へて黙した。

(ロ)少年の發見。パウロは、其の報知を活用することの出来る唯一の人物の所へ直ちに其甥を遣した。それをなしたる後に彼は神様に信頼した。當惑の時に處する私共へ立派な模範である——事を解決し得る人々のみに語る事。

(ハ)彼の智慧ある行動。此の少年は其の報告を明瞭に且

つ簡潔に、而も必要な事は云ひ落さぬやうに述べた。貴君も同じやうにする事を稽古せよ。然らば時間の貴重な人々に重んぜられ尊敬せられるであらう。證言に於ても此の心得が必要である。

(ニ)パウロの生命救はる。多分其の時には、パウロと、典獄と此の青年との他には誰も此の少年の爲したる事を知らなかつたのであらう。併し彼の報酬は其の叔父の安全にあつた。

少年科 (六年生以下三年生迄)

大人の人々のみならず、少年青年等も彼の大使徒パウロの事に大いなる興味を有ち、機會さへあれば彼の説教を聞き彼に仕へる事を喜んだ。今日は其の時分の二少年の事を習ふのである。彼等の年齢は知られて居ない。高壇から使徒行傳廿〇六—十二を朗讀。

パウロが他の戰友等と共に着いて一週間其處に止まつた時のトロアスの改心者等の歡喜を想像して御覽なさい。月曜の朝出發する其の前に、日曜日の夜、終夜集會を營んだ。其の室

(三階にあつた)は暑く、人が込み、油燈を燈してあつた。パウロは幾時間も話を續けた。パウロの聴衆の中にユテコと云ふ一人の少年があり窓の所に坐つて居たが、(多分朝早くから仕事をして居つた爲であらう)、熟睡して仕舞つて、三階から往來に轉げ落ち、起して見たら死んで居つた。

早速パウロはお話を止め、人々は驚き且つ心を苦めた。併しパウロは下りて行つて、其の少年を腕に抱き上げて「心配なさるな、まだ生きて居ります」と云つた。そしてユテコは恢復した。

そこでパウロは再び三階に昇り、愛餐を濟まし、食事をなし、夜明まで懇談をした後に其の地を去つた。

其の後パウロはエルサレムに行つてから、監獄の中で羅馬兵の保護を受けて居つた。それをユダヤ人等には不満に思つて居つた。其の中の四十人が、パウロが殺されまでは食ふことも飲むこともしないと誓をした。質問する爲に彼を監獄から出して貰ひ度いと願つた、其の途

小彼を殺す積りであつた。

エルサレムにパウロの甥が住んで居たが、叔父さんを好きで尊敬して居た。何うしたか、ユダヤ人の謀を聞き、監獄へ出頭してパウロに面會する許可を得て、聞いた事を彼に告げた。パウロは一人の士官を呼んで、甥を連れて行つて典獄に面會させて呉れるやうにと頼んだ。

典獄も、何か大切な用事がなければパウロが其の少年を寄越す筈はないと云ふことを知つて居るから、手を引いて静かな所へ彼を連れて行つて、其の語るところを注意して聞いた。典獄は其の事件を如何に處置する積りかを其の少年に告げなかつたが、「君が此の事を僕に知らせたのだと誰にも云つてはなりませんよ」と云つて彼を歸らせた。彼は其の通りに舌を抑へて、おしやべりをしなかつた。

典獄は直ちに二人の士官を呼び、大勢の歩兵と騎兵とに護衛させて、パウロをエルサレムから連れ出して、總督の居るカイザリヤと云ふ遠い市に送ることを命令した。彼等は其の夜

の九時に出發した、その時には通りが静かで暗かつた。斯くしてパウロは、其の物のお蔭で、敵の手から救出された。

主なる教訓

少年青年は神様の僕等より助を受けることも、又出来る時には助を與へることも喜んでしなければならぬ。

勸告

パウロの告別演説は大切であつた、併しユテコの生命は尙更大切であつた、それ故パウロは自ら其の手當と信仰と接觸とによりて彼の生命を恢復させた。

パウロは又、も一人の少年から忠告と警戒とを受くる事を喜び、彼の助を受け、彼の言葉に注意を拂うた。親しく少年青年に興味を有ち、又其の助と奉仕とを喜んで受けて下さる人々のあることを神様に感謝せよ。

第三十六課

オネシモ (九月四日)

——(ピレモン書一―廿五)——

誦讀聖句 — 「僕たる者よ、凡ての事みな肉につける主人にしたがへ、人を喜ばする者の如く、たゞ眼の前の事のみを勤めず、主を畏れ眞心をもて従へ。汝ら何事をなすにも人に事ふる如くせず、主に事ふる如く心よく行へ」 (コロサイ書三〇廿二、廿三)

▲青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

△一。此の最も興味あるパウロの私信より、一人の逃亡した奴隷の爲になしたるパウロの心遣と世話とを見るのは誠に美しいことである、殊に當時は奴隷は動物の如くに扱はれ、何の權利をも有せず、主人の好みに任せて買ひも賣りも殺しもされると云つた状態であつたから。

△二。アピアとアルキボとは多分ピレモンの妻と息子とであつたらう。ピレモンはパウロが前にエパソに居た時

に、其の市に行つたことがあつて、救を受けるやうになつたらしく思はれる (使徒行傳十九〇十)。

△九。パウロは年齢から云へば此の時にはまだ五十五から六十までの間であつたらうが、色々の困難辛苦の爲に大いに年が寄つて居たのであらう。

△十、十一。オネシモとは「利益のある」と云ふ意味で、當時の奴隷にはよくあつた名前である。パウロが前には益なき者なりしが、今は其の名の如く益ある者となつたと云つたのは此の事を云つたのである。

△廿二。パウロは羅馬から自由にせられた後に事實コロサイに往つてピレモンの家に泊つたらしくないと云へない。何れにせよ、パウロが自由で来るかも知れないと思へば、主人は確かに奴隷に對して一層親切にするやうになつたらうと思ふ。

聖書の教訓

一、其の奴隷の履歴

少年科の話の前半を見よ。又地圖によりて羅馬とコロサイとの間の距離を示されよ。パウロは高等教育を受け、性質は排外的で、異教徒を見下げるやうに育て上げられた、併しイエス様の爲に此の不正直な逃亡した奴隷をさへも自分の息子として教へた。オネシモは最早不正直でも卑怯でも利己的でもなく、却つて其の心と生活との變化を勇氣と獻身と過去を償はうとの願望によりて示した。此の話は、イエス様の精神は凡ての階級の人々を如何に取扱ふかと云ふ一模範である。多くのさう云ふ實例は絶えず救世軍の中につけて居る。

二、パウロの願訴(ピレモン書一廿五)

(イ) 奴隷を己が改心者と稱す。此の手紙は奴隷廢止の最初の請願書であると呼ばれて居る、併しパウロは奴隷制度の悪を説いて論を戦はせる様な事はしなかつた。オネシモを送り返し、例へ生命を失ふとも其の義務を盡すと云ふやうにさせやうとした。そしてピレモンには奴隷の持主に對する如くでなく、イエス様の僕に對する如くに訴へた。眞の基督教の勝利の道はこれである、即ちイエス様の精神を輸入する時に氷の太陽に溶け去る如く悪事は自ら消去するのである。

(ロ) 自ら借財を代償せんとす。パウロは奴隷の罪を否定せず、自分が其の仕拂の全部の責任を引受けた。「若し汝は飽くまでも其の權利を取返さうと云ふならば、宜しい、オネシモでなく、我を汝の負債者として扱へ」と云つた。これは救主が我儕の罪を己が身に負ひ給ふ有様を如何にもよく表號して居る(イザヤ書五十三〇六)。

(ハ) 彼の將來をピレモンに任す。パウロが如何に勝利を得しかを見よ! 自分の改心者に奴隷を解放することを命じ等せずに、奴隷を己の兄弟として、それに應じき扱をして下されと懇願した。彼を解放することさへ頼むことをしなかつた、但し後でピレモンが自分の依頼以上の事を

して下さると信じた時には其の事を暗示した。斯の如く愛と信任と同情とによりて、被害者の心中にある最も善き性質を啓發した。

少年科(六年生以下三年生迄)

今日は一人の逃亡した奴隷の話と、彼がパウロの感化と指導とによりてイエス様の勇敢な眞の軍人となつた事とを習ふのである。高壇からピレモン書八―十四を朗讀。

組長への注意―今日の聖書の讀む所は學課の後半になる故、各組では學課の前半を氣持よく、面白く話してから後に聖書を讀むやうにする必要があるだらうと思ふ。

遠く離れた小亞細亞のコロサイと云ふ市に、ピレモンと云ふパウロの改心者が住んで居つた。ピレモンにはオネシモと云ふ一人の奴隷があつた。多分彼は此の奴隷に助と祝福とを與へる爲に種々骨を折つたのであらう。處が一向成績が擧がらず、オネシモは益々悪くなつた。遂に主人の大金を盗んで逃げて行つて仕舞つた。羅馬へ渡つた、其處には誰も自分を知つて居る人は居ないから、勝手に自由行動が出来ると思つた。何う何ふ譯であつたか、オネシモは其の時羅馬に居たパウロに遇ひに來た。パウロの教に

よつて本當に救はれ、公けにクリスチャンとしての立場を取り、彼を見る者は皆彼の心の中にキリストの靈の宿つて居ることを知つた。パウロは喜んだ、オネシモは一廉自分の助にもなり、慰藉にもなつた。

オネシモは或はパウロに斯う尋ねたことかと思ふ「私は何うするのが本當でせうか。若し歸れば主人は私を鞭つか殺すかするかも知れません。一筆手紙を書いて前非を悔んで居ると云つて遣つて、此の儘あなたのお側に止まつて居ることは出来ませうか。パウロは「否、歸らなければなりません、イエス様の僕らしく自分の罰を耐忍びなさい。併し僕の方では出来る限り君の爲に盡力させよう」と答へたであらう。

註——丁度此の時にパウロは、まだ一度も會つたことのないコロサイの改心者等に手紙を送り度いと思つて居つた。テキコはパウロの使者として其の手紙を持つて行くのであつた。何故此の際オネシモを彼と共に行かせないと云ふ道理があるか。

パウロはオネシモを友人のテキコと共に行かせて自分で事情を話させることを以て満足せず、別に直筆を以てビレモン自身宛てた手紙を認め、自分が一人の囚人として居る間に得

た、今はパウロの心靈上の子供の一人となつて居る「我が子オネシモ」に親切にして呉れとビレモンに懇願した(十節)。

パウロはオネシモを止めて置き度いと思つたが、其の主人の許可なしにさうすることを好まなかつた。パウロは、奴隸には其の借金を拂ふ力のないことを知つて居るから、ビレモンは其の救に就いては自分に負ふところがあつたけれども、尙ほ必要ならば自分が代りに仕拂ふことを引受けた。

パウロは、ビレモンが自分の依頼よりも以上——以下ではない——の事をして呉れると確信した。と云ふのは、多分オネシモが自由の身とせられて最早奴隸でなくなることを意味したのであらう。此の事はパウロに深き喜びを與へることであつたらうと思ふ——即ちオネシモは赦されて自由になり、ビレモンは其の赦と憐憫との美しい精神を示す事。

註——私共は誰もその結果が何うであつたかを知らない。オネシモは如何に迎へられたであらうか。ビレモンは何と云つたであらうか。地上では之を知ることが出来ぬ、併し傳説によるとオネシモは解放せられ、善の爲に大いに力ある人物となり、彼とビレモンとは何れも、又パウロ自身も教主の御爲に生命を棄てたと云ふことである。

主なる教訓

若し悪い事をして仕舞つたならば、如何なる辛さをも忍んで之を告白し、又出来る限り辨償しなければならぬ。

勸告

悪い事をしたのを本當に悔いて居ると云ふ證據の一つは、快く先方の人にそれを告白し、又出来る限り辨償することである。多くの救世軍の改心者等は、救はれぬ前に行つた悪事に對して出来る限り取返しをする爲に、随分容易ならぬ結果に出遇つた事がある、例へば長い間監獄に入れられる等。「パウロ」は何時私共に近くに居て私共に爲すべき事を教へて下さる譯ではない。併し良心は私共に囁いて正しい道を示し、救主は之に服従する恵を與へ給ふ。

(例) 救はれた男の子が或日突然誘はれて八百屋さんの店から密柑を盗んだ。翌日店番をして居た婦人が彼から次の手紙を受取つた「奥様、私は昨日貴女の店から密柑一つ盗んだ事を甚だ悲みます。私はクリスチャンですからお詫びをしなければなりません。私が誘はれたのです。お代として四錢切手を一枚同封いたします」と。

第三十七課 第三復習日 (九月十一日)

テ モ テ (使徒行傳十六〇一三。テモテ後書一〇一十四。組。長は前以て使徒行傳十四〇六一廿二を讀んで置く)

誦讀聖句——「汝の内に得たる神の賜物をますく、熾んにせんことを勸む」(テモテ後書二〇六)

注意——第十四課の初にある注意書は今日の復習にも當條まる。
●次の日曜日禁酒デーに用ふる爲に本營へ今からトラクトを注文するのが宜しからう。

質問 (各質問の終の括弧内の数は其の答の材料を見出すべき學課の番號である)

- 一、ヨナタンが勇ましく敵の先陣を攻めた時に其のお手傳をしたのは誰でしたか。其の結果は何うでしたか(二十七)
- 二、サウルの生きて居る時にダビデはヨナタンに何う云ふ約束をしましたか(二十八)
- 三、ヨナタンの家族の中の誰に其の約束が實行されましたか(二十八)
- 四、ダビデは「ヨナタンの爲に」メヒボセテを如何に待遇しましたか(二十八)

- 五、エリシヤを嘲つた青年等の話をして下さい(二十九)
- 六、快く服従した二人の青年をエリシヤは如何にして助けましたか(二十九)
- 七、一人の奴隷娘の言葉から癩病人ナアマンの癒されるやうになつた話をして下さい(三十)
- 八、ヤベツと其の祈禱との事を知つて居る丈け話して下さい(三十一)
- 九、ウジヤ王は幾歳で王の位に即きましたか(三十二)
- 十、彼の偉かつた點を幾つか云つて下さい(三十二)
- 十一、何故神様は彼が癩病に襲はれることをお許しになりましたか(三十二)
- 十二、ヨシア王は何う云ふ大事業に取り掛りましたか(三十三)
- 十三、工事の際に何を発見しましたか。ヨシアはそれを何うしましたか(三十三)
- 十四、ヨハネ・マルコがパウロに失望を與へ、後でパウロとバルナバとの間に困る事の出来た原因は何う云ふ事でしたか(三十四)
- 十五、彼が後で成功したと云ふ證據を幾つか云つて下さい(三十四)

- 十六、ユテコの事を知つて居る丈け話して下さい(三十五)
- 十七、パウロの甥が其の叔父の役に立つた話をして下さい(三十五)
- 十八、オネシモの話をパウロが彼の爲に手紙を書くところまで話して下さい(三十六)
- 十九、ピレモン宛のパウロの手紙には何う云ふ事が書いてありましたか(三十六)

▲青年科及び少年科

パウロに失望を與へた一人の青年の事と、逃亡した一人の奴隷がパウロに救はれた事とを
 習つた。今日はパウロから自分の子の如くに愛せられて居つた一青年の事を習ふのである。

注意——今日は復習日で、學課は短い故、各組では聖書を讀始める前にテモテの幼少時代の事を組長が氣持よく話して、
 組の生徒が彼の事をあり／＼とした事實の如く感ずるやうにする。

テモテはルステラと云ふ異教の市に住んで居つた。此の市の人々は偶像を禮拜し、僅かに
 少數のユダヤ人等が眞の神様を知つて居つた丈けである。
 テモテの父はギリシヤ人、即ち異邦人であつたが、祖母と母とは何れもユダヤ人で、小

い間からテモテにモーセの律法と舊約聖書とを教へた。彼の名のテモテ(「神を知る者」と云ふ意味)と云ふのは多分其の母が信仰を以つて附けたのであらう。

パウロが彼を「我が愛する子」と呼んで居るところを見ると、彼は多分パウロの教によりて救を受けたのであらう。そしてパウロがルステラで彼の不思議な奇蹟を行つて跛者を癒したのを見た人々の仲間にはテモテも居つたものらしい。此の時異教の祭司等がパウロを神様として拜まうとしたのをも一心になつて見て居つたであらう。又彼が石を投げ附けられ、半殺しにして放つて置かれたのを見たであらう。テモテは其の有様を見て泣き、パウロが元氣を恢復して再び働に取掛るのを見ては、何うかあゝ云ふ偉大な方に仕へ又其のお手傳をし度いと熱望したことであらう。(丁度今日も多くの子供等が善い士官の人々のお手傳をし度いと思ふ如くに。)

パウロが暫くの後ルステラに歸つて見ると、テモテは中々忠實にやつて居り、本當に救はれて、我々の言葉で云つたならば、「候補生志願者」となつて居つた。そこでパウロは彼を

自分の助手として連れて行くことに定めた。

パウロが其の「小隊」の主なる人々に尋ねた時に、彼等一同はテモテに就いては第一等の推薦をなし、彼の事を忠實な、勤勉な、氣持よく働く兵士であると云つた。

そこでテモテは自ら進んでパウロを助ける爲に一生を費すことを志願した、その爲には快く、或は永久に、其の家庭を離れ、若し必要ならばキリストの御用の爲には生命をさへ棄てる覺悟であつた。此の決心は永続的のものであつた。其の凡ての困難辛苦の中にも、彼は一度も後を振りかへつたことも、其の地上の主なるパウロをも天上の主なるキリストをも振棄てたこともなかつた。

註——テモテには多く此の世の財寶はなかつたであらう、併しパウロから彼に贈られた二つの手紙は彼に取つては最も尊いものであつた、而して全世界は彼と共に其の利益を受けた。

パウロは最後に送つたテモテへの手紙の中に次の如くに云つて居る。「我は汝の事を記憶し、絶えず汝の爲に祈り、汝に會ふ事を熱望し、汝の同情の涙と汝の信仰とを思起しては考へて居る」と。これによりて彼のテモテに對する深き愛が知られるのである。

併しパウロの言葉はそれだけに止まらなかつた。其の手紙によりてテモテが神様から戴いた色々の賜物の事を思出させようとした。即ち(1)聖き母と祖母(五節)、——人の受け得る神様よりの最上の賜物の中に數へらるもの、(2)才能——よく活用しなければならぬ(六節)、(3)聖職——パウロを通して彼に授けられた(九節)、(4)彼の聖書の智識(三〇十五)——母より教へられたものであつて、之に服従するならば「救に至らしむる智慧」を彼に與へるのであつた。此等はテモテの特權である。

智慧と愛とに満てる父の如くに、パウロは次の通り云つて居る。「テモテよ、此等の賜物を愚かな事や怠慢の爲に失つたり濫用せぬやうにするのが汝の義務である(前書六〇廿)。汝の生命を神様に委ねよ、然らば神様は安全に之を守り、又用ひ給ふであらう」(後書一〇十二)。

主なる教訓

私共は銘々神様から色々の賜物を戴いて居る、之を保護し、よく用ひるのが私共の義務である。

勸 告

或る人々にはテモテの如くに信仰の篤い家庭と親戚とがある——これは神様から愛せられて居る證據である。又或る人々には色々の才能がある(布衍する)。凡ての人には聖書が與へられて居る。若し此等の賜物を誤つて用ひたり等閑にしたりすると、一生の悔を招くことになる。何よりも大きい賜物は、凡ての人に罪を棄て、救主に従へとの聖き召が神様から與へられて居ることである。貴君は其の御聲を如何に扱つたであらうか。従うたか、或は其の忍耐ぶかき訴へに耳を傾ける事を拒んだか。若し其の御聲が今一度貴君に語つて居るならば、此の午後之に聽従へ、若し之を輕んじ、其の語る事に注意を拂はないならば、召の聲はだんだん微かになり遂には全く聞えなくなるであらう(悔改の座)。

(例)學者の話によれば、深い海底には或の種の海の動物が住んで居り、其の眼の形は完成に出來て居るが、餘り永く暗黒の中に居るので視力を失つて居ると云ふ。

第四編 サムソン、ルツ、サムエル

第三十八課 禁酒デー (九月十八日)

サムソンの大力

(士師十三〇一七を簡單に話す。八一十三、廿四、廿五を讀む。青年科は廿二、廿三をも讀む)

誦讀聖句——「かれらも酒によりてよろめき、濃酒によりてよろほひたり。默示をみると
きにもよろめき、審判をおこなふときにも躓けり」(イザヤ書廿八〇七)

司會者への注意——若し出来れば、大人兵士で酒から救はれた人に、學課の後で子供等に證言をして貰ふのが宜いかも知れぬ。又前以て本營から禁酒に關するトラクトを必要な部數だけ買入れて置いて集會の後で生徒等に一枚宛渡して其の家を持歸らしめることも宜しからう。

飲酒の害毒

左に掲ぐるは著名なる警察官や醫師等が飲酒の害に就いて述べたものである。「酒がなければ十個毎に

九個まで監獄を閉鎖して仕舞ふことが出来るであらう。」
「余は確信す、殆ど凡ての犯罪の根本は酒、男女共に凡ての時代の人民に害を興へて居る物は酒を飲まざるべき暴君である。」

余は信する、英國に於ける犯罪の九割は居酒屋の中で生れたものである。」
(一) 屢々貧乏の原因となる。「不斷の飲酒はまた年の寄らぬ間に人の體力を殺ぎ、意志の力を弱め、神經を破損し、精力を減じ、其の結果資金を儲ける力は次第に減じ、極端なる場合に於ては殆ど雇はるゝ資格さへない人間の仲間になつて仕舞ふ。」

(二) 癡狂の普通なる原因である。「人間の癡狂病に就いて確實に知り得る第一等の原因は飲酒である。」

「或る一定の廣き區域内に於ける白痴の五割は飲酒家の子供等であつた。」

「ロンドン丈でも一年に殆ど五百人に近き人々は酒の爲に貧民癡狂人となる。」

或る大きな田舎の癡狂院の醫師は、アルコール性の癡狂と酔酒との間には大いなる類似點のあることを宣言した——言語の不明瞭、歩行の不安定、感覺の魯鈍、馬鹿げて居る事、怒り易い事、忘れ易い事。

(四) 屢々疾病を醸す。世界の主要なる十ヶ國の醫師等に

よりて署名された宣言書中に次の如く述べてある。「アルコール性飲料は極少量でも人體の作用を妨げ、著しい毒害性を備へて居る。それ故アルコールは毒と考へべきもので、食料品として分類すべきでない。」

「アルコール性飲料の節用は、幾年も續けると、漸次に人體組織の衰壞を來し、老衰を早め、從つて病に侵され易くなる。」

「嚴正禁酒家は、他の條件が同等である場合には、平均から云へば病氣になることが少く、飲酒家よりも病氣の恢復が早い、殊に傳染病に於て然りである、その上に殊にアルコールより起る疾病を全く免れる。」

(五) 屢々死を早める。ロンドンの一警官が述べた「私の取扱つた訊問の十中九までは酒が多少とも死の原因になつて居る。」

多くの保險會社は、今では嚴正禁酒家からは、より低額の保險料を取立てるが、或はより多額の利益を約束するからである。何となれば嚴正禁酒家よりさへも生きる見込があるからである。

青年科(豫備科兼用)(十三歳以上)

聖書の註解

△五。ナザレ人とは特別に世より離れて神様に献げられた男又は女を云ふ(民数紀略六〇一―八)。此誓をしたならば、其の誓の續く間は――一生續くとは限らなかつた――ナザレ人は葡萄酒、濃き酒、又何でも葡萄酒から拵へたものを飲食せず、頭髮は切らずに延ばし、死骸に觸れぬ事になつて居つた。

△六、七。聖書の中には偉大なる人物の母親の事は大いに重きを置いて録してある。人間の神様より受け得る最上の賜物は善良な信仰篤き母である。二十三節にあるマノアの妻の完全なる理論を見よ。

聖書の教訓

一、神の目的(二―七)

(イ)ナザレ人たる事。聖書の中に一生ナザレ人として明白に記されて居るのはサムソン丈である、併しバプテスマのヨハネ(ルカ傳一〇十五)とレカブ人(エレミヤ記卅五〇六)とは一生濃き酒を飲まなかつた。斯の如く、神様は救済者又は教主の先驅者を起し給ふ時には禁酒家をお選

びになつた。飲酒に陥ることは其の人物の弱くして信賴出來ぬことを意味する。

(ロ)ペリシテ人と戦ふ事。大事業は彼を待つて居つた、今日の凡ての青年も同様である。世界は罪惡の奴隷救済の爲に神様より遣された多くの「サムソン」を要して居る。

二、神の訓示(八―十三)

(イ)父の祈禱。マノアが其の子の爲に祈つた時に、神様は其の聲をお聴きになつて、彼の要する助を與へ給うた。その如く今日も自分の子供を神様の御用の爲に訓練せんとを願ふ親等の祈禱を神様は聞き給ふ。

(ロ)天使の答。マノアは「之になすべき事は如何に」と尋ねた時に與へられた天使の答は、其の子が赤ん坊の時から特別に神様の恵を受けるけれども、成人の後に役に立つ人物とならしめるには、之に服従の徳を學ばしめるやう訓練を受ける必要のあることを教へた。命令に服従することの出來ぬ青年は決して後に命令を出す適任者となるものではない。

三、神の祝福(廿四、廿五)

十三―十七。サムソンは成長の後には、其の父母が自分の生れぬ前に自分の爲に結んだ誓を守つた、それ故神様は彼を恵んで彼に神様よりの最上の靈の賜物を下さる、ことが出來た。

今日の主なる教訓に就きて適當に勸告をする。

少年科(六年生以下三年生迄)

今日からは最も方の強かつた人の傳記を始めるのである。サムソンの話は私共銘々の模範であると同時に又警戒である。高壇から士師の十三〇八―十三を朗讀。

注意――一節から七節までは讀むのに適しないから、組長が話す丈けにする。

神様の天使がマノアの妻に顯れて、一人の息子が生れる事を告げ、其の子は生れた時からナザレ人にするのであると云つた(五節の註解を見よ)。神様は此の約束の子をして神様の御爲に困難な而も大切な事業を爲さしめる思召であつた。立派なる勝利の生涯が彼の前途にあつた、それ故彼は注意に注意を重ねて自分の害になるものを、妨げになるものを一切自分の身

に近づけぬやうにしなければならなかつた。

イスラエル人は此の時には、殘酷なる其の敵ペリシテ人の壓制に服して居つた。それを拒まうともせず、戰爭する事をも止めて仕舞ひ、腰を落着けて此の偶像禮拜の民に奉仕して居つた。此の約束の子こそは、其の國民をペリシテ人の手より救出することを始めるものであつた。此は大いにして困難なる事業であつた。之を行ふには其の子が肉體も智慧も精神も丈夫でなければならなかつた。

マノアの妻は天使の言葉を夫に告げると、夫は次の如く祈つた。「わが主よ、汝がさきに遣し給ひし神の人を、再び我らにのぞませ、之をして我らが其の産るゝ兒になすべき事を教へしめ給へ」と。マノアは自分の子が神様の御爲に丈夫になることを望んだ、それ故神様の思召と御命令をはつきり教へて戴き度いと思つたのである。

神様はマノアの祈禱を聞き給うた。天使は今一度彼の妻に顯れた、それで妻は走つて行つて其の夫を連れて來た。マノアは天使に、自分等の息子は如何なる者になるべきか、又其の

爲に自分の爲すべき事は何であるかを尋ねた。天使は前にマノアの妻に告げた通りの事を繰返して云つた、彼等は兩親共に神様の思召を成就するやう注意しなければならぬのであつた。生れた赤坊の名を母親がサムソンと名づけた「太陽の如し」と云ふ意味である。彼は日々成長して力強く丈高くなり、神様の恵が其の上にあつた。誰も彼も皆彼は搖籃時代から神様に献げられた小さなナザレ人であることを知らぬ者はないと云ふ程であつた——丁度今日救世軍の献兒式をした子供等のやうに。

神様の聖靈が益々彼の上に降り始め、彼は自分の力よりも以上の力を受けて日々力ある強き人となつた、彼の父母は其の誓を守り、サムソンが大きくなつて自分で其の誓の守れるやうになる迄、其の子を眞のナザレ人として育てた。

主なる教訓

靈魂も身體も丈夫な人になり度いと思ふ人は、全然禁酒せねばならぬ。

勸告

酒は何處と云はず人の身體中に害がある、それ故苦痛なく、長生し、よく働き、明瞭に物を考へ度いと思ふ人は全く酒と縁を切らねばならぬ。世界に今迄生きて居つた中で一番力の強かつた人が、禁酒家として育て上げられたと云ふ事實は、人間は酒を飲まぬのが一番善いと云ふ事を教へるものである、そして今日凡ての最も巧妙なる醫師の意見はそれに同意して居る。

私共の身體が「聖靈の殿」である以上、酒は私共の靈魂をも害する。私共が酒を飲んで故意に身體を害して其の力を鈍らせる時に、神様が充分に私共の身體に宿り給ふことを豫期することが出来ぬ。

(例)或る大きな煉瓦製造所で、酒を飲む人は飲まない人よりも平均一ヶ年間に三萬五千枚拵へる煉瓦の数が少なかったと云ふことが發見された。
(例)或る男の子供等に数字を附けることを六日間稽古させたが、皆だん／＼進歩した。次に十二日間毎日極く少し宛酒を飲ませた。さうするとだん／＼と鈍になり、正確に出来なくなつた。其の酒を止めて仕舞つたら、皆又前のやうに今一度早く進歩するやうになつた。

第三十九課 サムソン 困難に勝つ (九月廿五日)

——(士師記十四〇五—九。十五〇九—廿)——

誦讀聖句——「神のさまたまの恩恵を掌どる善き家司のごとく各人その受けし賜物をもて互に事へよ」(メテロ前書四〇十)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

▲十四〇五。パレスチナには其の頃ライオンが澤山あつた。彼等は生ひ茂つて居る葡萄樹の間に蹲(うづく)まつて居たりした。

▲十五〇四。ハリシテ人はイスラエル人の土地と地中海との間の細長い土地に住み、戦争に熟練したる猛烈な戦士的國民で、四百年程の間は時々侵入して来てイスラエル人を壓倒した。實際イスラエル人がエホバを離れて墮落する度毎に侵入して来た。此の度の四十年間(十三〇一)抑へ付けられて居つた場合には、イスラエル人は最早助かる見込

はないと全く斷念して居つたのである。

△十九。レヒ即ち「肥」はハリシテ人が陣營を張つて居つた所である。サムソンが驢馬の腮骨を武器として用ひた故に、此の言葉を面白く掛けて其所をば「ラマテレヒ」(腮骨を揚げる)と名づけた(十七)。

聖書の教訓

一、ライオンの難 十四〇五—九

(イ)ライオン吼ゆ。ライオンは青々とした葡萄樹の生へて居る葡萄園から出て来た。氣持のよきそなた所に大いなる危険の潜伏して居ることが時々ある。懼むべし。不意の危

險は不意の拒絶を要す。

(ロ)ライオン斃る。ライオンを征服する力は丁度の必要な瞬間まで與へられなかつた。貴君は何か近づきつゝある困難を恐れて居るか。神様に信頼せよ、然らば其の時々に必要な助が與へられるであらう、何となれば神様の聖靈が借に居給ふ時には最も困難なる戦争も容易くなる。

(ハ)ライオンが惠。困難を征服すると何時も甘味が出て来る。怠惰や其の他の悪習慣、悪友、其の他の惡魔への奉仕の「ライオン」と戦へ、然らば壯健な身體と、明晰な頭腦と、自尊心と、益友と、神様の笑面との「蜜」を味ふであらう。

二、ペリシテの難(十五〇九—十七)

(イ)同國人に捕縛さる。サムソンには他の人々を激勵する力が全く缺けて居つた。故に指導者にはなれなかつた。彼は偉大なる人の手にあまる子であつた。併し彼は獨り立ちで神様の敵に向ひ、己が友の手に苦めらるゝことを厭はなかつた。それ故彼は其の友等を救ひ始めることが出来た。私共の力に限りのあるにも拘らず、神様は私共を用ひ給ふことが出来る。

(ロ)纏解けて自由となる。サムソンは腦力に乏しかつたかも知れぬが、神様に觸れて居る限り、誰も彼を負かすことが出来なかつた。彼の人物は人生の事實を寫して居り、大なる筋肉の力を有しながら特別な智力や教育の缺けて居る或る青年等への模範又警戒として特別な價値がある。神様の王國にはさう云ふ人々を容るべき餘地があり、又さう云ふ人でなければ出来ぬ仕事もある。

三、自分個人の難(十八—廿)

(イ)困つた時の叫び。一つの困難を征服すると、新しい困難が起つて来た。一つの救助ではサムソンは充分でなかつた——私共に於てもさうである。絶えず變化する種々の困難に對しては絶えざる助が必要である。

(ロ)咽の喝き癒ゆ。神様はサムソンにも、イシマエルの場合の如くに(創世記十七〇九—廿一)彼等の爲に備へ

給うた必要物を見出さしめることによりて、必要物と與へ給うた。屢々私共が見棄てられたかと感ずる時に、實は神様が手近かに治療法を備へて居給ふ。そして私共の信仰の叫びが私共の眼を開いて之を見させるのである。

(ハ)感謝の精神。サムソンは神様が來つて彼を助け給う

た事を誠に有難く思ひ、爾來凡ての旅人が其の水を讀む時に、神様が彼の祈禱を聞いて之に答へ給うたことを彼等に記憶させたいと思つた。

今日の主なる教訓に就いて適當に勸告をする。

少年科(六年生以下三年生迄)

今日はサムソンが成長して大人になつたところを見るのである。彼が神様から戴いた其の力を如何に用ひたかを注意して御覽なさい。高壇から士師記十四〇五—九を朗讀。

或日サムソンは、其の父母と共に、自分の結婚し度いと思ふペリシテの娘を見に行き途中葡萄酒を通つた(一、二)。途すがらサムソンが彼等の前に歩いたのか、又は後に歩いたのか知らないが、一匹の強い怒つた若いライオンが突然彼に飛びかゝつて來た。

神様の聖靈が非常な力を以てサムソンに降つた。彼は手に何の武器をも持たなかつたけれども、恰も小さな小山羊を裂くが如くに、其のライオンを樂々と引裂いてすた／＼にして仕

舞つた。それから又父母と一緒に道を行つたが、其の危険と勝利との事は一言も云はなかつた、そして彼等は例のペリシテの娘を見る爲に一緒に道を進んだ。

時経て後にサムソンと其の父母とが再び同じ道を通つた。彼は一寸脇道に入り、先日の子イオンの骸骨がまだ其處にあるかと思つて見た。すると其の骨組の中に、一群の蜜蜂が蜜を貯へて居たのを見附けた。彼は其の蜜を食べ、又父母にも上げた、併し何處から取つて来たか話さなかつた。

それより後に、ペリシテ人は、サムソンが彼等を攻めたからとて、イスラエルに攻め上つて戦争しに來た、そしてサムソンを殺さうとした。イスラエル人はサムソンに腹を立て、彼がペリシテ人に仕へないで之に反抗したとて責め、ユダの人が三千人集り來り、彼を縛つて敵のペリシテ人に渡して仕舞はうとした。サムソンは自分の國の人が余りに卑怯で自分の味方をする事が出来ぬのを見て大いに失望したことであらうが、若し彼等が自分等で彼に害を加へる事をしないと約束するならば之をも甘んじて忍ぶ積りであつた。そこでイスラエ

ル人等は彼を殺さないと彼に約束した。

イスラエル人等は二條の新しい繩を以てサムソンを縛つて自由の利かぬやうにしてペリシテ人の前に置いた、敵は勝鬨の聲を揚げて彼を目掛けて馳け寄つた。ところが神様の聖靈が彼の上に降り、サムソンは其の繩をば恰も火に焼けた糸を切るが如くに樂々と切つて仕舞つた。

彼は手に何の武器もなかつたけれども、手當り次第に其處に落ちて居つた驢馬の腮骨を見附けて拾ひ上げ、それを以て一千人の敵を殺した、そして残りの者は逃げて仕舞つた。そこで彼は戦争を止めて其の腮骨を投棄した。

敵は打敗られて仕舞つたが、今度はサムソンが咽が渴いて精が盡きた。近くには水もなく助けて呉れる人もない、そこで彼は其の苦痛の中に神様に呼ばはり、「汝の僕の手を以て汝この大なる救をほどこし給へるに、我いま渴きて死に、敵の手に陥らんとす」と祈つた。

そこで神様の御助によつてサムソンは岩の間の窪んだ所に、泉の湧出て居るのを見附けた。

水を飲むと彼の力は恢復し、再び元氣が出て氣持がよくなつた。

神様への感謝の心より、サムソンは此の新しい泉に「呼ばはれる者の井戸」と云ふ名を附けた。此の大勝利の後にサムソンはイスラエルの士師となり、二十年間其の地位に留まつた。

主なる教訓

神様は困難を轉じて祝福となし給ふことが出来る。

勸告

困難が私共の妨げになるか助けになるかは、全く私共のそれに向ふ態度によるのである。若しそれに降服すればそれが私共の主となる。併し神様の下さる力を以てそれに向へば、困難は消失して祝福が之に代るのである。

(例)一人の年若いベルギーの救世軍人が、引込思案で、内氣で、自分の聲を聞くことさへ恐れて居るやうな風であつたが、戦争の時に敵國軍の手に陥つた。數ヶ月間捕虜となり、残酷な扱なせられたが、何時も神様に忠實を續けて居つた。再び本國に返された時には別の人のやうであつた——勇氣のある、決心の固い、火に満ちた人物となり、其の友の間に於

て正義の爲には力ある指導者となつた。彼の捕虜となつたことが彼に取つては「假裝した祝福」であつたのである。

第四十課 感謝祭の話 (十月二日)

十人の癩病人 (ルカ傳十七〇十一—十九。詩篇百三)

諸誦聖句——「わがたましひよエホバを讚まつれ、そのすべての恩恵をわするゝなかれ。

エホバは汝がすべての不義をゆるし、汝のすべての疾をいやしたまふ」(詩篇百三〇二、三)

▲青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

△十一。救主の道順は、多分ガリラヤの南方とサマリヤの北方とを通つて、ヨルダン河を渡り、それよりペレアを経て南下し、エリコの所で再びヨルダン河を渡つたのであらう。

△十二。癩病はパレスチナや東洋一般には甚だ普通な病

である。最初は一向に分らないが、恐ろしい腫物となつて擴がり、遂には手足が腐つて落ち、顔の形が崩れて仕舞ふ。之に就て嚴重な法律が出来て居り、癩病人は家の中でも他の人々と一緒に住むことを禁じられて居つた。屋外に於てさへ何人にも百歩以上近づくことを敢てしなかつた。人が近づいて來ると上唇を蔽うて自ら「不潔々々」と叫ばればならなかつた。

△十六。「サマリヤ人」——彼はユダヤ人なるイエス様が自分を喜んで癒して下さるのを見て驚いた。サマリヤ人なる此の人が又ユダヤ人なるイエス様に恩になつたことに對して謝意を表したことも驚くべきである。

△十八。「異邦人」即ち「外國人」——サマリヤ人はユダヤ人からはさう云ふ風に思はれて居つた。

聖書の教訓

一、彼等の似た點(十一—十四)

(イ)皆困つて居つた。此の十人は其の苦しい病苦によりて一致した、さもなければユダヤ人とサマリヤ人との事であらう。何事をも共にしなかつたであらう。イエス様は彼等の唯一の希望であつた、彼等は若し彼がお助け下さることが出来ぬならばそれこそ滅亡であると感じた。

(ロ)皆お助けを祈つた。人々は何か困つた事や苦しい事、急病や恐ろしい目に遇つた時に祈ることが厭ある、併し萬事都合よく行く時には無頓着である。困つた時や病氣の時御助けを祈ると同じ程に、健康や其他の恩恵を感謝すること速かであつた。

ふかを示す驚くべき實例である。彼等の癒されたのは、行かざる「前に」ではなくて、行く「間に」である。貴君は時々何か自分の知らざる任務の爲に恵を祈り乍ら、後で失敗を恐れて服従することを躊躇することはないか。信仰を以て履み出すことを學べ、さらば必要な恵が與へられるであらう。

二、彼等の異つた點(十五—十九)

(イ)一人丈け戻つて來た。此の一人は他の皆の人と異つた行動をすることを致した。他の人々は如何しようとして勝手だが、自分は救主の御許に戻らねばならぬと感じた。貴君は他の人々の行動に頓着なく自分の爲すべき事を爲す勇氣があるか。

給うた。それ故彼は肉體を癒されたのみならず、靈魂に祝福を受けて歸つた。

(ロ)一人丈けイエスに祝福された。救主は腰を曲げて感謝の言葉に耳を傾け、然る後に其の人の靈魂に祝福を

三、ダビデ王の感謝(詩篇百三〇—一五)

少年科の話の終の方を見られよ。但しダビデは神様の恵を忘れぬやう自ら反省する必要があつた事に特に注意せら

れよ。此の追憶と感謝の精神は凡て「神様の御心に適ふ人」の心の中に見るところのものである。

少年科(六年生以下三年生迄)

今は感謝祭である故、今日は感謝祭の話として、救主が十人の癩病人をお助けになつたことを習ふのである。其の時分は、癩病は中々よくある病氣であつた。多くの浮浪の癩病人が市外の森や荒地に住んで居つた。高壇からルカ傳十七〇—十六を朗讀。

丁度或る村の入口の所で、十人の氣の毒な人々がイエス様に出會つた。彼等は何れも癩病人であつた、困つて悲しさうにして遠くの方に一緒に停んで居つた。

彼等は救主が、お弟子等や群集に付き纏はれつゝ近寄つてお出でになるのを見るや否や「イエス様、先生、私共を御憐み下さい」と一緒に呼ばはつた。

救主の御心には直ちに彼等に對する憐憫の情が満ちた。そして「往きて身を祭司らに見せよ」との奇妙な命令をお與へになつた（癩病人を検査して全快したか尙ほ癩病であるかを云ひ渡すのが祭司の役目であつた）。彼等はイエス様を信じて其の方へ出發した。歩き出してからまだ遠くへ行かぬ間に、十人共何だか前と異つた氣持がした。皮膚は新しく奇麗になり、痛みは去り、皆自分の身體が完全に直つて、仕舞つて居ることを見た。其の中の九人は、早く祭司から直つたとの云ひ渡しを聞き度いと思つて夢中になつて急いで行つた。併し一人は止まつた、イエス様にお禮を申上げ度いと思つたのである。それで他の九人は道に進んだけれども、彼は唯一人後へ戻つた。

此の人は、イエス様に對し神様の力がなかつたならば自分を直して下さることが出来なつたのだと云ふことを知つて居つた。それ故彼は天の父なる神様と、自分を直して下さつたお方とに感謝を申上げ、身を投出してイエス様の御足下に俯伏した。此の人はサマリヤ人と云つて、ユダヤ人から賤められて居つた國の人であつた。

此の人を見詰め乍ら救主は宜うた「十人みな潔められしならずや。九人は何處に在るか。此の外國人のほかに神に榮光を歸せんとて歸りきたる者なきか」と。それから其のサマリヤ人に向ひ「起ちて往け、なんぢの信仰なんぢを救へり」と仰しやつた。

注意——今度は氣の毒なサマリヤの癩病人よりイスラエルの最も偉大なる王——「神の心に適ひし人」ダビデ——に話を轉す。ダビデと彼の癩病人とが其の感謝の精神に於て如何にもよく似て居る。

ダビデは他の人々に語つたのではない、自分に語つたのである、自分の中なる凡ての力に語つたのである。神様の凡ての御恵、殊に罪の赦を忘れてはならぬと自分の靈魂に命じた。

ダビデは自分が屢々罪の病から攻撃を受けたことを知つて居つた。神様はさう云ふ時に彼を亡ぶるまゝに棄て置き給はないで、恵ふかくも彼を癒し給うた。

惡魔は屢々ダビデを滅ぼさうとした。併し神様は彼を守つて彼の生涯に憐憫の冠を被せ給うた。今も彼は倦み疲れて氣を落すやうなことなく、神様の日毎の恵によつてダビデの心を絶えずわか／＼しく希望に満ち、喜ばしく保たれた。

主なる教訓

感謝の精神を與へ給ふやう神様に祈れ。

勸告

感謝の精神は何處に於ても感謝の種を見附ける、反對に感謝のない精神は何處にも不平の種を見附ける。受けて居る恵を見附け出して神様に感謝し、又周囲の人々にも感謝なさい。

感謝は神様が貴君の心の畑に蒔かんと望み給ふ聖靈の結ぶ果の一つである。

(例)神様を信ぜぬ人が或る雪の日に庭を歩いて居た。小鳥が寒さうに又空腹じさうにして小さな樹の下にちどちどまつて居るのを見た。やがて数分間の後に其の同じ小鳥が聲を張り上げて歌つて居るのを聞いた。何うしたのかと行つて見ると、雪の中で一口ほどの食物を見附け、それを食べる前に感謝の歌を歌つて居るのだと云ふことが分つた。其の人は、自分が色々の結構なお恵を戴いて居り乍ら感謝もしないで居ることを耻入り、それから神様に心を向けて救を求めやうになつた。

注意——お話の後で皆の生徒に渡すやうに、献金の袋を用意して置く事。

救世軍の感謝祭は、私共が年中神様から戴いて居る澤山のお恵を特別に感謝する爲の催しである。感謝の徴として、献金をし、困つて居る人を救ふ費用を拵へるのである。諸君もこれによつて感謝の精神を實行することが出来る。

一、感謝

(イ)色々のお恵の事を考へて何時も神様にお禮を申す事
(ロ)御飯を戴く前に感謝の祈禱をするか、感謝の歌を歌ふ習慣を養ふ事。

二、祈禱(今日から次の日曜日まで毎朝毎晩祈る)

(イ)小隊の標的(話す)が貰けるやうに、小隊の士官、下士官、兵士、小隊候補生、義勇團員等の爲に祈る事。

(ロ)日本中の標的(話す)が貰けるやうに、日本中の軍人の爲に祈る事。

三、献金(無理にしなくとも宜しい)

(イ)今日から次の日曜日まで一週間の間にお小使を戴いたならば毎日幾錢か宛貯蓄して置く事。

(ロ)此の次の日曜日(十月三日)の朝、如何程でも貯蓄した丈けを此の袋(渡す)に入れて持つて来る事。

第四十一課 サムソン力を失ふ (十月九日)

——(士師記十六〇四—九、十五—卅)——

諸誦聖句——「わが子よ悪者なんぢを誘ふとも従ふことなかれ。彼等とゝもに途を歩むことなかれ、汝の足を禁めてその路にゆくこと勿れ、そは彼らの足は惡に趨ればなり」(箴言一〇、十五、十六)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

△廿一。其の時分には一定の監獄と云ふものがなかつた、それ故ペリシテ人等はサムソンを盲目にして、逃げて行つても自由がきかず役に立たぬやうにして置いた。

△廿一。女の人は小さい磨で粉を挽くが（ルカ傳十七〇二）、驢馬には大きな磨を挽かせた。だから此はサムソンにさせ得る限りの最も賤しい仕事をさせたことになる。

△廿一、捕虜を盲目にすることは當時普通に行はれた。ヘルシヤの國王は謀叛を起した地方からは眼珠を何貫と云つて強求したものである。刑の執行人は其の貫目丈の眼珠が取れるまでは誰でも出會ふ人の眼珠を抉り抜いて取つた。

△卅。此の度の勝利の大勝利であつた所以は、唯に三千人が死んだのみならず、ペリシテ人の上に立つ牧伯等役人もも死んだところにあつた。

聖書の教訓

一、サムソン誘はる（四一九、十五—十七）

（イ）力の秘訣を尋ねらる。デリラはサムソンが直ちに自

い程であつた。サムソンは其の宗教を失つた故に其の力を失つた。品性を失ふ時に萬物を失ふ。

三、サムソン奴隷となる（廿一—廿五）

（イ）縛られ、眼を抉らる。自由が利かず、盲目であつたけれども、此の牢屋は彼に考へ、悔改める時間を與へ、彼を神様に近づかした。此の牢屋はサムソンをして其の過去を贖ふ爲に神様に立歸らしめる爲の神様の方法であつた（イザヤ書二〇三、五）。

（ロ）神の敵に嘲らる。その如く神様の民が墮落する時に、之を第一番に嘲弄する者は彼等を惡に導いた者共である（マタイ傳廿七〇四）。

四、サムソン力を恢復す（廿六—卅）

（イ）力を求むる祈禱。ペリシテ人等はサムソンはもう何も出来ないと思つた、今にも神様が彼を力ある者とならしめ得ることを知らなかつた。これは墮落して、嘗て有つて居た大いなる機會を失つた人々への大いなる奨励である。若し彼等が謙遜に神様に立歸るならば、神様は又他の機會を授け給ふのである。

分を完全に信用するやうによく注意して計畫を立て、居つた。彼女は彼よりも遙かに機巧で、如何にせば自分の目的を達する爲にサムソンを利用することが出来るかを見抜いた。此處に私共凡ての者への教訓がある。私共は自分が神様に結んだ誓約を守る——破るのではない——に助けとなるやうな人を友達として選ぶやう注意し度い。

二、サムソン計略に陥る（十八—廿）

（イ）誓約を破る。サムソンの長い濃い頭髮は彼が神に獻げられて居る記號であつた。頭髮が失せて、彼が其の嚴かなる誓約を破つた時には、神様は最早彼に力を授け給ふことが出来なかつた。貴君は神様への誓約を破つて居るならば、其の儘では神様の助と祝福とを豫期する權利はない。

（ロ）力を失ふ。サムソンは其の驚くべき力の事に就いては實に無頓着になり、その結果それを何時失つたか知らな

（ロ）死と勝利。最早サムソンが其の生涯によりて爲し能はぬ事を、其の死によりて爲し得るやう神様は彼に力を與へ給うた。彼は神様の敵と戦ふ爲に其の生命を献げた、斯くて天使の豫告せし目的を成就した。神様に叫び求めて其の過去を贖ふ惠を戴くことの出来ぬ程束縛せられ自由の利かぬ人と云ふのはないのである。

注意——ギデオンとサムソンとの比較研究によりて興味のある最も價値ある教訓を學ぶことが出来る。ギデオンは異教の家庭より始め、サムソンには祈つて呉れる両親があつた。ギデオンは弱く賤しめられて居つた、サムソンは生れた時から特別な力を授けられて居つた。兩方共召されて選ばれた。ギデオンは最後まで忠實を續け神様の敵と關係を結ばなかつた、サムソンは彼等と同じ高さまで下つて彼等と混同した。遂には彼等を征服したけれども、其の間に視力と自由と品性と生命とを失つた。ギデオンは年若き救世軍人の做すべき模範であるが、サムソンは彼等への印象深き警戒である。

今日の主なる教訓に就きて適當なる勸告をする。

▲少年科(六年生以下三年生迄)

前週はサムソンが力が強くて神様の敵を平げたところを見た。今日は彼が悪く交際の爲に悲しい失敗をした事を習ふのである。高壇から士師記十六〇四―九を朗讀。

サムソンの敵なるペリシテ人等は、デリラと云ふ婦人を用ひてサムソンの大力の秘訣を見附け出さうと努めた。其の婦人はサムソンを愛して居る如くに見せかけ、ペリシテ人からは澤山のお金を貰ふ約束を受けて居つた。一度はサムソンは、自分を新しい縄で縛れば他の人と同じやうに弱くなると云つて彼女に取合はなかつた。彼女が彼を縛つた時に(ペリシテ人は其の間別の室に隠れて居つた)彼女は「サムソンよ、ペリシテ人がやつて来た」と叫んだ。然るにサムソンは平氣で縄を切つて仕舞つた。

幾度もサムソンはデリラに色々な答をして居つたが、その度毎に彼女は自分の瞞されて居ることを發見した。遂に彼女が彼は自分を本當に愛して居ないのだと罵つた時に、彼は

其の聖き秘密を告げて仕舞つた、即ち神様は彼に生れた時からナザレ人になることを命じ給うたのであると。それ故、彼の力は神様より来たのであつた。若し彼の頭髪を剃つて誓約を破るならば、彼の力は失せるのであつた。

デリラは今度こそサムソンが本當の事を話したと知つた、そこでペリシテの役人等を呼寄せた。彼等は賄賂を携へて來り、何事の起るかを見んとて隠れて待つて居つた。そこでデリラは巧みにサムソンを眠らせて置いて、彼の長い頭髪を剃る人を呼入れた。

前の如くデリラは大聲を揚げて「サムソンよ、ペリシテ人が攻めて來た」と叫んだ。彼は眼を醒まし、前の時と同じく彼等に手向はうとて急いで出た。然るに嗚呼! 此の度は彼は自分の力の失せたることを發見した、そして容易く捕へられて仕舞つた。

ペリシテ人等は、彼が自由の利かぬやうにする爲に、彼の眼球を抉り抜き、彼等の首府に連れて來て牢屋の中で粉を挽かせた。だん／＼時の經つと共に再び彼の頭髪が伸び始めた。ペリシテ人等は彼を捕虜にした事を大いに自慢し、彼等の神が彼を彼等の手に渡したので

めるとて、其の神の爲にお祭をした。彼の眼の見えぬ事と自由の利かぬ事とを以て彼を嘲り弄んでやらうとて、サムソンを半屋の中から呼出して来た。

サムソンは偶像の神殿に立つた時、自分の手引をして居る少年に、其の建物を支へて居る柱に手を觸れさせて呉れと頼んだ。周圍にはペリシテの主なる役人等はすらすらと並び、平らな屋根の上には三千人の男女が居つた。サムソンは神様に呼ばはり「あゝエホバよ、願はくは我を記念えたまへ。嗚呼神よ、願はくは唯今一度我を強くして、我が敵に仇をむくいしめたまへ」と祈つた。

然る後に左右の両手に二本の中柱をかゝへて、サムソンは力の限りに之に寄掛つた。柱は曲つて重い屋根が崩落ち、神殿は倒れて役人等も人民も殺されて仕舞つた。サムソンは自分も彼等と共に死んだ。斯くサムソンは、盲目ではあり、縛られて居つたけれども、生きて居る間に得たよりも、大いなる勝利をその死によりて得たのであつた。

主なる教訓

悪友は身を滅ぼす基であるから氣を附けねばならぬ。

勸告

今日も尙ほ己が利益を目的として、私共の友情と信用とを得ようと努めて居る見附きは氣持がよくて實際は善くない人々が随分澤山ある。時にはデリラの如く、さう云ふ人々が、自分分は神様を信仰して居るのであると云ふ事さへある。若しさう云ふ人々に心を任すならば、罪の中に誘ひ落され、その間にはサムソンと同様な恐るべき失敗を見るであらう。それ故私共を説き勸めて悪い事や人を瞞す事をさせようとする人々と一切關係してはならぬ、又私共を神様から遠ざけるやうな友達を避けねばならぬ。

(例)ベツシーさんは家から遠い所で奉公して居た。集會に来て居つた一人の婦人がお上手を云つて詔はれた。組長や士官から注意されても自分が一番精巧だと思つて聞かなかつた。だん／＼誘はれて制服を着ぬ様になり、集會に遠ざかり、世俗的な服装や快樂を求めらうになつた。それから酒屋へ連れてられて薬の入つたレモンを飲まされた。此の娘が馬鹿のやうになつて其の悪友に手を引かれて家に歸る所を組長さんに救はれたが、若し其の時救はれなかつたらばすん／＼とひどい墮落の道に引落されるころであつた。

第四十二課 ルツの決心 (十月十六日)

——(ルツ記〇一—廿二—廿三—廿四—廿五—廿六—廿七—廿八—廿九—三十は話す)——

諸誦聖句——「我は汝のゆくところへ往き、汝の宿るところにやどらん。汝の民はわが民、汝の神はわが神なり」(ルツ記一〇—十六)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

△一。大抵の人はエリメレクが約束の國を去つて異教の民の間に行つて住んだのが悪かつたと考へて居る。
△三。ナオミが如何に不自由を感じたか今日の私共には殆ど諒解の出來ぬ程であつたに相違ない。其の時分には寡婦の生計を立て、行く道が少なかつた。それで彼は非常な貧苦に陥つた。
△十五。オルバはナオミと一緒に居る間は多分眞の神様に仕へて居つたのであらう、併し今は再び異教の禮拜に歸

るのであつた。

△十九。此の旅行は五十哩程であつたが、當時は通信は不便であるし、ナオミが去つて以來人々はナオミに就いて何の消息をも聞かなかつたのである。

聖書の教訓

一、ナオミの悲痛(一一—五)

(イ)飢饉、此の災害は多分人民の罪の爲に降つたのであつたらう。士師時代を通じてイスラエル人は始終偶像禮拜に墮落し、その都度種々の刑罰を蒙つて居つた。爲すべきを以て満足しなかつた。自ら考へて行爲を定めた。他の人々が背を返して歸る時こそ、神様が私共に己が堅實を説明すべき機會を與へ給ふ時である(ヨハネ傳六〇—六十六—六十八)。

(ハ)彼女の強固な決心。ナオミが一度ルツの愛と目的と信仰とを知るや、最早別れることを云はなかつた。その如く靈魂が一度眞の其の代價を勘定し、其の選擇を定めたならば、キリストより離れると云ふ問題は二度に持つて來ない。唯極く微かな薄い蔭が其の間を遮ることをさへ恐れるのみである。

三、ナミの故里(十九—廿二)

(イ)舊き友達。彼等はナオミが飢饉を逃れたけれども、悲痛を免れ得なかつたことを見た。私共が今知つて居る困難を避けようとする前に、今知らぬ更に恐しき困難に走り込むことなきかを確かめねばならぬ。

(ロ)苦き經驗。これは實に悲惨な證言であつた。ナオミは其の悲痛の余りに神様が自分に逆つて居ると思つたやうに見えた、併し神様は彼女を離れ給はなかつたのである。私共に於てもさうである、殆どナオミと同様な證言を立て

二、ルツの無私(二六—二十八—三十は話す)

(イ)彼女の機會。ナオミが其の媳等に來ることを強ひないで、家に歸る自由を充分に與へたのは智慧のある事である。その如く今日も決して頼んでして貰ふことの出來ぬ犠牲がある。さう云ふ事はたゞ快く、而も愛の爲にのみ行はるべきものである。

(ロ)彼女の姉妹の行爲。ルツはオルバの眞似をすること

正當な事はツロモンの云ひし如くであつた(歴代志略下六〇—廿六—卅一)——モアアに逃れ場を求めたのではない。
(ロ)寂寞。エリメレクと其の妻とは知らぬ土地に來り、周圍は皆偶像禮拜者とは随分寂しがつたに相違ない。殊に息子等が異教の娘等と結婚した時には二重に悲しがつたであらう。併しそれ以外に彼等は何を豫期することが出來よう。

(ハ)死別。ナオミの苦き杯は縁まで満たされた、先づ其の夫を取られ、次に其の二人の息子を取られた時に。併し彼女が見棄てられた如く寂しく見えたけれども、神様は彼女の爲に特別なる祝福を用意してお出でになつたのである。我々は我々の恐怖よりも神様の方は御親切である。

ることの出来るやうな時もある、併し「主の成し給ひし果」
(ヤコブ書五〇十一)を見る時に前の事が分つて来る。
(ハ)忠實な連れ。種々の苦痛のありしにも拘らず、ナオ
ミのルツに及ぼした感化は偉大なものであつたに相違な
い。何となればナオミが「全能者痛く我を苦めたまひたれ

ば」と不平を云つたけれども、ルツの立派な信仰と愛とは
「汝の神はわが神なり」と宣言したからである。それで彼
は其の小さな家で一緒に神様に仕へた、ルツはナオミの生
涯に於ける一つの輝ける點であつた。
今日の主なる教訓に就きて適に勸告をする。

少年科 (六年生以下三年生迄)

今日と此の次の日曜日とは一人の異教の國の娘が、其の堅き決心と心盡しとによつて不朽
の名譽を得た話を習ふのである。高壇からルツ記一〇一十を朗讀。

士師がイスラエルを治めて居つた間に其の國に大飢饉のあつたことがある。食物の缺乏
を避ける爲に一人の男が其の妻及び二人の息子と共にイスラエルの地を去ることに定めた。

彼の名はエリメレク、妻の名はナオミ。彼等はモアブの國に到着し、イスラエルに飢饉の
續く間、其處に住み續けて居つた。

間もなく夫は死に、妻のナオミは寡婦となつた後に残された。息子等はそれ／＼オルバ、

ルツと云ふモアブの婦人と結婚した。十年の後に其の息子等も亦死に、斯くてナオミのみか
二人の媳も皆寡婦となつて仕舞つた。

斯うして此の異教の土地に暮して居る間にナオミは、神様がカナンの國の人々を恵んで善
い收穫をお與へになつて居る由を聞いた、そこで故里なるベツレヘムの町へ歸らうと決心し

た。それ故彼女はモアブを立つてユダの國へと歩き始めた、そして二人の媳も其のお供をし
た。途中でナオミが媳等に云つた「お前さん等はそれ／＼自分の母の家にお歸りなさい。そ

しても一度お嫁に往きなさい。お前さん等は死んだ者にも私にも親切にして下さつた、神様
がお前さん等にお恵を下さるやうに」と。彼等はお互に接吻し乍ら泣いた、そして二人の媳

は云つた「私共はお供をして一緒に貴女のお國に歸りませう」と。
組長への注意—ナオミが色々娘等に説明して、一緒に來ないのが一番お前さん等の爲に善い。自分は老人で、貧乏で、
子供もなく、何もお前さん等に斯うして上げようと云ふことの出来るものはないと云つたことを組の生徒に話す。

尙ほも痛く泣き乍ら、オルバは姑に接吻をして、モアブに歸らうとて後を振り向いた。併し
ルツはナオミの側を離れない。「これ御覽なさい」とナオミは云つた「お前さんの姉は自

分の家に歸りなされたよ。お前さんも其の後を追うてお歸りなさい。

「貴女を離れて歸れとは云つて下さいませ。私は何處へでも貴女のお出でになる所へ参ります。また貴女のお宿りになる所に私も宿ります。貴女の神様もお國の人も自分のものと思ひます」とルツは云つた。ルツの其の姑に對する愛は誠に深く、自分は姑の死ぬ所で死に度い、死んで別れる場合の外は決して別れ度くないと云つた。ナオミはそこで自分と共に行かうとのルツの堅い決心を見たから、最早繰返して歸れとは云はなかつた。

遂に二人はベツレヘムに着いた。人々はナオミを憶えては居たが、彼女は大いに變つて居つた——頭髮は白く、顔は蒼白く。彼女が通つて行くと、婦人等は尋ねた「此が本當にナオミさんでせうか」と。

「私をナオミ(樂し)と呼んで下さいませ。大層苦しい目にあひましたから『苦し』と云つて下さい」と答へた。それから神様が先づ其の夫をお取りになり、次に二人の息子をお取りになつた事を彼等に話して聞かせた。

そこでナオミとルツとが一緒にベツレヘムに住まふことになり、ルツは姑のお世話をした、其の過去の悲痛を慰め、希望を有つて神様に信頼するやうにお助をした。

主なる教訓

事を定めようとする時には、自分の利益のみを考へないで、神様の御榮光と他の人々の安全との爲を考へなければならぬ。

勸告

ルツのやうに私共は誰でも時々大切な事を何方にするか定めねばならぬ事がある——お友達、職業、宗教、又は將來の方針等の事。又小さい事についても何方にするか定めねばならぬことが屢々あります——讀物、遊び事、日々の行爲の細かい點、暇な時間の使ひ方等の事。私共はルツと共に第一には「何方を神様がお喜びになるであらうか」、其の次には「自分のみならず、他の人々の爲にも何方が一番益になるであらうか」と考へなければならぬ。

(例)エルシーさんは年が十四歳。大層機巧で、丁度學校を卒業したばかりであつた。立派な地位を得ることが出来るの

であつたけれども、さうすれば士官になると云ふ考を全く止めて仕舞はねばならぬ。そこでそれよりもつと低い職業をする事に定め、年が充分になつた時には士官として神様の御爲に、又他の人を助ける爲に働くことの出来るやうにした。

第四十三課 ルツの骨折と報賞 (十月廿三日)

——(ルツ記二〇一—廿三、四〇九—一七を話す)——

誦聖句——「我をたふとむ者は我もこれをたふとむ、我を賤しむる者はかろんせらるべし」(サムエル前書二〇卅)

▲青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

▲二〇一。ボアズはエリコのラハブの息子であつた。ラハブはイスラエル人と結婚した、斯くて「ラハブは今日までイスラエルの中に住居る」(ヨシヤ記六〇廿五)との言葉が成就せられた。

▲四。此の美しい祝福の言葉は今日も東洋では聞くこと

が出来る。此は主人と働人との間が最も幸福なる關係に居ることを示した。

▲廿。猶太の律法によれば最近親の人即ち贖業人には左の如き義務があつた、(一)死んだ縁者の財産を贖ふ即ち買ふ事、(二)其の寡婦と結婚する事。必要な場合には死人の仇打をする事。ルツの場合には贖業人はそれを好まなかつたから(四〇六)、その次の近親者なるボアズが右の最初の

二つの點を實行した。

▲四〇十一。昔は市の門の所は公けの事を取扱つたり、裁判を行つたり新しい知らせを評議したりする爲の所となつて居つた。

▲十三。マタイの書いた救主の系圖の中には婦人が四人しかない、其の中の二人は異邦人である、即ちカナン人ラハブ及びモアブ人ルツ(五節)の二人である。これは神様が何れの國民をも同等に大切に思つてお出でになるとのいなる證言である。

聖書の教訓

一、ルツの畑仕事(二〇一—廿三)

(イ)落穂拾ひ。よくよく食物に困る人でなければ畑に行つて落穂拾ひをしなかつた(レビ記十九〇九、十)。それ故ルツの此の申出は彼女の謙遜と、最も賤しい種類の仕事を自ら進んで快く行ふ心と、又彼女のナオミに對する愛とは實際的であつた——言葉のみならず實行にあらはれた——ことを表して居る。十誡の第五誡への服従の立派な模範である。

(ロ)新しき友。ルツの過去の行爲が畑に於ける彼女の道

を容易ならしめた。ボアズはルツの善い行爲の事を聞いて居つた、他國から來た者であるけれども其の品性はよく知られて居つた、彼女は皆から尊び敬はれた。私共の行く道が困難である場合には屢々其の責は他の人々になくて、自分にあることがある。

(ハ)親切な待遇。親切な行爲を親切なる方法を以て行ふことを學べ。ボアズはルツが拾ふやうに穂を穂と落させた、これは乞食を取扱ふやうに唯與へるよりは親切な仕方である。自分で儲けるやうに人を助けることは、之を貧乏人として取扱ふよりも一層其の人の爲になる。これが救世軍のやり方である。

(ニ)夕方の歸宅。ルツは尋ねられることに反對しなかつた。其の日の出來事を悉く熱心になつて話した。今日人の干渉を受けることを拒む青年が余りに多過ぎる「もう自分の事は自分でやれる年になつて居ます。入らぬお世話です」と云つたり、父母と語り合つたり相談したりすることを喜ばない。ルツには少しもさう云ふ精神はなかつた。

二、ルツの大報賞(四〇九—一七を話す。マタイ傳一〇五)

(イ) 仕合せな結婚。此處に至るまでの詳細に就いての聖書の記事(三章)は私共には奇怪に見える、併し當時は子供のない寡婦は其の前の夫の名がイスラエルの中から消滅することのなきやうに最近親者に再婚を求めることが義務となつて居つた。それ故私共には堪らしくないと見ゆる行爲が、單に其の最近親者の保護を要求したに過ぎなかつたのである。

(イ) 小さな息子。歐洲の大戦争に於て子供が悉く取り去られて仕舞つた家庭の悲劇を思ふ時に、此の「最近親者」に關する律法にあらはれたる神様の恵ふかき規定の價値を痛切に感じ、又ルツの赤子がナオミに取つては如何に大い

なる喜悅また慰藉であつたに相違ないことを悟るのである。

(ハ) 王なる子孫。ルツは其の故國と異教の神々を後にして出て來た時には自分の受くる報賞の如何に大いなるものなるかは一向知らなかつた。併し彼女は想像だにしなかつたけれども、凡てのイスラエルの娘の羨み望みたる、メツシャの先祖の一人たる光榮を擔ふことを許された。此の世の報賞は速に過ぎる、併し神様のお考は遠大で、其の與へ給ふ恵は限りなく、永遠に至るものである。今日の主なる教訓に就きて適當に勸告をする。

少年科 (六年生以下三年生迄)

前週はベツレヘムなる其の小さな家にナオミとルツとが住まふ所までであつた。今日は其の後の彼等の行動を見るのである。高壇からルツ記二〇一七を朗讀。

ルツは其の姑を養ふ爲に何かしなければならぬと思つた、そこでナオミに云つた「私は出掛けて行つて、畑で麥刈をして居る人の後に附いて落穂を拾ひませう」と。ナオミが同意し

た、そこでルツは行つてボアズの畑で落穂を拾つた。ボアズはナオミの夫の親類で金持であつた。

ボアズは人々が仕事をして居るのを見廻りに來て「願はくはエホバ汝等と偕に在せ」と彼等に挨拶の言葉を述べ、彼等はそれに答へて「願はくはエホバ汝を祝たまへ」と云つた。刈手の間にルツの居るのを見て、彼は監督の人にそれは誰だか尋ねた。「ナオミさんと一緒に歸つて來たモアブの娘で御座ります。此處で落穂を拾はせて下さいと頼んで、今朝早くから今まで精出して働いて居りました」と答へた。ボアズはルツの所に行つて話した。此處で家の刈手等の側においでなさい。そして咽が渴いたならば備附けてある器の所に行つて自由にお上りなさい」と。

ルツはボアズの前に頭を低く垂れ、私のやうな餘計の國から來た者に、何とてさう御親切にして下さるので御座りませうかと云つた。ボアズはルツが何故其のモアブの家を去つて來たか其の理由を知つて居ると云ひ、願はくはイスラエルの神エホバ即ち汝が其の翼の下に

身を寄せんとて來れる者、汝に十分の報施を賜はんことを」と立派な祝福の言葉を彼女に與へ、又彼女が彼の刈手等と一緒に食事をやるやうにして呉れた。刈手等には穂と穂を落してルツに拾はせるやうにと云附けた。

長い其の日も暮れて、ルツは其の大麥を打ち、晝御飯を戴いた時に姑の爲にと取つて置いた食物と一緒に、それを家に持つて歸つた。それからナオミに其の日の出来事をすつかり話した、そしてボアズは自分の死んだ夫の近い親戚であることを聞かされた、ナオミは「他の畑に行かないで、何時も其の刈手等の側に居るやうになさい」と云つた。ルツはナオミの云つた通りにして、收穫時の終るまで毎日其の畑で落穂を拾つて居た。

組長への注意——其の時分は夫を失つた婦人には其の一番近い親類の男が結婚するのが規則となつて居つた、ことを組の生徒に説明する。それ故、若し他のもつと近い親類の人がそれをすることが出来なければ、ルツと結婚し、其の夫に屬して居つた土地を取る事がボアズの義務であつた。

ボアズは市の門に於て、即ち公會所に於て、自分の周圍を取巻いて集つて居るベツレヘムの主な人々に向ひ、最近親者がルツと結婚することが出来ぬから、自分がさうする旨を發表

した。それ故ルツを嫁つて自分の妻にした。人々は彼女の上に祝福を祈り、喜んでイスラエルの一人の娘として彼女を歓迎した。

暫くして後に神様はルツに一人の小さい息子を下さつた。其の孫を抱いてお守をして居るのを見ては、ナオミの仕合を喜ばぬ婦人は無いと云ふ程であつた。其の赤坊の名をオベデと呼んだ。

此の子供は牧羊王ダビデの祖父となつた。其のダビデは小さい時に、ルツが落穂を拾つて居たベツレヘムの丁度其の畑で遊び廻つたのであつた。

ルツは尙ほそれよりも更に貴い光榮を擔つた、何となれば彼のダビデが救主イエス様の先祖となつたからである。斯くの如く神様はルツに恵の杯を溢るゝまでに満たし給うた。

主なる教訓

神様が御自分を尊ぶ者を尊び給ふには神様獨特の方法がある。

勸告

何時も必ずしも、ルツの場合に於ける如くに、此の世の愛と喜悦と慰藉とを下さるとは限らないが、一人々々の生涯に對する神様の御計畫の中には、私共の思ひも寄らぬ勝れた報賞が含まれて居るのである。困難も失望も神様の御計畫を妨げることが出来ない、利己心と短氣とが全くこれを覆して仕舞ふのである。

(例)私共の第一の大將は、五十五年程前に、聖靈の御指導と信するところに服従することによつて神様を尊ばうと決心した。友人や敵の反對、貧乏、失望等にも屈せず忍耐した。其の結果神様は彼を尊び給うた、そして彼は世界的救世軍の創立者として永久に記憶せられるであらう。

第四十四課 サムエルの幼時 (十月三十日)

——(サムエル前書一〇八—一八、一九、廿、廿四—廿八。二〇一、二、七—九を話す)二〇十一—十九、廿六——

諸誦聖句——「すべてエホバをよぶもの、誠をもて之をよぶものにエホバは近くましますなり。エホバは己をおさるゝもの、願望をみちたらしめたまふ」(詩篇百四十五〇十八、十九)

青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

▲一〇十四。婦人が酒に酔うて神の家に入り来ることを想像することが出来たと云ふことは其の國の當時の状態を示して居る。

▲二〇一。ハンナの歌は詩篇百十三篇に幾分と、又處女マリアの頌歌の中にも幾分見えて居る(ルカ傳一〇四十六—五十五)。

▲十二—十六。祭司は犠牲の幾分を得る権利があつた、併し此の二人の兄弟は神様にまだ献げない間に自分等が一番善い部分を取つた(レビ記七〇廿八—卅四)。彼等の罪は二重であつた。即ち彼等は自分がさうやつて罪を造つたばかりでなく、其の行爲のために人民が神様に犠牲を献げることゝ厭ふやうになつたから、他の人々にも罪を犯させることになつた(マタイ傳十八〇七)。

▲十九。此の朋友は毛で織つたもので、縫目がなく、殆ど地面まで届くほど長く、頭や腕を通す所には孔が出来て居つた(ヨハネ傳十九〇廿三)。反物を織つたり、着物を拵へたりするのは昔は婦人のみの仕事であつた。

▲十九。年々エリの息子の話を聞く毎にハンナの心は心

配の爲に裂けんばかりに感じたに相違ない。併し彼女の堅實な信仰は彼女をして信じて其の子を神様に任せ、彼がさう云ふ境遇の中にあつても尙ほ善長に保たれ得ることを信ぜしめた。彼女は事を正しくする爲に神様の時を待つた。

聖書の教訓

一、ハンナの深刻な悲痛(一〇八—一八)

(イ)彼女熱心な祈禱。人の靈魂を直接神様の御前に連れ来る困難の祝福を見よ。此は人を個人的の献身に導き、更に大なる奉仕の道備へをなし(十一)、天より答を呼降す(廿一)。

(ロ)エリの粗忽な言葉。エリは人物を分ける智識が余り無かつたと見えて、外見によつて判断した。彼は他人には苛酷で、自分の息子には弱かつた、而も其の息子の罪は公然な明白なものであつたのである。

(ハ)彼女の柔和な返答。神様の家に於て神様の御働をして居つてすら、ハンナの如くに自分の上に立つ人々から感情を害せられたり、誤解されることがあるかも知れぬ。併し若し彼の如く忍耐ぶかくし、快く説明し、僅かな事を氣にしないやうにすれば、勝利と祝福とを得る(箴言十五〇

二、ハンナの大きな喜び(十九、廿、廿四―廿八)

二〇一―十を話す)

(イ)彼女の男の赤坊。ハンナはサムエルの幼い時が肝心であることを悟つた。彼女は家に止まつて、あらゆる限りの注意を彼に拂ふことを厭はなかつた。サムエルは此の出発の善かつた爲に將來一生の間益を受けた。今日多くの子供等が放任せられ、夜遅くまで外に居り、本當の家庭と云ふものが無く、何の躰けもなしに成長する儘に棄て置かれ、其の出発の時から傷はれて居る。

(ロ)彼女の一生の献物。誰もハンナに其の誓約を果たせよと強ひなかつた。彼女は絶えずそれを自分の前に掲げて忘れなかつた、サムエルを一生の献物として献げた。多くの人々は其の誓を果たすことをしないから神様より受くる答の恵を失ふのである。

(ハ)彼女の讚美の歌。家庭の義務は高尚な思想や神様の爲に働くことを妨げるものではない。ハンナは田舎の村の家の中から、永久に忘れられることのない歌を世界に與へた。

三、サムエルの新家庭(二〇十一―十九、廿六)

(イ)彼の悪しき連。此の二青年の如く。自分の父は救はれて居るとか、高い地位を占めて神様の爲に働いて居るとか云ふので、自分は何でも勝手な事が出来ると思ふ青年等に對する嚴かなる警戒が此處にある。此の二人の兄弟は、後日は祭司の長になる積りで居り乍ら、尙ほ滅亡の道に歩いて居つた。サムエルは質朴な田舎村の子供で、知人からも遠く離れて居つたが、それでも力と感化を得る道に進んで居つた(ヨハネ傳十七〇十五)。

(ロ)彼の母の精神。ハンナの幼時の訓練と祈禱とはサムエルの靈魂を圍む火の垣となり、誘惑と悪事とに取巻かれて居る中にも彼を聖く保つた。彼女は悪魔の先を越したのである。最も善良と思はるゝ人々の間に子供を送る時にも尙ほ念に念を入れて悪の感化を受けぬやうに萬一の場合の爲に用意しなければならぬ。

(ハ)彼の堅實なる成長。サムエルは父母の模範とエリの教によつて何が正しいかを知ることを學んだ。又エリの息子を見た時に惡の何たるかを學んだ。或は此の二人はサムエルをも同じ惡に引入れようと努めたかも知れない。併

し彼は自分で自分の行爲を定めた。貴君もさうしなければならぬ。サムエルは上に立つ人々の言行不一致を理由とし

て神様に仕へる事を止めはしなかつた。今日の主なる教訓に就きて適當に勧告をする。

少年科 (六年生以下三年生迄)

今日は、將來其の國家に取り、又彼の傳記を讀む凡ての人に取りて大いなる祝福とならんとして居つた一少年の話を始めるのである。高壇からサムエル前書八―十八を朗讀。

ベニンナ、ハンナと云ふ二人の妻を有つたエルカナと云ふ人は神様を禮拜し犠牲を献げる爲に年々神様の聖殿に參つた。ベニンナには子供があつた、けれどもハンナは子供がないので、其の夫――夫は彼女を非常に愛して居つた――は色々方法を盡して慰めようと努めたけれども彼女はその事を大變に悲んだ。或日ハンナは心の中の大きいなる悲痛を携へて神様の家に行き、若し神様が男の赤坊を一人下さるならば、其の子を神様の僕とならしめ、生れた時から神様の御用の爲に献げると涙ながらに約束の祈禱をした。

ハンナが神殿で祈つて居るのを老祭司のエリが眺めて居たが、彼女が唇を動かして居る

けれども、一向に聲を出して物を云はないのを見た。彼はハンナが酔拂つてるのだと思つて吐つた、そして酒を飲んでならぬと云聞かした。

ハンナはそれにも腹を立てず、柔しくエリに答をなし、それは彼の思違である事、自分は悲しくて、其の悲痛の爲に神様に祈つて居るのである事を話した。エリは自分の悪かつたことが分り、彼女に祝福の言葉を與へ、又神様が彼女の祈禱に答へ給はんことを祈つた。ハンナは心の中に平和と信仰とを以て家に歸つた。

神様はハンナの祈禱をお聞きになり、聽て一人の息子を與へ給うた。彼女は其の子に「サムエル」と云ふ名を附けた「神様に聽かれた」との意味である。何うか身體も精神も丈夫に育つやうにと母親は數年間家に止まつて其の子の世話をしたり、躰をしたりした。

サムエルが母の側を離れることが出来るやうになるや否や、早速ハンナとエルカナとは彼をシロの町へ連れて行つた。彼等は又神様への供物をも持つて來た。彼等がエリの前に來た時に、ハンナは申した「私は前に此處に立つて神様に祈禱をした其の婦人でござります。

此の子供が欲しくて祈つたのでしたが、神様は私の祈禱をお聞きになつてお答へ下さいました」と。それから其の男の子を神様の家に連れて來た事、其の子の一生を神様に献げた事をエリに告げた。

ハンナは其の心に満つる喜びを立派な歌にあらはして神様を讚美した。神様を己が磐石として喜び、神様の御力を見ることを樂み、又神様を愛して之に仕へる者の足を守り給ふことを確信して居つた。

そこでサムエルは神様の家に殘され、父母は家に歸つた。エリには、サムエルよりもずつと年の上な二人の息子があつたが、甚だ性質が悪かつた。人民が神様の祭壇に供へようとて献物を持つて來ると、彼等は其の一番善い所を自分等の爲に取つて行つたりして、誠に利己的な慾張りな、神様を敬ふことを知らぬ青年共であつた。

併しサムエルは着實に其の仕事——神様に仕へる事を續けてやつて居つた、そして毎年父母が禮拜の爲にシロに來る毎に、其の母の顔を見ることが出來た。母は又自分で織つて拵へ

た新しい可愛い上衣を彼に持つて来て呉れた。

歳月は過去り、サムエルは次第に成長して、親切な眞實な青年となつた。神様の特別な愛は彼の上であり、又彼が其の義務を忠實にそして立派にやるので周りの人々は彼を愛した。エリの息子等は益々悪くなつたが、サムエルは少しも彼等と關係しなかつた。多分彼は出来る限り彼等を遠ざかるやうにして居つたのであらう。

主なる教訓

神様は喜んで祈禱を聞き、之に答へ給ふ。

勸告

サムエルの母は彼の生れる前に祈つた、生れてから後も彼の爲に祈つたに相違ない、多分母の祈禱が助となつて彼が悪に染まぬやうに保たれたのであらう。貴君には祈つて下さる母があるか、神様に感謝し貴君の爲に祈る母の祈禱が答へられやう、母の教をよくお聞きなさい。或は貴君の母は祈禱をなさらぬかも知れぬ、だからと云つて失望することはない——母

の爲に祈つてお上げなさい、さうすれば母も亦自ら祈ることを覚えるであらう。

第四十五課 第四決心日 (十一月六日)

サムエルと神の聲 (サムエル前書三〇一—十八)

誦讀聖句——「エホバ來りて立ち、まへの如くサムエル、サムエルとよびたまへば、サムエル「僕さく、語りたまへ」といふ」(サムエル前書三〇十)

注意——第五課の初めにある注意は今日の決心日にも當條まる。
司會者への助言——これは信者の家庭に於て救世軍の感化の下に育てられながら、未だ自分では本當に神様を知らずに居る少年少女に助となるべき學課である。

▲青年科及び少年科

前週はサムエルが正しい行爲をすることを選り、エリの悪い息子等には注意を拂はなかつたことを習つた。今日は神様が彼を神様の使者として選り給うたところを見るのである。高

壇からサムエル前書三〇一十を朗讀。

一、神の聲を聞く(二一七)。神様は一つの大變悲しい事をエリに傳へねばならなかつた、そして誰かそれを傳へることの出来る人はないかとお探しになつた。何故神様はエリの息子等を選んで神様の使者となさるなかつたでせうか。彼等は余りに利己的で邪惡であつた、お云附けになつても多分聞かなかつたであらう。それでは何故直接エリに其の事をお傳へにならなかつたでせうか。彼は其の息子等を厳しく扱はなかつた爲に神様の御心を痛め奉つて居つたからである。

或夜サムエルが靜かに寢床の中で眠つて居ると、突然自分の名を呼ばれるのを聞いて眼が醒めた。彼は飛起きて先生の所へ走つて行つた。エリの仰しやる事は何でも快くする積りで「はい、參りました」と云つた。けれどもエリは、自分は呼ばなかつたから、行つて寢よと云ふ。

二度目彼は自分の名を聞いて、また飛起きてエリの所へ行つた。或る子供ならば「面倒臭

い、呼ぶなら勝手に呼べ、もう行かないよ」と云つたかも知れない。併しサムエルは、それが神様御自身がお呼びになつて居るのだとは一向に知らなかつたけれども、従順で慎みぶかつた。

勸告——神様はサムエルの知らなかつた事をお怒りにはならなかつた、彼は自分の知つて居る事を精一杯務めて居つたのである、だから神様は喜んで彼に色々の事を教へて下さつた。併しエリの息子のやうに、上に立つ人の聲を聞き棄てにする人は決して神様の御聲を聞かれないものでない。

二、神の聲と知る(八十四)。三度目サムエルが、また呼ばれたと云つて來た時に、エリは其の語つてお出でになるのは神様であると悟つた。「行つて寢ておいでなさい。また其の御聲が聞えたら『僕さく、エホバ語りたまへ』と云ひなさい」と教へた。

それでサムエルは寢て待つて居つた、再び其の御聲が彼を呼んだ時に、エリに教へられた通りに答をした。そこで神様はエリに傳へる事を彼にお告げになつた。エリは其の息子等の

悪を止めないで、我が儘をさせて置いたから、彼も其の息子等も神様から罰を受けると云ふ事であつた。サムエルは此の言葉を聞いた時に、何んなに悲しく心裂けんばかりに感じたことであらう、最早その夜は眠ることが出来なかつた。

勸告——サムエルはよく物を知らなかつたけれども、快く教を聞く心があつた。「エホバ語り給へ」と云つた。後で神様から彼の恐ろしいお言葉を聞いた時には多分困つたと感じたであらうけれども、彼は本気でさう云つたのである。私共も「神様よ、語り給へ」と申し上げるならば、神様は私共にもお語りになる。併し時にはサムエルの如くに、神様の御爲にせよとて何か六ヶ敷さうに見える仕事を授けになることがある。

三、神の聲に従ふ(十五—十八)。間もなく朝が来た。サムエルは心配である、自分の前には困難な義務が横つて居ることを知つて居る。戸を明け、恐れ戦きつゝ、自分の務をして居つた。到埃エリの聲がしたので彼の所に行つた。「神様は何をお告げになりましたか」とエリは尋ね、「何も私に隠すことは入らぬ」と云つた。そこでサムエルは恐れる心に打勝つて、正直に凡

ての事を忠實にエリに告げた。エリは「是はエホバなり、其のよしと見たまふ事を爲したまへ」と云つた。

此の後神様はサムエルの信用出来ると云ふことをお知りになつた。それで再び彼にお語りになつて助け恵んで下さつたので、遂に誰も彼もサムエルが着實で、だん／＼進歩して後には一老人のみならず、全國民にまでも神様の御言葉を傳へる神様の使者となりつゝあることを知るやうになつた。

勸告——サムエルが驚いたり、心配に思つたりしたのは悪くない、併し若しその爲に黙つて居つたり、嘘を云つたりしたならば悪い。彼は自分の感情に勝つて正しい事を行つた、それで神様も彼を助け給ふことが出来た、そして此の試験の後には彼を神様の使者となす爲に選び給うた。今日貴君が目上の人々に對してあらはす勇氣と眞實と服従との如何は、後日神様の使者として人々の間に遣す丈けに神様が貴君を信用することが出来るか否かを示すのである。

主なる教訓

或は貴君は時々主の御聲が貴君の靈魂の中に明かに「救を受けよ」、「お母さんのお手傳をせよ」、「本當の事を云へ」、「學校友達の爲に祈れ」等語り給ふのを聞いたかも知れぬ。若しさうとすれば、これは大なる機會である、主の仰しやる事は必ず速かに實行なさい。或は貴君は「若し神様がサムエルに語り給うたやうにお語りになるならば、従ふのだが」と思つて居るかも知れぬ。併し若し貴君がサムエルの如くに(1)毎日の小さい義務をよく行ひ、(2)目上の人の云附けには直ぐに従ひ、(3)何でも神様の仰しやる事を喜んでする積りになるならば、神様は貴君にも其の思召を取違へる事の出来ぬやうにはつきりと教へて下さる。「厭だ」、「後で」、「面倒臭い!」、「こればかりは御免だ!」、「何故他の人にさせないんだ」等—他の人々にでも—云ふならば、それは不精な精神をあらはすものであつて、サムエルのとは餘程異ふ。何時でも神様が御旨を示し給うた時、又は目上の人が貴君の爲すべき義務のある事を爲すやうに頼んだ時には、必ず「はい」とお答へなさい。

何よりも大切な事は此の午後神様が救を求めよと貴君を招いてお出でにならぬでせうか。若しさうならば、聞くことを拒まずに、只今御聲に従ひなさい(悔改の座)。

(例)幾年か前にニュージラランドの一人の娘が前大將の集會に出席した。神様の御聲は大將と漁人(すなごりびと)とによりて此の娘に「今救を受けよ」と語つた。そこで直ぐに悔改の座に出た。それで「はい」と云ふ精神を表した。それから兵士となる時にも「はい」、士官の志願をする時にも「はい」外國へ行け「はい」。何時も「はい」と云ふ精神を續けて行つた。そして今では日本に於て成功ある士官として犠牲の働をして居る。

第四十六課 イスラエルの大敗北 (十一月十三日)

—(サムエル前書四〇一—十八、廿一、廿二)—

諸誦聖句「—かれら智識を憎み、又エホバを畏るゝことを悦ばず、わか勸に從はず、凡て我督斥をいやしめたるによりて、已の途の果を食ふべし」(箴言一〇廿九—卅一)

▲青年科(十三歳以上)

聖書の註解

△四。染みなき衣も完全なる儀式も青年等の心が眞黒に腐敗して居つては何の役に立ちませうか。

△十。步兵とあるは騎兵も戦車もなかりし事を意味す。詩篇七十八〇六十及びエレミヤ記七〇十二に照らして見ると、ペリシテ人が尙ほ進んでシロを占領し、人民を殺し、其の町を焼いたと云ふことが分る。神の家は二度と其處に建てられなかつた。

△十二。昔は飛脚を走らせるのが何かの報知をする時の唯一の方法であつた。此の飛脚の風を見れば、悲みの記號であることが皆によく分つた。

△十三、十四。エリは其所の一番主要な人物として其の壇に座つて居つたのである。人民は使者が來たとて「さけび」出したけれども、使者はエリの所へ來るまでは云はずに待つて居るのであつた。

△十五。「其目かたまりて」——これはカタラクトのことを云つたのである、何となれば數年前には「目漸くくもりて」(三〇二)とあるから。

聖書の教訓

一、第一戰(一九)

(イ)イスラエル敗れる。神様はイスラエル人が悔改めて其の罪を離れるまでは助け給ふことの出來ぬ道理を彼等に

(ロ)契約の櫃を奪はる。此の最も恐るべき國民的災害によりて神様は將に其の民に——ペリシテ人にも——驚くべき教訓を教へんとしてお出でになつた。榮光は長く前からイスラエルを離れて居つた(二十二節)、併し人民は契約の櫃を失つて後に始めて其の事を發見した。

(ハ)悪兄弟殺さる。神様が此のエリの二人の息子を見棄て給つたやうに、人々が一定の所まで達すれば神様は止むを得ず彼等を見棄て給ふのである(ロマ書一〇廿八—卅二)エリは其の息子に對する義務に於て失敗した、それ故共に其の科を擔うた。

三、恐るべき報(十二—十八、廿一、廿二)

(イ)エリの恐怖。今日も或る人々は絶えず「神の櫃」の事を思煩ひ、神様の御事業に何事が起つて來るであらうかと

示す爲に、ペリシテ人が彼等を征服することを默許し給うた。私共は罪を離れるのでなければ、私共の生涯に勝利を豫期することが出來ぬ。

(ロ)其の理由を尋ぬ。神様が自分に逆つてお出でになると感ずる時には其の原因を見出して間違を正す(ヨシヤ記七〇六、七)と云ふ決心を以て、「何故か」と止まつて考へ度いものである。

(ハ)契約の櫃を持出す。當時は特別に訓練した軍隊がなかつたから、人民が戦争しなければならなかつた。彼等に取つては契約の櫃は「護身符」(おまもり)に過ぎなかつた、「すくひいだすことあらん」と云つた。併し神様の恵を抜きにしては契約の櫃もたゞ一個の金色の箱に過ぎない。私共が心の中に罪を有つて居る間は、外側の形式も行爲も私共を助けることが出來ない。

二、第二戰(十、十一)

(イ)イスラエル打敗れる。さう云ふ條件の下に勝利を與へることは神様の御性質に反したことで、人民の罪を獎勵することになる、そしてそれは神様には決して出來ぬことである。

心配し、悪い事が起りはすまいかと先を案じて居る。併し責任を有つて居る。人々が聖い人物であれば、何も恐れるには及ばぬ。

(ロ)エリの死。痛ましい終である——併し其の最大の悲みは契約の櫃の奪はれたことであつたとは、暗黒の中の一光明である。人の事業の滅亡と其の靈魂の滅亡との間に區別のあることを知らねばならぬ。エリの一生の事業は滅亡した——四十年間國を治めて居つたが、其の政治は國民の災害を以て終つた——併し其の靈魂は確かに神様の前に正しかつた。

(ハ)イカホテ。二人の悪青年の爲に耻と敗北とが全國に來り、老いたる父と罪なき妻とに死が來り、神様の御臨在の記號が其の國から失はれた。罪の支配を許す國と心とからは榮光は常に去る。

少年科 (六年生以下三年生迄)

神様は御憐憫を以て今までに二回までもエリに嚴かな警戒をお與へになつたけれども、其の息子等は一向に變化せず、悔改めない、それ故神様の刑罰が降らねばならぬことになつた。

高壇からサムエル前書四〇一九を朗讀。

イスラエル人は又も其の殘酷な敵のペリシテ人に攻められた。戦争の結果、ペリシテ人が勝ち、イスラエル人は負けて四千人を戦場で殺された。

イスラエル人等は陣營に相集り、上に立つ人々は驚いて互に尋ね合うた「何故神様は今日我々を負けさせなされたのであらうか。神様の契約の櫃を持つて行かう、あれが我々の間に來れば勝利は得られるだらう」と。

そこでエリの二人の息子が陣營の中に契約の櫃を昇ぎ込んだ、そして人民は大聲を揚げて之を迎へた。ペリシテ人は恐れて、今度は神様の櫃が來たからイスラエルは屹度勝つだらうと思つた。ペリシテ人等はイスラエルの神様が如何に力あるお方であるか——海や河の水を分け、エリコの石垣を倒すことの出來たこと——を知つて居つたのである。併しペリシテ人はそれにも拘らず丈夫の如くに勇み戦はうと互に友を勵まして居つた。

それ故今一度ペリシテ人は猛烈にイスラエル人を攻め戦うて、すつかり其の全軍を打敗つ

て仕舞つた。逃げることの出來たイスラエル人は自分の天幕へ逃げて來た。非常な斬殺が行はれ、三萬人の歩兵が殺された。

敗北よりも尙ほ悪かつたのは、聖き契約の櫃を奪はれたことで、ペリシテ人は誇りに之を自分の陣屋に運んで行つた。これはイスラエルに取つては空前の最大なる災害であつた。

一人の使者が悪い報知を携へてシロの市へ走つて來た。エリは、契約の櫃が戦争に持出されたことを心配して、震へながら市の門の所に座つて居た。彼は人々の騒ぐ聲を聞いた、戦の報が來たので人々は泣いたり叫んだりして居つたのである。彼は何事かと其の理由を尋ねた、今は年老いて、眼が殆ど見えなかつたからである。

使者は、イスラエルの軍勢が敵の前より逃げ走り、多勢の者が殺され、エリの二人の息子も其の仲間に居つたことをエリに告げた。エリは神様の櫃が奪はれたと聞くや、絶望の餘りに後ろに倒れ、下へ落ちた時に首が折れて死んだ。

丁度此の時に、エリの悪い息子の中の一人の妻なるエリの媳に神様は一人の赤坊を授け給

うた。彼女は善良な婦人で神様を愛して居った。其の悲しい報の爲に死んで仕舞つた。死ぬ時に、契約の櫃の奪はれたことを聞いて、其の悲しさの餘りに、生れた息子に「イカボテ」と云ふ名を付けた。「榮光は去つた」との意味である。

主なる教訓

罪を棄てずに居れば、遅いか早いか、何時かは必ず恐ろしい災害を持つて来る。

勸告

悪い事をし、神様に仕へることを拒む人が屢々云ふ「僕はこれが好きだ、随分愉快が出来る、後は後の事だ、お仕舞にはなんとか萬事甘くなつて行くさ」と。これは間違である。罪の道は暫くは、或は數年は、愉快に見えるかも知れぬ、併しお仕舞は恐ろしい事になるに定まつて居る——大抵は此の世に居る間に。併し來世に於ては確實にさうなる。エリの息子等は永年の後に其の悪しき生涯の報を刈取つた。若し貴君が悪を行つて居るならば、今直ちにそれを棄てよ。(悔改の座を開いてもよい。)

(例)ウキリ君は父の畑で仕事をして居たが、度々林檎を盗んだ。次にお金を一錢二錢位盗むと云ふ具合で、後には銀貨を盗み、父母に叱られても止めなかつた。或日一紳士から金五七圓程甘く盗める折があつて盗んだ。お金を近所の町で使つた。歸るのが心配になつた本式の盗人になつて仕舞つた。善くない女を妻にし、あはれな者になつた。七度程牢に入れられ、居る家もなくなつた。救世軍の人が見附けた時には品性も健康も台なしになつて居り、「私は去る十四週間寢床の中に寝たことありませんと云つた。」

第四十七課 契約の櫃と異教徒 (十一月二十日)

——(サムエル前書五〇一七、十一十二。六〇一十四、十六)——

諸誦聖句——「汝等しづまりて我の神たるをしれ、われはもろくの國のうちに崇められ、全地に於るにめらるべし」(詩篇四十六〇十)

青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

▲五〇四。「ダボン」とは魚と云ふ意味。ダボンの魚の部分丈けが残つて居つた。此の思むべき偶像の人間に似た部

分は皆、單に壞れた丈けではなく「断ち切れ」て居つた。▲六〇四。金像を造つて之を神々に献げる異教の習慣は廣く行はれて居つた。十七節にはペリシテの主なる五都市の名が擧げてある——アシドド、ガザ、アシケロン、ガテ、

エクロン。何れも之を治めて居る君主があつて、其の君主等はペリシテ王に優らずとも劣らざる程の権力があつたやうに見える。

△七。ペリシテの國はカナンよりは土地はずつと平らであつたから、車道を附けるのも容易であつたらう、従つて車の使用さるゝことがイスラエルよりも多かつた。此の「あたらしき車」を特別に拵へたと云ふことは此の度イスラエルの神に對し感じたる尊敬を示して居る。

△十二。「ペリシテ人の諸君主」が自分で契約の櫃の後に従つて來たと云ふ事實によつて、國民全體がイスラエルの神を恐れ敬うたに相違ないと云ふことが分る。

聖書の教訓

一、異教の宮に於ける契約の櫃(五〇一—五)

「ダゴン倒され壊さる。」多くの人は此の祭司等の如く、基督教を一つの力と考へて居る、唯一の力であるとは考へて居ない、單に世にありふれた色々の宗教の仲間の一つとして置かうとして居る。併し異教の祭司と同様に、それは不可能であることを發見するのである(ルカ傳十六〇—十二)。

二、異教の市に於ける契約の櫃(六、七、十一—十二)

「人民病と死とに襲はる。」「エホバの手」の「おもさ」の次第に増し加はるを見よ。最初にダゴンが苦み、次には祭司、其の次には或る市々の住民、今は全國となつた(六〇—五)。契約の櫃の行く先々に残した足跡は審判であつた。憐憫ではなかつた。ペリシテ人は斯くして眞の神が生と死との主なること、病氣も健康も其の御手の中にあることを次第に學んだ。これは私共も亦常に記憶すべき必要のある教訓である。

三、異教の祭司等の忠告(六〇一—六)

「契約の櫃を返し、神に榮光を歸せよ。」異教の祭司等が與へたとしては驚くべき忠告である。神様がエジプトに對してなし給うた事が周圍の凡ての國民の間によく知られて居つた。彼等はエホバに逆ふことは不結果に終ることを承認した。ペリシテ人は又自分の所有でないものを取つた爲に迷惑した、それと離れることを有難く思つた。盗んだり不正な事をしたりして得た品物は祝福でなく呪詛を齎す。

四、契約の櫃の不思議な旅行(七一—七十二)

「眞直ぐな道を通つてイスラエルに歸る。」ペリシテの全國民が擧つて注意を集めて見、果して神の御手が彼等の上に業をして居たのか、或は其は偶然の出來事であつたかを知らうとして熱中して居つた。此處に私共への教訓がある、私共は彼等よりも遙かに多くの光受けて居ながら、自分の身邊に起り來る凡ての事の中に神様の御手の働きを見ることが誠に鈍い。

五、契約の櫃は畑に止まる(十三、十四、十六)

少年科(六年生以下二年生迄)

ペリシテ人で勝誇つて契約の櫃を奪去つたことを思ひださせる。彼等はこれがあれば屹度勝利が得られると思つて居つた。今日は神様がそれを用ひて彼等に教へ給うた教訓を見るのである。高壇からサムニル前書五〇—一五を朗讀。
ペリシテの祭司等は神様の聖き櫃をばダゴンと云ふ半魚半人の恐ろしい石像のある宮に置

「イスラエル人の喜悅と禮拜。」イスラエル人は契約の櫃を恐れたりこはがたりしないので之を見て喜んだ。神様の御臨在の記號が再び自分等と偲にあることを知つたからである。契約の櫃がペリシテ人の眞中にある間に、ペリシテ人はイスラエルの神が偶像の撲滅者、病氣の支配者、獸類の主、イスラエルの變ることなき友であることを學んだ。斯の如くイスラエルの大敗北さへも異教の民を教へる光と變じた。その如く神様は惡の中よりも善を取出し、又人の助けなくして御自身の側を辯護することが出來になる。

「夜は星を現はし、悲痛は眞理を示す」(ペマレー)

いた。翌朝彼等が来て見ると、ダゴンは契約の櫃の前に俯伏になつて倒れて居つた。彼等は其の恐ろしい偶像を再び前の位置に上げて置いた。ところが翌朝もダゴンが再び倒れて居るのを見た。そして今度は頭や手が離れぬになり、胴體丈けが残つて居つた。それ故彼等は神様の櫃をダゴンの宮から出した。

今度は契約の櫃の置いてあるアシドドの市の人民が奇妙な恐ろしい病氣に襲はれて、多勢の人が死んだ。人々はこれは契約の櫃の爲であると知つたから、それを他の市へ送つて仕舞つた。他の市の人民も亦病氣に苦められ、其の苦痛に堪へ兼ねてベリシテの主君等に契約の櫃を國外に送出すことを願うた、彼等はイスラエルの神様の御手が自分等を罰して居るのだと感じたからである。

七箇月の間契約の櫃はベリシテ人の國に止まつた。遂に人々は心配で困り果てた末に、何うすれば宜しいかと祭司等に尋ねた。異教の祭司等は智く次の事を忠告した、(1)契約の櫃を持主の許に送返す事、(2)それと一緒に供物を送り、斯くして其の罰がイスラエルの神様

から来たものであることを認める事、(3)眞の神様は彼等の偶像よりも偉いお方であると告白する事。

祭司等は尙ほベリシテ人等に忠告して、一つの新しい車を拵へさせ、まだ一度も軛を着けたことのない二頭の若い牝牛にそれを繋ぎ、其の櫃は家に閉ぢ込めて置いて、牝牛が何うするかを見させることにした。若しイスラエルの神様が全能であるならば、牝牛を導いて、彼等が自分では行きさうにない方角に行かせなされる筈だと云ふのである。人々は其の通りを實行し、ベリシテの五人の主君等は牝牛の後に附従ひ、彼等が櫃の近くに居らうともしないで、右にも左にも曲らず眞直ぐに前へ進んで行くのを不思議がり乍ら見守つて居つた。

遂に車は、イスラエルの男等が麥を刈つて居る畑に着いた。牝牛は靜かに立止まつた。そしてイスラエル人等は契約の櫃が返されて來たのを見ると、大喜びで感謝の犠牲を神様に献じた。ベリシテの五人の主君等はイスラエルの喜ぶ有様を見た後に自分の國に歸つて行つた。

主なる教訓

神様は色々な方法を盡して、眞の神様を知らぬ人々を神様の御許に導かうとなさる。

勸告

神様は聖き契約の櫃と日常の出来事とによりてペリシテの偶像禮拜者等に眞の神様の事について大いなる眞理を教へ給うた——偶像よりも偉大なる事、生と死との主、凡ての動物の支配者、禮拜の眞の目的である事。今も神様の御計畫は異教の民に其の同じ教訓と、人を罪より救ふイエス様の驚くべき御力とを、神様の民——彼等の證言、生涯、才能、祈禱等——を用ひて教へる事である。貴君は神様を知らぬ人々を救ふ爲に神様に用ひて戴き度いと思ひませんか。成長の後に神様が貴君に救世軍士官になれとか、朝鮮に行けとか、支那に往けとか仰しやるならば、早速其の思召に従へるやう今から其の用意をなさい。即ち先づ自分がよく救はれる事、次には祈禱と行爲とを以て手近い人の救の爲に盡す事である。

(例) サイレルと云ふアメリカの男の子が銅貨を七つ貰つた。最初は皆お菓子を買つて仕舞はうと思つた。次には異教徒

を助ける爲に一つ丈け箱の中に入れて決心した。後で二つに變へた——次には三つ、四つ、五つ、六つと思ひ直して、お仕舞には七つ共皆其の箱に入れて仕舞つた。大きくなつた時に、神様は自分が異教徒を助けて行くことをお望みになつて居ると感じた。今では外國に行つて多くの人を救に導いて居る。

第四十八課 サムエル畢生の事業 (十一月二十七日)

(サムエル前書七〇一—一七七)

誦誦聖句——「穎悟者は空の光輝のごとくに輝かん、また衆多の人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠にいたらん」(ダニエル書十二〇三)

青年科 (十三歳以上)

△二。「したひて歎けり」は罪に對する悲みとエホバの許に集まることを含む。同じ思想はマタイ傳十五〇廿三にも見える。

△四。パアルとアシタロテとは男神と女神とで、夫婦であるとして居つた、そして恐しい賤しむべき儀式を行つて隨葬された。

△五。ミツハは高原地である。此國民大會の爲に此場所を選んだのは智い、何となればペリシテ人が彼等を見下すことも驚かすことも出来なかつたからである。

△六。此の水を注ぐことは謙遜を表すものと思はれて居つた。罪を悲しむ爲に頭を下げ、靈魂が神様の御前に水の如く地に俯伏す又は溶けると云ふ意味、詩篇廿二〇十四「わ

れ水の加くそゞぎいだされ」の如し。(レエミヤ哀歌二〇十九をも見よ)。

△七。大集會の尙ほ進行中に、ペリシテ人は急いでのはつて来た。だから大集會と戦争とは同日であつた。

△九。「これを全くエホバにささぐ」とは人民が心置きなく自らをエホバに献げたことを表はす。

△十二。「エホバに」(此處までエホバ我等を助け給へり)との意味)と云ふ言葉は大きな石の記念柱の面に書き附けられたものと考へられて居る。

聖書の教訓

一、イスラエルの悔改(一一八)

(イ)サムエル永年の骨折。サムエルは勝利を得る迄には人民の心を用意する爲に二十年の歲月を費すことを厭はなかつた。彼は時期の到来するまで獨りで忍耐ふかく沈黙の中に働き、然る後に其の機會を捕へた。着實な働がなしには何事も完成することが出来ぬ。

(ロ)終日に亘る集會。人民の心は先づサムエルによりて靜かに感化せられて居つた、その結果彼等は神様を慕ひ求めた。今彼は、彼等をして偶像を棄て、救助を求めしむる

やう公けに助を興へようとして彼等を悉く一緒に集めた。

(ハ)敵の驚き。ミツバに大集會の聞かれたことを聞くや否やペリシテ人が驚いて戦争の準備をしたことは、丁度今日惡魔が私共に對する態度其の儘である。彼の目的は私共を神様に近づかせぬやうにし、私共が、彼の束縛を脱しようと努めると直ちに私共を攻撃することにある。

二、イスラエルの救助(九一十二)

(イ)サムエルの供物と祈禱。サムエルは軍人でなかつた。其の民を導いて戦争に行かうとはしなかつた。併し人民は自分等の武器よりもムエサルの祈禱に信用を置いて居つた。如何に祈るべきかを知つて居る人々は困難の時の最大

(ロ)神の送りし雷。ペリシテ人等は多分此の雷の事を丁度運悪く来たものだと思つたであらうが、イスラエルの方ではこれは彼等の叫びに對する神様の答である。知つた。其の如く神様を愛する人々は毎日の出来事の中にも神様の御手を認めるのである。

(ハ)敵軍の逃走。人民が悔改め、斷食し、祈り、身を獻げた丈では充分でなかつた——彼等又戦はねばならな

つた。斯くて彼等が充分に其の分を果した時に、神様も己が分をなし給うた——イスラエルに勝利を賜ひ、敵軍は恐れて逃げた。

三、イスラエルの繁榮(十二一十七)

(イ)サムエルの記念石。サムエルは其の民に如何に祈るべきかを教へ、其の祈禱に満ちた祝福の言葉を以て彼等を戦争に送出したのであつた。今や彼は神様に榮光を歸し、彼等が神様の惠を忘れることも、勝利を自分等の手柄にすることも許さなかつた。

(ロ)敵は征服せらる。サムエルは岡中を彼方此方と巡廻

少年科 (六年生以下三年生迄)

契約の櫃がイスラエルに返されたことを思出させる。併し人民は尙ほ引續き偶像を拜し、其の殘酷なる主人なるペリシテの下に服して居つた。今日はサムエルが其の國民の救済者として起上るところを見るのである。高壇からサムエル前書七〇一—八を朗讀。

聖き契約の櫃は既に十二年間或る信仰篤き家庭に安置せられ、其の家の息子の一人が特に

選ばれてこれを守つて居つた。イスラエル人は尙ほ偶像に仕へて居つたが、神様の御爲に起上り、次から次へと巡廻して集會を催して人民を教へ、之に訴へ諭して居つたが、遂に彼等は餓渇ぐ如くに神様の恵を慕ふやうになつた。「汝等が神様の御助を受けてペリシテ人の手より救ひ出して戴くには、先づ汝らの方で邪惡な偶像を打棄て、神様に立歸らねばならぬ」とサムエルは云つた。

人民は彼の言葉に耳を傾け、偶像を振棄てた。サムエルは彼等一同をミツバに於て自分の許に召集め、そこで驚くべき終日の大集會を催した。彼は民の爲に祈り、民は悔改の記號として地面に水を注ぎ出して斷食した。それから彼等は罪を悔改めてサムエルの教の言葉を注意して聞いた。

ペリシテ人等は此の大集會の事を聞いて怒り、神様の民が彼等の手より逃れ出づることを好まぬ故、兵を集めて攻め上る用意をした。イスラエル人等は、敵が攻めて來ると聞いて恐れたが、自分等は戰ふから其の間自分等の爲に祈つて下さるやうにとサムエルに願つた。

サムエルは直ちに一頭の小羊を取り、燔祭として之れを神様に献げ、イスラエルの爲に神様に懇願した。彼が其の燔祭を献げて居る時に敵軍が近づいて來た。

神様はサムエルの祈禱に答へて、恐ろしい雷をお降しになつた。敵の馬が其の音に驚いたらしい、ペリシテの軍勢は混雜をなして亂れ、難なくイスラエル人に打敗られた。

イスラエル人は神様の御前に献身を新たにした其の場所から、坂下ろしにペリシテの上に突貫して之を追ひ散らし、遂に敵を見事に打敗つて仕舞つた。

人民が此の大勝利を決して忘れぬやうに、サムエルは記念の石を立て、それを「エベネゼル」と名づけた。「此處まで神様は我々を助け給うた」との意味である。

サムエルの治めて居る間、ペリシテ人は敢てイスラエル人に抵抗しようとはしなかつた。尙ほ彼等は其の奪取つて居た凡ての市々をイスラエルに返さねばならぬことになつた。

此の大きいなる救助の與へられた後、サムエルは年々、市から市へと巡廻して人民の間に裁判を行つたり、教を宣べたりした。それから旅行が終るとラマにある自分の家に歸つた。

彼は此のラマに神様の爲に祭壇を建てた。

主なる教訓

神様を喜ばせ、人を助けることを一生の目的とする人は世界の祝福となる。

勸告

私共銘々は、自分の生涯がサムエルの如くに世界の祝福となることを望んで居る。これは運や境遇によるのでなく、私共の心に秘かに抱いて居る目的——これに成らう、これを爲さうと決心するもの——の如何によるのである。サムエルや、前大將や、其の他多くの人々は年の若い時に自分は神様の榮光を顯し、他の人々を助ける爲に一生を費さうと決心した。彼等は寂しい時にも失望の時にも其の決心を固く握つて居つた。其の結果神様は彼等を驚くべき祝福の器となし給うた。貴君は彼等の模範に従ふであらうか。

(例)前大將は或時旅行先で其の宿を去る前に次の如き自署をせられた。「六十五年前に十五歳の若者であつた時、余は天國の旅を始めた、そして今だにそれに飽きない、實際今ほどそれを樂しんで居つたことはないのである。其の理由を君に語らうか。余は語らんと思ふ。それは余が余の神の名譽と國胞の福祉とを余が生涯の目的として居るからである」と。

大將が到る處にて如何に之を實行せられたかの一例としては、或時大將がスウキツツルでエレベーターに乗つて上つて居る際、非常な一日の疲の後であつたけれども、運轉手なる一少年に其の靈魂の事に就いて親切にお話になつた。幾年かの後に其の同じ少年が、其の時に大人となつて居つたが、自分は大將のお言葉によつて救を受けたのであるとエツプマでローレー中將に話した。

第四十九課 サムエルの後繼者の選定 (十二月四日)

——(サムエル前書八〇四—十、十九—廿二、九〇—一十、十五—廿四)——

誦讀聖句——「人のあゆみはエホバによりて定めらる、そのゆく途をエホバよろこびたまへり」(詩篇卅七〇廿三)

▲青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

▲九〇三。驢馬には印を捺してあるから、迷つて行つた時には容易く見分けることが出来た。此の地は當時人口が稠密でなかつた、それ故驢馬が見付け難い野山の中に迷ひ

込んで行つたであらう。

△七。東洋に於ては偉大な人物に贈物をする風が今日に至るまで行はれて居る(創世記四十三〇十一)。

△八。シケルは銀貨で、十文字が其の上に捺してあり、四つに割つて四分の一を使ふことが出来た。當時は銀貨が

貴かつた、それ故これは大した贈物であつた。

△十一—十四。此の數節は時間の都合で、學課から省略してあるけれども、サムエルの導いた公けの集會と食事との事が示してあり、公けの場合に於ける「食前の感謝」の事に就いて述べてある最も古き記事の一つがあるので(十三)、非常に興味がある。

△十五。「耳をつけて」の原語は「耳をあらはして(耳の覆を除ける)である。囁く爲に重い頭巾を取り除けると云ふ東洋の習慣に符合した云ひ方である(マタイ傳十〇廿七)。

△廿二。一番位の上な人々丈けサムエルと一緒に食事をなし、その他の人は皆外で食べるのであつた。これは楽しい、自由な、云はば天幕集會であつたのである。

聖書の教訓

一、サムエルの失望(八〇—四一十、十九—廿二)

(イ)人民の要求。サムエルは全く無私であつた。己が地位でなく、神様の名譽が彼の心配であつた。併し彼が人民に彼等の撰びが如何なる結果を生み出すかを示し、嚴かに其の事に反對したのは正しいことである。今日も私共に先

を見ることを教へ、私共の行爲の結果が如何になるかを示して下さる人々は私共を助けて居るのである。

(ロ)神の決定。サムエルは自分が一生の間愛して仕へて居つた國民を年若き、訓練もなき見ず知らずの一青年に引渡すと云ふ事に面した時、心に困難を感じたに相違ない。實にこれは彼の人物の偉大と、信仰と服従との驚くべき證據である。

二、サウルの探求(九〇—一十)

(イ)失ひし驢馬。サウルが若し余りに尊大で父のお使に行かぬとか、中途で歸つたりしたならば大きな損をするのであつた。進歩の道は正直な謙遜な働きの道に沿うて居る、そして神様は私共に對して有ち給ふ御目的を成就する爲には日常の最も些細な事を用ひ給ふ。

(ロ)僕の忠告。サウルの僕の方が彼よりもよく知つて居つた。主人を教へた僕は此の人丈けではない(列王紀略下五〇三—一十三)。サウルも僕も共に考へぶかつた、神の人への義務を忘れなかつた。これは今日の世に余りに屢々忘却せられて居る。時間や努力を費させ、お世話を願つて置き乍ら、時にはお禮を申すことも有難いと思ふことさへも

しない人がある、況んや神様の僕と其の御事業とを支へる爲に必要な金錢を贈ることに於てをやである。

三、サムエルへの神の豫告(十五—十七)

(イ)サウルの來ることを告げらる。神様が貴君の耳に語る如くに貴君に其の思召を語り得るやうに、貴君は注意して神様の御聲を聞いて居なさるか。或は貴君を止める爲に雷や地震を送る必要があるか(イザヤ書三〇廿一)。

(ロ)「汝に告げしは此の人なり」。神はサムエルを疑惑の中に棄て置き給はず、事を完全に明瞭に示し給うた。これは神様が當に其の子供等になし給ふ事である、時には一度に皆分つて仕舞はないで、聴き従ふに連れて一歩一歩道を示し給ふこともある。

四、サムエルのサウル歓迎(十八—廿四)

(イ)待ち設けたる客。多くの人々が自分の意志に従つて個々獨立に行つた自由の行爲が皆協力して神様の攝理を實行したことに注意せよ。時々其の手段が私共には奇妙に見えることがあつても、凡て神様の爲し給ふ事は其の終結に於て悉く働いて益となる(ロマ書八〇廿八)。

(ロ)客の受けたる歡待。サムエルは自分の代りになる人の事を妬んだり怒つたりしないで愛を以て之を迎へた。食を與へ、宿らせ、祝福の言葉を與へ、彼を助くる爲に出來る限り盡した。サムエルは自分の勝手よりも神様の御旨を愛した。

今日の主なる教訓に就いて適當に勸告をする。

少年科(六年生以下三年生迄)

サムエルは今では老人となり、殆ど其の一生の間イスラエルを治めたのであつた。今日は彼が自分は後に退き、他の人を助けて自分に代らせるところを見るのである。高壇からサムエ

イスラエルの主なる人々が或日サムエルの許に來り、彼は既に年が寄るし、彼の息子等は彼の如くに廉潔でないと云つた。それ故彼等は他の國々のやうに王様を戴き度いと思つた。サムエルは大いに心を苦めた、併し神様に祈つた。神様は彼を慰めて、人民はサムエルを棄てた譯ではなく神様御自身を拒んで居るのであると仰しやつた。神様は又サムエルに、若し他の國々の如くに——貪慾な王が政治を執るやうになれば、何う云ふ苦しい目にあはねばならぬかを告げて彼等に警戒を與へよと仰せになつた。然るに彼等は尙ほも云張つて、自分等の裁判を行ひ、又自分等を率ゐて戦争に出て行く王様を要求した。

サムエルは再び神様に祈り、人民の撰ぶところをお告げ申した。神様は答へて「彼等の言葉を聞き、彼等のために王を立てよ」と宣うた。そこでサムエルは、彼等の願のものを與へると告げて、彼等を家に歸らせた。

キシと云ふ人にサウルと云ふ息子があつた。彼は立派な丈夫な青年で、誰と背較べしても

頭と肩と丈け高いと云ふ素晴らしい體格であつた。キシは驢馬が見えなくなつたので、息子のサウルに一人の僕を供にしてそれを探かしに行かせた。彼等は樹木の生ひ茂つた荒れた野山を歩いて探がし廻つたが其の甲斐がなかつた。

終にサウルは、餘り長くなるから父が心配するかも知れぬ故家に歸らうと云出した。僕は忠告して、其の近所に住んで居る神の人にお尋ねしては如何、彼は立派な又智慧のあるお方であると言つた。サウルはそれに答へて、其のお方に贈物として差上げる物は何も有つて居ないと云つた。すると僕は幾らかの銀貨を持つて居ると取出した、そこで二人の青年は共にサムエルの住んで居る市の方へ、御相談を願はうとして行つた。

却説神様は、既にサムエルには、ベツレヘムから一人の青年が来るから、之に膏を注ぎと告げてお出でになつたのである。彼は神様の選び給うた人物で、神様の民を其の敵ベリシテ人より救出するのであつた。

其の次の日、見たこともない二人の青年が近づいて來た。サムエルは其の背の高い方を眺

めて居る時、神様は「視よ、わが汝に告げしは此の人なり。此の人はわが民を治むべし」と宣うた。

其の時サウルは尋ねて「一寸お教へ下さいませんか、豫言者のお住居は何方で御座りませうか」と云つた。サムエルは答へた「私が君等の探してお出でになる人です。今日は丁度これから御馳走があるのです。君等も御一緒に食事を致しませう。今晚は私の宅にお宿りなさい、そして明日お家へお歸りなさい。驢馬の事は、見附かりましたから、御心配なく。君こそはイスラエルの民が助けて戴かうと探し求めて居る人物です」と。

サウルは驚いて「私は一番小さいベニヤミンの支派のもので、私の一族はまた其の中でも一番詰らないもので御座ります。屹度何かのお間違で御座りませう」と云つた。けれどもサムエルはサウルを中の方に案内して、一番上の席に坐らせ、彼の爲に特別に取つて除けて置いた御馳走を與へた。次の週にはサウルを驚かせようとして待つて居た驚くべき出来事を習ふのである。

主なる教訓

日常の務に最善を盡せ、然らば神様は後には更に大いなる機會を與へ給ふのであらう。

勸告

サウルは父の驢馬を探がすことを忠實にやつたから、それが導きで王様になつた。その如く貴君の小さな務——お使に行くこと、学校の勉強、お母さんのお手傳(子供等に尙ほ云はせる)——もよくやれば、それが更に大きな機會を得る導きともなり、其の時の用意にもなる。決して自分の義務を避けて「面倒くさい、こんな事なんかして居られない」と云つてはならぬ。神様が見てお出でになつて、忠實に働く者を尊び給ふことを憶えつゝ、出来る限り立派におやりなさい。

(例)アツカー・ワシントンと云ふ教授は黒人で、アメリカにある黒人の大學校をお建てになつた方で、其の學校の頭であるが、以前は奴隷であつた。若い時に勉強し度いと思ひ、大學へ學生として入學させて下さるやう願つた(此の人よりも前に幾人も入學を許可せられた。到々彼の番が來た。教頭が「諸誦室は掃除する必要がある。箒を持つて掃除せよ」と云つた。彼は其の室を四度程はたいて掃き、家具をすつかり動かして、腰掛も机も、室の隅々も、みんな奇麗にした。教頭が検査したが、ハンケチに塵一つ付かなかつた。そこで「君は大丈夫だらうと思ふ」と云はれた。これが此の人の出世

第五十課 第四復習日 (十二月十一日)

サムエル、サウルに膏注ぐ (サムエル前書九〇廿五―廿七。十)

諸誦聖句——「我新しき心を汝等に賜ひ新しき靈魂を汝らの衷に賦け、吾靈を汝らの衷に置き、吾律を守りて之を行はしむべし」(エゼギエル書卅六〇廿六、廿七)

注意——第十四課の初めにある注意書は今日の復習日にも當符まる。

▲質

問

(各質問の終の括弧内の数字は其の答の材料を見出すべき學課の番號である)

- 一、サムソンに對する神様の二つの目的は何々でしたか(卅九)
- 二、此の目的は初め誰に告げられましたか。何時、告げられましたか(卅九)
- 三、サムソンは自分の殺したライオンから何を得ましたか(四十)
- 四、彼は自分の國の人に縛られた時に何うしましたか(四十)

- 五、彼は何を以て一千人のペリシテ人を殺しましたか(四十)
- 六、サムソンは如何にして力を失ひましたか(四十一)
- 七、サムソンは誓を破つた時に何うなりましたか(四十一)
- 八、サムソンは如何にして死にましたか(四十一)
- 九、サムソンの生涯から私共は何う云ふ教訓を習ひますか(四十二)
- 十、ナオミはモアブの國で何う云ふ悲しい事に遇ひましたか(四十二)
- 十一、ルツは何う云ふ大決心をしましたか(四十二)
- 十二、ルツはベツレヘムで自分とナオミとの生計を助ける爲に何うしましたか(四十三)
- 十三、彼女は畑でボアズから何う云ふ扱を受けましたか(四十三)
- 十四、ルツの無私と忠實とに對して神様は何う云ふ報賞を下さいましたか(四十三)
- 十五、(イ)子供が欲しいと祈つた婦人と(ロ)それを叱つた祭司と、の名は何と云ひましたか(四十四)

(四十四)

十六、ハンナは祈禱が答へられた時に如何にして其の感謝を表しましたか(四十四)

十七、サムエルは或夜自分を呼ぶ聲を聞いた時に何う云ふ間違をしましたか(四十五)

十八、四番目に呼ばれた時には如何に答へましたか。神様は彼に何をお話しになりましたか(四十五)

十九、第一戦にペリシテ人に敗られた後で、イスラエル人は如何にして勝利を得ようとしたか(四十六)

二十、第三戦の結果何う云ふ事になつたか話して下さい(四十六)

廿一、ペリシテ人は(イ)神様が彼等の偶像よりも偉いこと、(ロ)生も死も神様の御手の中にあることを、如何にして教へられましたか(四十七)

廿二、サムエルがイスラエル人を導いて神様に立歸らせた終日大集會の最中に何う云ふことが起りましたか(四十八)

廿三、サウルの事で私共の習つた第一の出来事は何でしたか(四十九)

廿四、サウルがサムエルの所へ、見えなくなつた驢馬の事を尋ねに行つた時に、聞かされた新しい驚くべき事は何でしたか(四十九)

▲青年科及び少年科

サムエルが心からサウルを歓迎して、共に食事をせよとか、自分の家に來て宿れなど云つて彼を招待したことを思出させる。

御馳走の後でサムエルは、町にある自分の家にサウルを連れて歸り、家の平らな屋根の上で長い間彼と静かに語り合つた。それからサウルは、外套にくるまつて横になつて眠つた。

翌朝早く曙にサムエルは屋根の上に居る彼に「起きた! そして歸りませう」と呼んで彼を起こした。サウルは起きた、そして彼等はサウルの僕と共に往來へ出た。

町外れまで來ると、サムエルは話す事があるから僕を先へ行かして自分は暫く止まるやうにとサウルに告げた。そこでサムエルは小さな膏の瓶を取上げ、サウルが自分の前に跪く

と其の頭の上に膏を注いだ、そして彼に聖き接吻をした後に斯う云つた「神様は汝を任じて神様の産業即ちイスラエルの長となし給ふ」と。

此の言葉が神様より来たものであることをサウルに確實に知らしめる爲に、サムエルは彼の歸りの途中で彼の身の上にかかるべき幾つかの事を告げた。神様の靈がサウルの上に降つて、彼は別の人間のやうになる——其の心が變化して神様の事を語り得るやうになる——と云つてサムエルは其の言葉を終へた。

二人は別れた、そしてサウルが獨り道を進んで——多分心の中で祈つたり、サムエルの言葉を考へたりし乍ら——行つて居ると、サムエルの云つた如くに神様は彼に新しい心を下さつた、間もなく彼は小高い岡のところへ來ると、そこで一組の神の僕等に會つた。彼は生れて始めて彼等の仲間に加はり、神様を讃めた、へ其の恵を告げた。これは實に驚くべき變化であつた、以前ならばサウルは自分はこの人々とは何の關係もないと思つたであらう。

註——聖書の讀む部分にはなつて居ないが、青年科では十一、十二節に注意せられよ。これは其の儘今日も行はれて居

る。人々が本當に救はれた人を見、其の心からの證言を聞く時に「彼今何事にあふや」と驚嘆する。彼等は、厭でも、神様の力を認めるやうになる。

遂にサウルは家に着いた、此處では親類の人々が彼の變化して居ることを見た。叔父は彼に、何をして居つたのか、又サムエルは何と云つたかと尋ねた。

サムエルの云つた事膏が注がれた事等を高慢らしく自慢することをしないで、サウルは言葉を控目にした、但し決して禮儀を失するやうな事はなかつた。サムエルが驢馬の事を説明して呉れた話はしたが、自分が王様として膏注がれたことは少しも云はなかつた。此の事は自分の語る権利のない事柄であると思つた。彼を選び給うた神様が然るべき時にそれを發表なさるのであつた。

主なる教訓

神様が私共に新しい心を與へ給ふ時に私共の全生活が變化する。

勸告

サウルは、神様が其の心を變化させて下さつた時には、喜んで神様の民の仲間に入つた。爲すべき證言もあり、又語る権利のない事に就いて沈黙を守り、心得て居り、遇ふ人は皆彼が變つた人になつて居ることを認めた。貴君でもその通りになるのである。若し今日聖靈の神様に救つて戴くならば、貴君の周圍に居る人々は貴君の變つたことに氣が附くに定まつて居る。若し何の異つた事もなければ、それは彼の驚くべき救の變化をまだ受けて居ないとの確かな證據である。今日それをしてお戴きない(悔改の座)。

(例)「何と近頃ジャック、スマスは變つたぢやないか」と一友人が云つた。「言葉使が異ふ、行爲が異ふ、顔附が異ふ、善くなつたこと素晴らしいものだ」と。「さうだとも」と一人が答へ「ジャックは數週間前に神様に心を献げたのだ、これは其の結果だ。我々の重荷と心配になつて居つたが、今では我々の喜悅慰藉である」と。

第五十一課 小さきベツレヘム (十二月十八日)

——(ルカ傳二〇四—十六。マタイ傳二〇一—十六)——

諸誦聖句——「ひとりの嬰兒われらのために生れたり、我儕はひとりの子をあたへられた

り、政事はその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神、とこしへのちよ、平和の君となへられん」(イザヤ書九〇六)

組長への注意——聖書の場所は示してあるけれども、皆のよく知つて居る所であるから、讀み度いと思ふ組長以外は組で讀むには及ばぬ。クリマスの方面のみを考へないで、此の學課によりてベツレヘムに於ける大いなる出來事の大體を知らせるやうにして下さい。子供等の住む町或は國にある古代の建物又は古い歴史の事を緒として話を始めて下さい。

▲青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

▲ルカ傳二〇七。此の宿屋は元來はホアズとルツとの家で、年を経て後にダビデは其の中で生れたものと考へられて居る。又ダビデは此の財産をキムハムに與へ(サムエル後書十九〇卅七—四十)、そしてそれがベテレヘムに於ける旅人の宿屋とはなつたのだと思はれて居る(エレミヤ記四十一〇十七)。若しそれが事實とすれば、キリストは其の此の世の先祖等の古き住家に生れたわけである、但し其の家の中の人の住む方ではなくて離れ屋の中の事であつたが。

▲マタイ傳二〇二。當時知れ居りたる世界全體を通じて人々は、地上に平和を齎すべき長い間の約束の王の來ることとを豫期して居つた。神様は其の王の來りつゝあることを此の博士等に、彼等の最もよく理解し居りたる科學——星學——によりて、示し給ふた。
△十一—十二。多分此の博士等の献けた寶物のお蔭で、セフは此の費用の掛かる旅行をすることが出來たのであらう、彼自身は一個の貧しき労働者に過ぎなかつた。斯くして此の他國人等が救主がヘロデの劍を逃れる道を備へたのであつた。
△十六。如何に此の世の王や役人等が兵隊を送つて救主

の生命を亡ぼさうとし、又救主の死後には其の復活を妨げようとしたかを見よ（マタイ傳廿七〇六十六。廿八〇四）。併し何れの場合にも其の努力は空しくかつた。

聖書の教訓

一、寄留者ベツレヘムに宿る（ルカ傳二〇四一七）

主は、他國人又は通行人としてでなく、貴下の心と生活との正當の權利ある所有者として、貴君に來らんことを願つて居給ふ（エレミヤ記十四〇八）。

二、牧者等ベツレヘムに導かる（八一十六）

これは過越祝の羔をその中から選んだ神殿の犠牲に用ひる羊の群を番して居つた牧者等であると思はれて居る。其の群は年中エルサレムとベツレヘムとの間にある小山に出で居つたと云ふ。此の牧者等は誰よりも一番先に本當の神の羔の事を聞いた。過越の羔は其の型に過ぎなかつた。神様の示し給つた事を自分で實際に見ようとの彼等の熱心なる望みと願望とは神様の喜んで尊び又祝福し給ふ精神である。

三、他國人等ベツレヘムに導かる（マタイ傳二〇

一一二）

ヘロデは、人が眞理を尋ね又得て之を他人に取次いで置きながら、自分の心が一向に感動せず、利己と虚偽とを是事として居ることも在り得ると云ふ實例の一つである。他國人等の單純さと喜悅と服従の眞中に於てヘロデは忿怒と恐怖との餌食となつた。私共の教の受け方如何によつて靈泥の差が生ずる。

四、兵卒等悲痛をベツレヘムに齎す（十三一十

六）

これは今日も行はれて居る悪魔の精神の一例である、彼は若し出來るならばイエス様とイエス様を愛する凡ての人とな地の面より撲滅しようと思つて居るのである。此の嬰兒は爾來イエス様の御爲に死になる殉教の大行列の先頭である。それにも拘らず神様の王國は尙ほ擴張して居る。救主が保護せられのは御自身の安逸と安樂との爲ではなかつた、却つて其生涯の終る前に地上に於て多くの爲すべき事苦しむべき事がおありになつたからである。

少年科（六年生以下三年生迄）

神様の民なるイスラエル人の歴史の初めに立歸る。ヤコブの忠實な又愛せられたる妻ラケルはエフラタへ行く途中で死んで葬られた。そしてヤコブは其の墓に柱を立てた。其の直ぐ側へ、後にベツレヘムと云ふ小さな町が出来た。町の周圍には小さな山、白い家、オレブの林、麥畑等のある其の景色を想像して御覽なさい。ベツレヘムの人々は神様の選び給うた王様が其處に生れるとの驚くべき約束を貴び楽しんで居つた（ミカ書五〇二）。此の約束があつてから既に幾百年となつたが、未だに成就して居なかつた。

（例）假りに、世界の端までも祝福を與へる一人の男の子が「貴君」の町に生れると聖き豫言者が豫言したと想像して御覽なさい。親等は皆「それは私の家に生れるのか知らん」と思ひ、學校の子供等は「僕がそれになるのか知らん」と思ふであらう。

マリヤとヨセフとはベツレヘムに本籍があつたので、戸籍調査の爲に其處へ來なければならぬてとなつたが、ベツレヘムには家を有つて居なかつた。方々の宿屋にはお客が一杯で

宿る室がなかつた、それでマリヤの生んだこの赤坊は布に包まれて馬槽の中に寝かされた。王の王なるお方は其生れた時に馬槽の外には碌な寝床もなかつたのである。

ベツレヘムの外にある小山の上で牧者等が羊の番をして居つた、多分彼の古い約束の事を思ひ、何時それが實現されるのか知らんなど考へて居つたことであらう。突然一人の天使の聲が聞え、到々ミカの言葉が成就した——平和の君がお生れになつたと告げ、尙ほ彼等が其の生れたお方がこれだとよく分るやうに精しく彼等に教へて呉れた。また彼等の耳には天使の唱歌隊が「いと高き處には榮光、神にあれ、地には平和、主の悦び給ふ人にあれ」と歌ふ聲が聞えた。彼は早速ベツレヘムへ行つた、そして見ると一々の事が彼の天使の云つた通りであつた。

ヨセフとマリヤと其の小さい息子とは今は自分等の小さな家に移轉して、靜かにベツレヘムで暮して居つた。其の時そこへ遠くの國から外國人が駱駝に乗つて到着した。彼等は不思議な星を見たので、エルサレムへ來て何處に其の新しい王様が生れるだらうかと尋ねたので

あつた。ヘロデは古い聖書の事をよく知つて居る人々に尋ねた、そして彼等は丁度今私共の讀んだ聖書の場所に書いてある事を話したのであつた。ヘロデはそこで「ベツレヘムへお出でなさい。そこへ行けば其の新しい王様に會へます」と云つた。彼の小さい家の上に其の星が輝いて居つた。そして博士等は寶物を献げ、喜びつゝ國に歸つた。

註——ベツレヘムは再び靜かになり、何事もなくなつた。外國人は本國に歸り、牧者等も其の羊の群に歸り、彼の寄留者等(十三—十五)はベツレヘムの小さな家を後にして、マリヤの小さい息子を連れてエジプトに下つたのであつた。
今一度ヘロデ王はエルサレムからベツレヘムへ一隊を遣した、此の度は其の新しい王を探す爲でなく殺す爲であつた。此の事を確實に成遂げようとて、兵卒等に命令して二歳以下の男の子を残らず探出して殺すことにした。ヘロデは、彼の博士等は其の約束せられた王様が何の家に居るかを歸つて來て自分に告げなかつたけれども、此の方法でやれば其の赤坊は屹度死ぬであらうと思つた。小さいベツレヘムの町中の泣き悲む有様を想像して御覽なさい！これも昔の豫言者が彼等の先祖のラケルが其の子供等を失つて泣くと云ふことに譬へて豫言して置いたことである(エレミヤ記三〇十五)。

主なる教訓

昔赤坊としてベツレヘムに來り給うたイエス様は、今日は教主として貴君の心の中に来ることを望み給ふ。

勸告

ベツレヘムではイエス様は其の母に歓迎せられ、牧者等と博士等とに拜せられ、ヘロデに憎まれ給うた、併し彼は凡ての人の救主として來り給うたのである。ヘロデの如くイエス様に逆うてはならぬ、それは自分に悲痛を持つて來る丈けの事である。牧者等や博士等の如くに、イエス様を禮拜したり、祝の軍歌を歌つたりするばかりでなく、此のクリスマスの時にイエス様を自分の心の中にお迎へ申しなさい。さうすれば、イエス様はお入りになつて、凡ての善くない物を出して仕舞ひ、貴君の心の中には平和を下さり、周囲の人々には恵を與へ給ふやうになる。

組長への注意——クリスマスはただお祭騒ぎとならぬやうに、精神に於ても實行に於ても、よく注意して子供等を教へ

導いて下さい。

第五十二課 幼き基督の宣傳者 (十二月廿五日)

——(ルカ傳二〇廿五—廿八)——

諸誦聖句——「主よ、今こそ御言に循ひて僕を安らかに逝かしめ給ふなれ。わが目は、はや主の救を見たり」(ルカ傳二〇廿九、卅)

組長への注意——其の生涯を神様の御用に費したる老人の如何に美しく且つ威嚴ある者なるかを此の學課によりて示すやうに努められよ。さう云ふ人物に神様は其の秘密と御目的とを知らしめ給ふ。

青年科 (十三歳以上)

聖書の註解

△廿六。これは最も高貴なる種類の默示で、「御靈によりて歩む」者のみ神様が與へ給ふことの出来るものである。
△廿七。「神殿」又は「宮」は單一なる一つの建物でなくて、周圍には澤山の庭や建物や住宅や、小室などがあつた。女

預言者のアンナ(廿六、廿七)は宮の中に住み、其の凡ての時間を神様の御用に献げて居つた。

△廿二。「異邦人を照さん光」は直ちに輝き始めたけれども、シメオンの言葉ありて以來千九百年を経たが、イスラエルの民は今尚ほイエス様を彼等の榮として受入れて居ない。其の幸福なる日の曙光が今尚ほ照出でない。

聖書の教訓

一、老人シメオン(廿五―卅五)

(イ)彼の希望に満ちた忍耐。神様はシメオンを丁度善い時刻に神殿に遣し給うた。私共は時間を正確に守らぬ爲に多くの祝福を得損ふ。たゞ正しき事を爲すのみならず、正しき時刻に之を行へ、十分遅れてはならない。
(ロ)彼の讚美の歌。シメオンの驚くべき信仰は此の赤子の中に地の極までも照す光を認めた。此の力―肉眼に見えぬ事を見る力―は神様より来る、そしてそれが凡ての時代に於て神の民の特徴であつた(ヘブル書十一〇七)。
(ハ)彼の智慧ある豫告。シメオンは誠に眞實であつたから、マリヤと其の息子との双方の前途に來らんとする苦痛と悲痛とを豫知し乍ら、それをマリヤに告げずに居ることが出来なかつた。神様が大きいなる喜悅を與へ給ふ時に、それと共に何かの重荷又は責任を(或はそれに苦痛をさへ添へて)與へ給はないことは稀である。天國へ行くのに安樂な道と云ふのは決してない。

二、老人アンナ(卅六―卅八)

(イ)彼女の無休の奉仕。アンナは神様への自分の働が終つたと思つたところで差支なかつたであらう、新しい黙示と新しい喜悅の源と傳ふべき新しい音信とが自分に與へらるゝとは知らなかつた。彼女の如くに神様に仕へる人の精神は老衰しない。
(ロ)彼女の早速なる感謝。アンナもシメオンも決して心の狭い利己的な人でなかつた。彼等は其の赤子の成長を見るまで生きて居らぬことを承知して居つた、それでも自分等の去つた後に來る祝福を思つて喜んだ。私共も彼の如くに假令自分はそれに與かることが出来ずとも、他の人々の祝福となる事を喜ぶことを學び度い。
(ハ)彼女の驚くべき宣傳。エルサレムに居る多くの人は「贖を望」んで居つた。斯う云ふ人々に老いたるアンナはイエス様の事を語つた、彼女は爾來救主の降世と其の贖罪の力とを語るべき老若の婦人等より成る大行列の先頭であつた。

少年科(六年生以下三年生迄)

今日は牧者等や博士等の如くに救主の御誕生を喜んだ二人の大變年を取つた老人の事を習ふのである。此の二人には神様は、天使や星をお用ひにならないで、直接に黙示をお與へにすることが出来た。高壇からルカ傳二〇廿五―卅三を朗讀。

救主が生れてから六週間ほど経つた時に、御母とヨセフとは彼を神様に献げる爲に神殿へ連れて來た。エルサレムにシメオンと云ふ一老人が住んで居つた。此の人は其の心の中に、自分は死ぬ前に救主を見ると云ふお知らせを神様から戴いて居つた。シメオンは此の立派な黙示を戴いて、黙つて忍耐ぶかく其の時の來るのを待つて居つた。丁度ヨセフとマリヤとがモーセの命令に従つてイエス様の献兒式を行ひ、二羽の若い鴿を供へようとて入つて來た其の時に、神様の聖靈は彼を神殿に導き給うた。

「これが救主である」と聖靈は彼の心に囁き給うた。それで此の老人は前へ進んで其の赤子を腕に抱き、立派な感謝の言葉を神様に申上げた。今や神様の御約束が成就せられ、凡ての異教の世界を照す光となり、他日又イスラエルの民の榮光となるべき神様の救を眼に見たの

であるから、彼はこれで安んじて死ぬことが出来ると思つた。

ヨセフとマリヤとはシメオンの言葉を聞いて驚いて居つた。彼等に子供を返して祝福の言葉を與へた後に、彼はマリヤに語つた。イエス様が入りから悪く云はれ、マリヤは今喜んで嬉しがつて居るが後には苦痛の劍が彼女の心を刺通す日が來ると云ふことを豫告したのであつた。

組長への注意——來週は教主の地上に於ける最後の悲しい數日の事を習ひ始め、シメオンの豫告の實現を見るのであるから右の點をよく話して置いて下さい。
神殿の建物の中に、何時も其處を離れずに居るアンナと云ふ女豫言者が住んで居つた。八十四歳の老人で、夜も晝も神様に仕へて居つた。神様は彼女にも神様の御子を見、また知る喜びを與へ給うた。

誰も彼女を呼びに行つた譯ではないが、聖靈の御導きにより、アンナも丁度其の時に其の小さな群に加はつた、そして其の赤子を見るや否やそれが救主であると知り、此の小さなお方が後には何になるかと云ふことを思つて神様に感謝を献げた。

シメオンとは異つて、アンナはマリヤには話をしなかつたが、約束の救主を待望んで居る皆の人には、彼等の求めて居るメツシヤは既に此の世に生れたのであると語り告げた。斯くして老いたるアンナは救の福音を宣傳へた最初の婦人となつた。

主なる教訓

神様に仕へながら年を取つた老人から、私共はイエス様の事や神様の私共に對する御旨を多く習ふことが出来る。

勸告

若い人は時々老人を見下して「古臭い」などと云ひたくなる事がある。此の學課はさう云ふ態度に對する一つの譴責である。イエス様を一番先に拜した人々の仲間に老いたる男女があり、彼等を見て直ぐにこれは長い前から約束の救主であると知つた。長い歳年月の間神様に仕へた人々を輕蔑しさうな誘惑にあつた時には此の事を記憶して、さう云ふ人々の經驗から出来る限り多くの事を習ひなさい。

(例)小隊の老兵士の事を話し、彼等の永い間の奉仕、其の救世軍的精神の立派なところなどを述べる。尙ほ子供等に知つて居る人の名を云はせる。

親孝行デー學課、其一 (午前の分)

親の恩 (ルカ傳十五〇十一廿六)

注意——親孝行デーの學課は午前午後に分けてある。當日の朝の問答と午後の組會學課とは一つ前の日曜日か後の日曜日に二回分一度に教へるやうにして下さい。

▲青年科及び少年科

今日は親孝行デーである。今朝は親の恩に就いて習ふのである。高壇からルカ傳十五〇十一廿六を朗讀。

親不孝な放蕩息子、我が儘勝手をして困り果てた後に、始めて親の恩の有難さを感じて家に歸り、親にお詫びをして今一度親の心を樂しませることが出来たのである。私共も親の御恩をよく／＼考へて見ると親孝行をしなければならぬと云ふ道理がよく分つて来る。今こ

れから親孝行をしなければならぬと云ふ五つの理由を考へて見ませう。

注意——左の筋書を適當に布衍して話して下さい。

一、父母は誰よりも優つて、私共を愛して下さるから。放蕩息子が困つて居る時に、誰も助けて呉れなかつたが、家に歸れば親は涙を流して歓迎して呉れた。

(例)或る人に三人の子供があつた。それで誰か其の中の一人を貰ひ度いと云ふ人があつた。三人もあるのだから一人位あは上げて宜からうと思つた。それで父は、誰を上げようかと考へた。總領の子供の顔を見て「これはお父さんに似て居るから余所へ遣るのは惜しい！」二番目の子にしようか。これはお母さんに似て居るから惜しい！」さあ三番目が一人残つた。「いや／＼これはお父さんにもお母さんにも兩方に似て居るから惜しい！」と云つて、到々餘所へ上げることを止めてしまつたと云ふ。幾人あつても親は子供が可愛いのである。

二、父母は私共に世話をして下さるから。(イ)身體の事、(ロ)勉強の事、(ハ)善い人になれるやうにして下さる事等。放蕩息子は困つて始めて親の御恩を知つた。私共が困らずに居るのが親の御恩である事を知らねばならぬ。

(例)或時一人の男の子が、少しづつ、母の御用をして上げたことを書き並べて勘定書を拵へた。母の御用をして上げたから駄賃を戴かねばならぬと思つた。すつかりで母が自分に金五十錢程の借金があると云ふのであつた。母はそれを見て、金五十錢程のお金を子供に渡した。そして御自分も勘定書を拵へた。其の子は十歳か十一歳であつたと見える。十年間楽しい家庭に居らせてあげた事、食物、着物、病氣の時の丁寧な看病、何時も親切にして上げて居る事等を書き並べて其の合

計を「ただ」と書いた。子供は大層耻ぢ入り、さつき戴いたお金を母に戻し、母に抱き附いて、其の濟まなかつたことをお詫言ひした。それから以前になかつた程母を大切にし、其の仰せによく従ひ、またよく母のお手傳をするやうになつた。

(例)今の大将の母(前大将夫人)は大将が小さい時に何か善くない事をする、よく云ひ聞かした上で、祈らせその上に「お前は善くない事をしたのであるから罰を受けねばならぬ。併し打たれるお前よりも、打つお母さんの方がつらいので」と云つて可愛い子を打つのは好まないけれども、子供を善い人にならせ度いから、苦しいのをこらへて罰をして居つたと云ふ。さう云ふ風にして育てられた大将が今はあれほどの立派な人物になつた。

三、父母は私共の爲には克己犠牲を厭はないから。暑さ寒さ、困難辛苦、貧乏不自由、生命を棄てることさへも子供の爲には厭はない。

(例)昔、赤染衛門と云ふ母は、子供の病氣が危くなつた時に、眞の神様を知らなかつたからお宮に參つて「何うか私を殺して下さいても宜しうござりますから子供をお助け下さいませ」と祈つたと云ふことである。

(例)英國の炭坑の工夫のストライキがあつた時に、食べる事の出来ぬ人が澤山で困つた。困つて居る人々に救世軍の婦人土官がパンを配つてあげた。一軒の家へ一塊のパンを持って行つてあげると、お母さんはそれを五つに切つて五人の子供に一つ宛與へた。土官はそれを見て「あなたの食べるのは」と尋ねると、そのお母さんは「子供が食べるのを見れば、それで私のおなかは一杯になります」と答へた。有り難いではないか。何處の親でもさう云ふものである。

四、父母は私共よりも年が上て、物をよく知つてお在になるから。(イ)御飯の時には自分よりも兄が上に坐り、兄よりも父は上に坐る。又家で風呂を立てた時には父は普通一番先きに

は入ると云ふ風に年の上な人を敬はねばならぬ。(ロ)雨が降るから傘を持つて行け、遠いからお腹がすく、それではお腹が痛くなる、風を引く、掃除は斯うするもの、蚊帳の畳み方は斯う、御飯の焚き方は何う等と色々な事をよく知つてお在になるから、よく其の教に従はねばならぬ。

(例)一人の男の子が他の村へ遊びに行つた。行く時にお母さんは、歸る時に暗くなるといけなから提灯を持つて行くと仰しやつた。けれども「なあに大丈夫だ」と思つて、持つて行かなかつた。ところが歸りには暗くて道が分らない。道を見失つて藪の中に迷ひ込んで仕舞ひ、沼中に落込むと云ふやうな酷い目に遭つた。それから親の云ふ事をよく聞かればならぬと云ふ事を悟つた。

五、神孝行は神様の御命令であるから。神様がモーセにお授けになつた十誡の中に「汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に汝の生命の長からんためなり」とある。聖パウロは此の誡の事を「約束を加へたる誡命の首」と申して居る。私共は私共の幸福の爲に此の誡を下さつたのである。此の命令を守る者には幸福を約束してお在になる。

主なる教訓

親の恩を思うて、親に孝行を盡せ。

勸告

今申した五つの理由を考へると私共は親孝行をせずには居られません。今朝は自ら省みて親不孝であつた點を悔改め、神様の御赦を願ひ、又一層親孝行の出来るやうに神様の御助を祈りませう。(悔改の座)。

親孝行デー學課、其二 (午後の分)

救主と御母

(ルカ傳二〇卅九—五十二。ヨハネ傳十九〇廿五—廿七)

誦讀聖句——「子たる者よ、なんぢら主にありて兩親に順へ、これ正しき事なり」(エヘソ書六〇—一三)

▲青年科及び少年科

親孝行デーの午後の學課には、イエス様が御母に對して何う云ふ行爲をなされたかを習ふ

のである。イエス様の御生涯は、世界始まつて以來の唯一の完全な生涯である。私共がお手本として一番間違のない生涯である。高壇からルカ傳二〇卅九—五十二を朗讀。

一、幼年時代——御母の喜び。幼い時には定まつた住家がなかつた。ベツレヘムから夜道を歩いて遠い／＼エジプトまで連れて行かれなかつた。其の頃の旅行は中々困難で、道が捗らず、又甚だ危険であつた。歩くか、さもなれば驢馬の脊に乗つて旅行したものである。

終にお住居がナシレ村と定まつた。イエス様が其處で何んなにお暮しになつたかは、聖書の一節に次の如く申してある外に私共には何も分らない。(イ)成長して——身體が大きくなつた、(ロ)健かになり——大きくなつたのみならず、丈夫であつた、(ハ)智慧みち——身體が丈夫であつたのみならず、賢くて考へぶかく、周圍の物を見て益になる事をお覺えなかつた、(ニ)神の恵その上にありき——智慧があつたばかりでなく、神様の恵を受けて居る誠に善い子供であつた。

二、少年時代——御母に従ふ。十二歳時御母とヨセフとに連れられエルサレムの神殿にお詣り

になつた。田舎から出て来て、此の大きな都を見、神殿を見、また集つて居る澤山の人々と一緒に歌を歌ふのを何んなに嬉しくて、お喜びになつたこととせう！御母とヨセフとは、家の方に歸らうとて出發した、併しイエスが後に残つて居ると云ふ事には氣が附かないで居つた。一緒に歸る連の仲間なまに居ることだらうと思つて居たのである。ところが其の晩露營ばんろえいの用意をする時になつてから見ると、見附からない。そこで二人はイエスを探しに道を後に戻つた。

註——これは勝手に家出をしたのは違ふ。マリヤとヨセフとはイエスに何も云はないで、歸つたことは明白である。イエス様は連れて来て下さる迄神殿——父の家——に留つて居たまうた。心當りを探がしたけれども中々見當らない。到々三日の後に神殿に行つて見ると、イエス様は殿の中の偉い學者等の居る學校で、熱心になつて神様の事を尋ねたり聞いたりしてお出でさつた。先生等も皆少年のイエス様の智慧に驚いて居た。御母は「私等はお前さんの事を心配して探して居つたのですよ」と仰しやつた。イエス様はそれに答へて柔しく「何故そんなにお探しになつたのですか、私が私のお父様の家に居るに相違ないと云ふことをお知りにならなかつたのですか」と云つた。「若し私が御一緒に居らなかつたならば、屹度神様の殿で神様の事を習つて居ると思つて下されば間違はなかつたのです」と云ふのと同様な意味かと思はれる。

それからナザレにお歸りになつたが、御母とヨセフとに「順ひ事へたまうた」と聖書に録してある。即ち素直で、よく云附けに従ひ、親を敬うたとの意味である。イエス様が御一生涯の規則してお出でになつたことは、自分の我が儘をせずに御両親をお喜ばす申すと云ふこととであつた。さう云ふ風にして天の父の御用をなされ、だん／＼智慧が増し、背が高くなり、神様からも周圍の人々からも益々愛せられ給うた。人々の考へるところによれば、神殿から歸つて間もなくヨセフは死に、イエス様は後に残された御母の頼みとなり、慰めとなり、又一家の生計を支へてお在になつたと云ふ。

三、成人の後——御母を敬ふ。成人の後に救主は御母の事を思ふ爲に神様の御働を止めるやうな事はなさらなかつた。併し御自分の生命の果てる際までも御母の事を大切になさつた。

御最期の時に、御母が十字架の側に居り、その側に一番愛しておいでになつたお弟子の、ヨハネが立つて居るのを御覧になつた。十字架の上から御母に向ひ、ヨハネの事を語つて「をんなよ（婦人に對する敬語である）、親よ、なんちの子なり」と宣うた。またヨハネに向つては「視よ、なんちの母なり」と宣うた。ヨハネには其のお言葉の意味はよく解つた。救主は最早御自分で御母のお世話をすることが出来給はなかつた。併し其の代りに御自分の最愛のお弟子に御母の事をお頼みになつた。此のお弟子は此の後御母の最大の慰藉、又助となるのであつた。

青年科の組長へ——イエス様の御働に就いて何の同情をも有つて居なかつたイエス様の御兄弟の云ふ事を聞いた爲であつたらう、御母はイエス様を引止めようとなさつた事がある（マルコ傳三〇廿一、卅二、卅五）。イエス様は其の人々の云ふ事を、それは尤もだと認め給ふことが出来なかつた——御自分の使命に従つて生涯を送り給はればならなかつた。イエス様が神様の聖旨を行ふことの出来るやうに、最もよく其のお助をする人がイエス様に最も近い人であるとお教へになつた。私共が神様の御爲に働かうとする時に親や親類が善くない動機から私共を妨げようとする如き場合には此所となるの救主の御手本が役に立つ。

主なる教訓

救主の如くに、親を愛し、敬ひ、また尊ぶことは私共の義務である。

勸告

親孝行の方法として私共は次の事を行ひ度い。(1) 父母を愛し、感謝の意を表す事、(2) 父母の監督の下にある間は、快く速かに其の思召に従ふ事、(3) 父母を敬ふ事——決して無禮な行爲をしたり、親の事を恥ぢたり、罵つたりしてはならぬ、(4) 父母のお手傳をする事——自分が樂をして親にのみ骨折をおさせ申してはならぬ、(5) 父母の生きて居る間は、いはり、あがめ、またお世話をして終まで尊ぶ事。

(例) 或る時救世軍で貧乏な子供等に御馳走をした時に、御馳走の係をして居た一人の女兵士は、今丁度渡した美味しうな甘パンを子供等が嬉しうに食べて居るのを見て居つた。すると一人の小さな娘丈が食べて居ない。確かに渡したとは思つたが、パンを盛つたお皿を持つて行つて、親切に其の娘に尋ねた「ねーさん、あなたにパンをあげましたか、ねー」と。其の小さな娘は皿の上の美味しうなパンを一寸見て、如何にも欲しうなパンである、併し娘は「はい、貰ひました、有り難うござります。けれどお母さんに取つて置いてあげるんです。此處にあるのよ」と云ひながら、其のボロくの着物を小さな手で叩いてパンの在所を告げた。

大正九年十一月十日印刷
大正九年十一月廿五日發行

發行人

東京市神田區一ツ橋通町五番地
チャールズ・デユース

編輯人

東京市神田區一ツ橋通町五番地
山室軍平

發行所

東京市神田區一ツ橋通町五番地
救世軍日本本營

印刷所

東京市神田區鎌倉町三番地
株式會社 榮舍

終

